
元素な彼女と記号な俺

五門玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元素な彼女と記号な俺

【Nコード】

N9600P

【作者名】

五円玉

【あらすじ】

容姿端麗なんだけど、中身が科学オタクな先輩、杵島はがねと、至ってフツートの高校生黒鉄徹哉との、あくまで科学的な……いや、よくよく考えるとそうでもない……まあ、ちょっとズレたコメディーストーリー。

プロローグ（前書き）

初めましてな方。
お久しぶりな方。
さっき会った方。

こんにちは、五円玉です！

今作は以前短編で書いた「元素な彼女は記号な俺と」の続編物となっております。

で、今回のプロローグは、その短編を少しだけいじった物です。

なので、短編のほうを読んでない初めての方でも、全然大丈夫な感じになっております！

むしろ初めての方のほうが、すんなりストーリーに馴染めるかも。

では！

プロローグ

「今日から君はOだ！」

「……は？」

……これが俺、黒鉄徹哉くろがねてつやが彼女に初めて掛けられた言葉である。

「あの、Oって……何？」

俺は当然の質問を返す。

「Oとは酸素に決まっているだろ！」

彼女は胸を張って答えた。

……酸素？

……え？ もしかして、元素記号？

季節は4月……

桜が舞い散る季節です。

ここは私立石鉄高等学校。

俺、黒鉄徹哉の通う、ごく普通の高校だ。

あ、どーもこんにちは。

ちなみに俺は一年生。

今年から入学してきた新入生だ。

「いいか？　ウチの学校は全員何等かの部活に所属しなければならない」

ホームルームの時間。

担任の中澤が、黒板にでっかく“部活”の二文字を書いた。

「部活かぁ……」

まだ知り合いのいないクラスの連中は、だいたい無言。

俺の小さな呟きですら、教師内に響くほど。

……正直、俺は運動が苦手。
結構なもやしっ子。

出来れば文化部がいいなあ。
ってか、文化部じゃなきゃツライ。

「今日から新入生は一週間、体験入部の期間だから、各自色んな部活を回ってみてはどうだ？」

体験入部……

うーん、とりあえず今日はどこへ行こうか？

放課後……

俺はまだ体験する部活を決めておらず、ただただ校内をぶらぶら歩いていた。

もちろん、まだ友達はいないから1人で。

「うーん、文化部か……音楽や美術、写真や華道……どれも難しそうだな」

1人だどついつい言ってしまう独り言。

廊下に響くね。
虚しい。

「……でも、運動部入って、モテモテの青春を過ごすのも悪くはないなあ」

かと言って、俺に野球やバスケの才能はないし……

そうこうしているうちに、いつの間にか学校の北側、特別教室棟の二階、科学室の前に来ていた。

で、何となく足が止まる。

「ここ……科学室？」

科学室って確か……化学部ってのがあったような。

「理科か……俺、あまり理科得意じゃないし……」

どうせ特別教室棟に来たならば、音楽室とか回ってみようかな。

歌自体は好きだし。

よくカラオケ行くし。

「……ってか化学部って、何となくオタクイメーজあるし……」

まあ、どちらにせよ化学部はナシの方向で。

うん、理科苦手だし。

「えっと、音楽室は確か3階……」

……そして、俺が3階への階段を登ろうとした

その時!!

ガラガラッ!!

「今日から君はOだ!」

……え?

何?

今突然、科学室のドアが開いて……

女子生徒出て来た!?

「……君はOだ。この科学部にとってのO。なくてはならない存在」

「……はい?」

その女子生徒を一言で表すなら「可愛い」

セミロングの黒髪、大きな瞳、見事なスタイル。

しかし……

「あ、あの……Oって何ですか？」

アルファベット15番目

Oはローマ字読みで「お」だよな？

って何？

「Oとは酸素の事だろうが！！」

その女子生徒は自信ありげに返答。

「さ、酸素！？」

え、まさか元素記号？

あの理科とかで使う、元素記号！？

「酸素とは、この地球にとって、なくてはならない気体元素だ！！」

「は、はあ……」

何？

突然語りだしたよ、この女子生徒。

もしかして痛い子？

「そして君は、この化学部にとって、なくてはならない存在なのだ
!!」

「え……?」

な、いきなり何なのこの人!?

「つまり、君は化学部にとっての酸素的存在、すなわちOだ!!」

い、意味わからない?

「ようこそ、化学部へ!!」

はい!!!?

「私は化学部部长の杵島きしまはがね。よろしくなO!!」

「……何この展開」

今、俺は科学室の中にいます。

さっき出会ったこの人に、半ば強制的に化学室内へ連行され、現在

に至る。

だって制服の袖を引っ張ってくるし……

「あゝ」

「何だO？」

Oの件のツツコミは置いといて、

「俺、そろそろ体験入部の時間なんで、音楽室へ行かないと……」

マジ時間だし。

それに痛い子と痛い話する趣味ないし。

「む？ 何を言っているんだO？」

「いやだから、体験入部の時間が……」

「君は既に化学部の一員ではないか」

え？

「え？ 今なんて？」

空耳か？

「だから、もう君は化学部の一員だ！！」

「はい！！？」

え！？ 何で！？

「今、化学部員は私一人しかいないんだ。だから、部活動の最低維持人数である五人を目指し、部員勧誘中なのだ」

ビシッと手のひらを掲げ、指をパーに。

「だから何なんですか！？」「君、部室（科学室）の前で立ち止まっていただろ？ 新入生は緊張して中々部室へ入れないと顧問から聞いていたので、こちらから迎えてやったんだ」

「……………」

笑顔の杵島って人。

え…………

まさかの勘違いですか。

「現在廃部の危機に面している化学部にとって、まさに君は必要な

存在、すなわちO!!」

「要は人数合わせかッ！」

ってか、それ以前に

「俺、化学部なんて入る気全く無いんですけど！」

G o t o 音楽室。

「……何を言っているんだO!! 　もしかしてHの方が良かったのか？」

「活字注意!!」

活字だと水素以外の捉え方が……

その前に、その考えが浮かんでいる俺って一体……

「ってか、水素酸素関係ありません!! 　俺は音楽室へ行くんです!!」

「そうか……やはりここは間を取ってC aに……」

「人の話を聞いて下さい！」

石鉄高校化学部

去年までは三年生四人と一年生一人（杵島）の五人で活動していたらしい。

あくまで“らしい”。

しかし、この春三年生四人が卒業してしまい……

「私は先輩方の意思を継ぎ、この化学部を継続させてみせる!!」

杵島はがね、二年生。

化学大好き子。

「……………」

何だか……音楽室へ行きづらい感じになってきてしまった……。

「あの……き、杵島先輩？」

「何だH？」

「……結局水素……じゃなくて、先輩はなんで化学部に？」

こんな人数ぎりぎりの部活、どうして……

「私は化学が好きだからだ!!」

答えは単純明確だった。

「……HとOでH₂O、すなわち水素と酸素で水が出来る。これ、凄いい思わないか？」

「凄いいと言われても……」

正直わからない。

「全く違う原子やイオンが集まって、私達の身の回りの物になるんだぞ!!」

「……………」

「炭素と酸素で二酸化炭素、水素とナトリウムで水酸化ナトリウム。色々な物から色々な物が生まれるんだ、化学はな」

「……………」

先輩はにこやかな笑顔を見せた。
無邪気な笑顔。

「発見と驚き、そして不思議。どれも化学の楽しさの一部だと思わないか、Znよ」

「だから何故人を元素記号で例えるんだ？」

しかもZnで……

「と、言う訳でようこそ、化学部へ!!」

「……やっぱりそうなるのかッ!!」

きっと悪気はないのだろうけど。

でもなあ……

「あの、そもそも俺、理科とか化学とかは苦手で……」

「大丈夫だP!!」

まーた変わったよ、呼び名。

「わからない事があったら、“石鉄高のMg”こと、この杵島はがねが1から教えてやる!!」

「石鉄高のマグネシウムっすか……」

あ、何気に俺、化学得意かも。

「違うぞ、石鉄高のマッドサイエンティストガールの略だ!!」

「あ、そこは元素記号じゃないんだ!!」

逆にむず痒い!!

ってかマッドサイエンティストガールて!?

で、翌日。

まだ今日は体験入部期間なので、またしてもぶーらぶら中。

相変わらず友達無し男だから、1人。

「……に、しても」

昨日の化学部は凄かったなあ（色んな意味で）。

「……よし」

今日こそは音楽室へ行こう!!

化学部へは行かない!!

心に誓おう!

でもね、音楽室へ行くには、科学室の前を通らなければならないの
であって……

バリ〜〜ンッ!!

「うおっ!?!」

案の定、科学室の前を通った時にとてつもない爆音が!!

しかも爆音は科学室の中から!!

「……何だ?」

その時

ガラガラッ!!

「おお、君か!!」

科学室のドアが開き、中から杵島先輩が現れた。

しかも白衣。

安全ゴーグル付き。

「あの……今の音は……一体?」

「ああ、今、ニトログリセリンをハンマーで叩いていたんだ!!」

「なっ!!!!」

あ、危ない!!

ってか学校の科学室にニトロあんのッ!?

「あとは……酢酸と蔗糖水溶液を混ぜたり、スチールウールを燃やしたり、蜜柑に電流流したり……」

「ニトロ以外は小学生レベルの実験ばかり!？」

ってか、化学部って日頃何してんの!?

「あ、リトマス紙余ってるから、良かったら使ってみる?」

「いや結構です」

小学生の時にやりました。

「そうか? まあとりあえず今日も寄っていつてくれA1!!」

「今日はアルミニウムですか俺!!」

あー引っ張るな袖。

で、今日も来てしまった……。

杵島先輩は笑顔で俺を科学室へ引っ張り込むからな……抵抗が出来ない。

「良かったら、さっき電流流した蜜柑でも……」

「いりません」

何を食わす気だッ!!

「そういえばBe、液体窒素って知ってるか？」

ベリリウム……

「液体窒素ですか？ まあ名前程度なら……」

確か-196度の液体だっけ？
バナナで釘が打てます。

「良かったら、手え入れてみる？」

「はあ!？」

ちょ、えゝ!？

何を言ってるんだ!？

「確か準備室に……あ、あった!! 液体窒素」

「ちょ、ちょっと待って下さい!!」

一旦落ち着こう!!

そして杵島先輩、その手で持っている銀色の容器を一旦降ろせ!

「どうしたHe?」

「ヘリウム……じゃなくて、それ手え凍るでしょ!!」

—196度だよ?

軽く手が腐るよ!?

「ああ、そんな事か」

「何? 今のそんな事でくくれるような質問だった?」

すると杵島先輩は少しだけ笑顔に。

「一瞬なら大丈夫。液体窒素にとって、人間の体温はまさに灼熱。何しろ—196度と36度だから、軽く160度の差がある事になる!」

俺にビシッと指差す先輩。

「……つまり?」

「液体窒素に人間の手を入れた瞬間、液体窒素は蒸発する!! 熱々の鉄板に水滴を落としたみたいに!!」

「……そ、それ、本当ですか?」

な、なんか……
何と言うか……

「大丈夫!! でも本当一瞬だけだぞ? じゃないと体温が低下して、それこそ本当に手が腐っちゃうから」

「……やっぱり遠慮しておきます」

まだ手を失いたくない。

「そうか? ……じゃあせめて、グミとかマシユマロとか凍らせてみるから、是非食べてみてくれ!!」

すると、近くの戸棚をこそごととあさり出した杵島先輩。

「グミですか……」

あ、ちよつと食べてみたいかも。

カッチカチのグミとか、あめ玉みたいになりそうだな。

その時、戸棚をあさっていた先輩がこっちへ振り向く。

「……あ、そういえばグミ切らしてた」

「……期待させといてそれですか」

何だかな～……
……でも

「じゃあまた明日来てくれ!! 明日にはグミとマシユマロとワカ

メを用意しておくらかな!!」

「ワカメって……もしかして増えるの!？」

「……秘密だ」

「なっ……秘密って、教えて下さいよ!!」

「明日来てくれれば分かるかも」

笑顔の先輩。

「うむむ……」

でも、何か……

「フフっ、是非来てくれよな、O!!」

「俺は元素記号じゃなくて、黒鉄徹哉です!!」

何か、楽しいかも。

化学!!

主に液体窒素がだけど。

「俺、か、化学部に入部しようかな？」

体験入部最終日。

昨日は音楽室で音楽部の体験をしたが……

以下、回想。

『黒鉄クン、もっと腹から声出して！』

「は、はいッ！」

『黒鉄クン、もっと足に力入れてッ！』

「は、はいッ！」

『黒鉄クン、もっとアタシを見てッ！』

※『』のセリフを言っている教師は男性。

「は、はぁ……」

『いいから見てッ、さぁもつとッ！』

「……………（嫌々ながらのジト目）」

『うふふ……よし、じゃあ視線はアタシで、さぁ歌うわよッ！』

「……はい（涙声）」

『さんはいつ、ドナドナドーナードーナー♪』

「……………」

結論。

つまんなかった。

もう二度と行かねえ。

トラウマ増えた。

「入部って……お前はもう化学部員だろLi?」

「……………」

一瞬、この化学部がまともに感じてしまった俺は負けだな。
何事も直感が大事。

「部活保持にはあと三人の部員が必要か……」

杵島先輩、右手の二つの指を折り、数を数える仕草。

「……杵島先輩」

「なんだNe?」

……元素記号なら元素記号で、呼び名は一つに統一して欲しい。

「俺、化学部のビラとか広告とか作ってみます!」

多少はやる気を見せねばな。

「おお、そうか!!」

杵島先輩、にっこり。

化学部か……

「……そうだ先輩、この部活の目標とかってあるんですか？」

ビラに書く材料になる。

「む、目標か……うーん、そうだな……」

先輩、悩む仕草。

そして先輩は、ガバツと立ち上がった。

「よし、化学部目標は“みんなに化学の楽しさを知ってもらう”！」
「！」

「……先輩が言える程の事ですか、それ？」

グミの補充を忘れてたアンタが。

「じゃあ“この化学部を学校一の有名な部活にする”で！」

「切り替え早ッ！！」

まあ……とにかく、それでいいか。

と、まあ杵島はがねの化学部は、ここからスタートしたのでした。

プロローグ（後書き）

次回より、本格的にストーリー始動です！

元素1 そんなこんなで始まる俺の部活ライフ

「Oよ、君は博士になるのだ!!」

「……ワッツ？」

……こんにちは。

黒鉄徹哉です。

ここは勿の論、私立石鉄高等学校。

そして勿の論、科学室。

そして、俺は唐突に杵島先輩から将来を決めつけられた。

ってか、

「何の博士ですか？」

今日は4月の終わり。

前回より少しだけ時は進みました。

現在、石鉄高化学部は、俺と杵島先輩の二人だけです。

「4月が終わるまでに、あと部員3人を確保しなければ!!」

俺に謎の博士命令を出した杵島先輩。

現在、先輩はビーカーに塩酸いれてます。

かなりしゅわしゅわ。

何すんの？

「ってか先輩、あと部員3人、一体どうすんですか!？」

正直ヤバイ。

あと一週間もない4月。

この間に、部員の最低数である5人の部員を確保しなければ、廃部になってしまう!

つまり、あと3人!

「先輩、そろそろいい加減に考えないと……」

入った部活がすぐに廃部ってのは避けたいし。

その時、ビーカーに塩酸注入中の先輩に動きがッ!!

「……Oよ」

「は、はい？」

……相変わらず元素記号呼ばわり。
これに慣れつつある自分が嫌だ。

先輩はガラス製の棒で塩酸ビーカーをぐるぐるかき混ぜ中。

「……Oよ、博士になれ」

「だから何故!？」

先に言っておく。

杵島先輩は、基本的にどっかが抜けてる人だ。

「よいかO、博士と言うのは、頭がいいんだ」

「は、はあ……」

だから何だ。

「Oが頭良くなれば、部員勧誘の方法を考えてくれるだろう？」

「……？」

何言ってるんだこの女？

……失礼、この先輩？

「あ、あのー先輩？ それは一体……？」

先輩は相変わらず塩酸ぐるぐる。

あ、今何かビーカーに入れた。

「Oは博士だ。博士になって、部員勧誘の方法を考えてくれ！」

「………」

分かった。

杵島はがねはバカなんだ。

天然？ 電波？

NO！

バカ！！

「先輩、それは博士でなくても考えられますよ？」

正論で対抗。

「Oは効率の良い勧誘方法を研究する博士」

先輩、塩酸ぐるぐる。
頭もぐるぐる。

「……つまり、それただ単に俺に勧誘方法を考えろって事？」

自分で考えるのが面倒くさいって事？

「……それでこそ化学部の酸素的存在、O」

当たりかッ！？

「任せたぞ、O」

先輩、塩酸の中に大量の卵白を投入！！

ってか卵白！？

どっからそんなもんを……

「……先輩、入部したての後輩に全部投げやりて……」

……この人、本当に先輩なのか？

「……中和完了！」

……卵白はアルカリ性。
知ってた？

杵島はがね

塩酸と卵白混ぜて喜ぶ高校2年生。

黒鉄徹哉

これから先輩にこき使われる事になる哀れな高校1年生。

これが現実なのです。

翌日、昼休み、教室。

俺は最近出来た友人と昼飯中。

ちなみに友人の名前は宝崎くん。

至ってフツーの子。

どっかの先輩とは大違いで。

「なあ、黒鉄？」

「あ？」

俺は持参弁当。

宝崎くんはパン。

ちなみにあんパン。

あ、決してアンチバイ菌の動くあんパンではなく。
フツーのあんパン。

「お前さ、確か化学部に入っただよな？」

「……一応」

昔の俺はどうかしてたぜえい。

「なあ、その……化学部って、杵島先輩いるだろ？」

「……ああ、いるけど何か？」

ニトロをハンマーで叩く女。

危ない。

「……杵島先輩、やっぱり彼氏とかいるのかな？」

「……いたら凄い」

あの化学バカについていけるヤツがいたら凄い。

「じゃ、じゃあ、彼氏いないの!？」

鼻息荒い宝崎くん。
青春男子。

「しらねえ。自分で聞けよ」

俺はそんな思春期真っ盛りの青春男子を見捨てる事にした。
鼻息荒いし。
フンガーッて。

「そんな……お前、同じ部活なんだろう? 聞いてきてくれよ!」

宝崎くんは必死。

「だから、自分で聞けって」

「そんなあゝ」

宝崎くん、がっかりしながらもあんパンを一口。
俺も無表情で弁当の唐揚げを一口。

……まだ、俺ら1年生が高校に入学して1ヶ月。

既に、杵島先輩の噂は1年生にも回ってきている。

……確かに、杵島先輩の第一印象は……可愛いと思う。
無邪気そうな笑み、見事なスタイル。

けど、肝心の中身が……まあ、残念。

「こんにちは」

その日の放課後。

俺はいつも通りに科学室へ。

正直、結構面倒くさい。

え？ 何故かって？

……そりゃ、言わんでも分かるでしょ。

「あゝ、今日もまたパシリ的な部活になんのかなあ」

絶望視。

で、俺は科学室へ入室。

部屋の扉に手を掛け、横にスライド。

「あ、あう……や、やめ……あ……」

「さあCよ、ここにサインをするのだ！」

「あ、あのお……わ、私……化学部には……あッ、やめっ……あ……」

「サインしないと、もっとくすぐるぞC！」

「あああッ……」

……………。

あれ？ 教室間違えたかな？

俺は教室の入口に掛かっているプレートを確認。

科学室

って書いてある。

うーん……俺、疲れてんのかな？

目の錯覚？

「さあさあCよ、サインをするのだ!」

「やめっ……あっ……やめて……」

………ちよいまち。

俺の目の錯覚でなければ今、科学室の中で……

杵島先輩が見ず知らずの女子を……襲っている。
正確にはくすぐっている。

杵島先輩は真面目そうな表情。

一方の相手、大人しそうな女子生徒は超赤面。

……うん、ニトロ以上に危ないな。このシチュ。

「いいからサイン、サインをするのだC!」

「やめっ……てっ……下さ……い」

……とりあえず

「オイ、何してんだテメェら」

冷静に対処。

元素2 拉致はよくないと思いました

「あの……えっと、ことつら琴浦さん……で、いいのかな？」

「は、はい……」

琴浦 咲奈さな

何とも大人しそうな女子生徒。

黒髪のロング、清楚な感じ。

俺と同じ1年生だが、クラスは違う。

……で、発育は良い感じ……げふんげふん。

……そう、ついさっき杵島先輩に捕まっていた女子だ。

「私、廊下に貼ってあるプリント見て……そしたら、突然科学室の扉が開いて……後ろから……」

うわ……超小声。

ってか、

「杵島先輩、それ拉致ですよ!!」

俺は後ろでゴソゴソと何かしている、拉致先輩にツツコミ。

「Oよ、お前にも言っただろ？ 新入部員は恥ずかしがって、中々中に入れないものだ」と

「確か俺もそのパターンで引きづり込まれた気が……」

プロローグ参照。

「つか先輩、今の琴浦さんの話聞いてました？ 琴浦さんはプリント見てたんです。入部じゃないんです!」

琴浦さんは俯き気味。

杵島先輩は何故か蜜柑の皮を取り出してる。

ゴミあさりかッ?

……っつか、誰も話聞いてないなコノヤロー。

「……時にCよ」

杵島先輩、突然変な事を言い出す。

「……………」

「……………」

……俺、Oだから違うよな?

Cは……炭素?

「……C、聞いているのか？」

……ああ。

多分、琴浦さんの事だ。

さっきもCとか言ってたしね。

「杵島先輩、ここに炭素って人はいませんか？ 俺と琴浦さんだけです」

ちょっと反抗してみた。

「……琴浦、今日から君はCだ」

決め付けてきたッ！？

「し、Cですか……？」

琴浦さん、相変わらず小さな声だな。

「ああ。今日からC、この化学部にとっての炭素的存在、Cだ！」

ビシッと決める杵島先輩。

炭素的存在……。

「あ、あの……私、か、化学部には……」

琴浦さん、かなりオドオド。

やっぱりそうだな。

「杵島先輩」

俺はビシッと意見。

「なんだ〇？ お腹でも減ったか？」

……真顔で言うか。
ってか、なぜその話題！？

「違いますよ、琴浦さんの事です！」

「…………え？」

少しだけ驚きの表情を見せる琴浦さん。

「彼女は化学部に入るって、自分で言ったんですか？」

杵島先輩、何故かパンパンの風船を準備。
話、聞いてんのか？

「もし、先輩が勘違いで強引に入部を勧誘してんなら、それはよくないと思いますよ？」

俺と違って、琴浦さんにはツツコミスキルはないみたいだし。

「あ、あの…………」

モジモジ琴浦さん。

…………なんか可愛い。

「……私、理科は苦手で……確かにまだ、部活には入っていませんが……」

……やっぱり、自分を炭素呼ばわりしてくる先輩は嫌だよな。
俺も嫌だもん。

……酸素呼ばわり。

「……………」

その時、杵島先輩が何故かちよつとだけ笑った。

「き、杵島先輩？」

もしかして壊れた？
入部を断られて、壊れたのか？

……まあ、元々壊れている人だけけど。

しかし……

「……分かった」

杵島先輩、笑顔で琴浦さんに接近。
コワッ！！

「Cよ、今からお前に化学の楽しさをらせてやる！」

……え？

何言ってるんだ？

琴浦さんはキョトンとしてるし。

「……もし、化学って面白いなと感じたら、是非入部してほしい」

「……なるほど」

つまり、体験入部。

「逆につまらなかったら、帰ってもらって結構」

これならフェアだ。

拉致よりずっとマシ。

「は、はい……」

相変わらず琴浦さんはキョトン状態。

ってか杵島先輩、どうやって琴浦さんに化学の楽しさを……？

あ、まさか液体窒素とか？

ちなみに、まだワカメの件、なあなあなまま。

「では、これより私と助手Oによる、第一回科学ショーを開催する
！」

俺、助手か……

その時、先輩はさっきの蜜柑の皮をクイッと摘み、風船に向け果汁を発射!!

あれ、目に入ると痛いんだよね。

で、

パァンッ!!

「うおっ!!」

「っ!!」

突然風船が割れた!

俺と琴浦さん、超ビックリ!!

「では、ショーの始まりだ!!」

杵島先輩はノリノリでした。

元素2 拉致はよくないと思いました（後書き）

元素彼女連載開始記念！

キャラクタープロフィール紹介！！

No. 1

黒鉄 徹哉

私立石鉄高等学校1年1組在籍。

男性・15歳・A型

誕生日…8月18日

身長…173？

体重…58？

好きな物…音楽鑑賞、意味のない散歩

嫌いな物…動物全般

本作品の主人公。

基本ツツコミ役。

学力はまあまあ、体力はもやしっ子。

カレーはライスとルーを分けて食べる人。

ちなみに辛党。

まあ、カレー以外は普通な人間です。

元素3 これは一応ヒーローショーだからね？

「わっはっはー、俺は怪獣酸素星人、地球の酸素をうばってやるー
(棒読み)」

ガシャーン、ガシャーン

俺は科学室内を数歩だけ歩く。

「わっはっはー、酸素は全て、おいどんの物だー (棒読み)」

俺はゲラゲラ笑う。

多分、目は笑ってないと思うけど。

その時

「まてえい！」

カーテンをマント代わりに装備している杵島先輩、机の上から飛び降りる。

スカートひらひら。

スタツ！！

着地成功。

「むむむ、お前は誰だ？ (棒読み)」

構える俺。

「私の名前は化学マン！ 地球の元素を守る、スーパーヒーローだ！」

杵島先輩、ビシッとキメポーズ。

シャキーンッ！

「酸素星人、地球の酸素を守るため、お前を倒す！」

「ふっふっふ、おいどんを倒せるかな？（棒読み）」

その時、杵島先輩が一気にその場から跳躍。
きゃー身軽。

そして……

「覚悟しろ酸素星人、これが必殺……」

杵島先輩、右腕を高らかに上げる。

俺、先程から構えのみ。

「化学パーンチ！」

……まあ、普通のパンチ。

それが俺の顔に直撃！

バコッ！！

「痛ッ！！」

予想以上に痛かった。

「ぐあー、や、やられたー（棒読み）」

ドッスン。

俺は内心でツツコミながら倒れた。

……シヨーって、こっちのシヨーかいッ！

まさかのヒーローシヨー。

「いつでも正義が勝つのだ！！ わっはっは！！！」

高らかに笑う化学マン。

ってか、アンタはウーマンだろうが。

ちなみに琴浦さん、呆然状態。

だよねえ。

「Cよ、私の化学ショーはどうだったか？」

酸素星人を殴った自称化学マンが、一般人琴浦さんに接近。

「えっと……あの……その……」

琴浦さん、答えに詰まる。

ちなみに俺、まだ倒れてます。
ってか、もう嫌。

普通にグーは痛かった。

「Cよ、感想を聞かせてくれ!!」

自称化学マン、超目が輝いとる。

「えっと……まあ、面白……かった……かな？」

琴浦さん、目が泳いでいるよ？

「そうか、面白かったか！　そうかそうか!!」

満面の笑みを見せる杵島先ば……いや、自称化学マン。

もう今回は自称化学マンで通してやる。
意地だ。

「では、入部のほうは……?」

あれで入部させるのか?

さすがにひどいと思うぞ自称化学マン。

「……………」

沈黙琴浦さん。

ちよつと俯き気味。

で、

「……分かりました。入部……します」

……え?

嘘!?

あれで!?

ちよつ……え?

はあ?

マジで?

「本当かC? それは嬉しいぞ!!」

自称化学マン、嬉しさを表現するためにピョンピョン跳びはねる。

あー、埃舞うう。

倒れてる俺、超埃吸っちゃうがな!!

「げほっげほっ」

むせた。

「私……今まであまり友達が出来なくて……」

俺がむせている間に、琴浦さんが何やら心境を語り出した。

「その……なんか二人をみてたら……なんか……面白くて、楽しくて……」

なるほど、ショーではなく俺ら自身が面白かったと。

ほえー、なんかグサツと来た。

「だから……」

俯き気味だった琴浦さん、今はしっかりとこちらを向いていた。

「……そうか、分かった。入部を歓迎するよC!!」

自称化学マン、ニツコリと笑顔。

「よ、よろしく願いしますっ!」

琴浦さんも、笑顔になっていた。

……化学部らしい事、一切してないのに。

まあ、何はともあれ、これで部員は3人になった。

部長、杵島はが……自称化学マン

副部長、俺^{らしい}

書記、琴浦さん

さて、あとは2人だな!!

元素3 これは一応ヒーローショーだからね？（後書き）

キャラクタープロフィール紹介！

No. 2

杵島 はがね

私立石鉄高等学校2年2組在籍。

女性・16歳・B型

誕生日…10月11日

身長…165?

体重…45?

好きな物…化学、特撮ヒーロー物、おでん

嫌いな物…化学以外の理科の科目（物理学とか）

本作のヒロイン的な感じかな？

基本ボケ役。

ちよっとズレた思考の持ち主。

でも学力は学年でも上位だったり。

運動もそこそこ。

日曜朝はもちろん特撮ヒーロー物を見てる。

見た目は可愛いが、化学部副部長曰く「中身が残念」

元素4 スクールでタウンタウンで……もう俺駄目だ

「あゝ……部活面倒臭い……」

琴浦さんが化学部に入部した日の翌日。

現在朝7時。

場所は、石鉄高校前。

……いつもより1時間も早い登校です。

「……はあ」

ため息をつく俺。

「かったるいなあ」

今日は、杵島先輩が朝練やりたいて言っただので、まあ、朝練やり
ます。

そもそも、化学部って何を練習すんの？
朝練意味あんの？

そして、今日の朝5時に電話で

「Oよ、今日は朝練やるから7時に学校へ来い!!」

って言うのは止めて頂きたい。

朝5時だぞ？

まだいつもなら寝てる時間帯だぞ？

なのに、5時に携帯の呼び出し音で嫌々目が覚めて……

当日に朝練やるからって、いきなりの呼び出しは……迷惑だ！！

「あー眠い……昨日はあんまり寝てないのに……」

愚痴を言いつつも、とりあえずは科学室へ。

ガラガラっ

「おはようございます……ん？」

結局、色々と愚痴言いつつも科学室へ来た俺。

……偉いでしょ？

で、科学室の扉を開けた。

そしたらね……

「おお、ちゃんと来たかOよ!!」

「お、おはようございます……黒鉄君」

「……………」

まあ、科学室内には杵島先輩と琴浦さんがいた。

……何故かスク水で。

「……何してんだ、あんたら？」

まずは冷静に対処。

「何って、これから部員勧誘に行くのだ！」

ビシッと俺を指差すバカ先輩。

……は？

「……部員勧誘っすか……じゃあ何故水着？」

しかもスク水。

さらに旧式。

「ふっふっふ、何故かって？　それはな……」

にやけてる杵島先輩。

モジモジ琴浦さん。

「これなら、男子を虜にしやすいからだッ！！」

「……………」

どや顔すんなよ、杵島先輩……。

「いいか〇よ、世の中の男子たるもの、このような体のラインを強調するような水着には弱い」

「……………だから？」

もう嫌だ……

「これなら、男子諸君も部活に入ってくれるかもしれん！」

ガハハっと、高笑いする杵島先輩。

「……バカだ、この人すげえバカだ」

今、春だしね。
バカが増える季節。
ってか、

「で、何で琴浦さんまで着てんの？」

「うえっ!？」

突然ふったせいとか、ちょっとビクッとした琴浦さん。
顔、真っ赤っか。

「それは……あの……部員を増やすため……に……」
相変わらずモジモジ。

「……琴浦さん、いくら先輩からの命令だからって、嫌なら反抗してもいいんだぞ？」

この人は純粹すぎる。

「うう……」

より真っ赤になった。

……に、しても

「……………」

琴浦は見事な凹凸ラインだな……
まさにボンキュッボ……げふんげふん。

逆に杵島先輩は……なんとまあ、平坦な……

「……ほら、Oは虜になってるではないか」

俺の顔を覗きこむ杵島先輩。

「なっ……ゲホッゲホッ!!」

むせた。

くそっ、俺とした事が……

「ほら、顔が赤いぞO!!」

「あ、いや、別に見てた訳じゃ……」

く、苦しいか？

けど、やっぱりこの2人はなんとも対照的な……その……体のライン
ンと言うか……

「……また見てる」

「うおおッ!？」

しまった!!

で、

「さて、じゃあ部員勧誘にでも行くか！」

何故か試験管を持ったスク水杵島先輩、科学室の出入口へ。

ってか

「え、マジでその格好で行くの!？」

バカだろ!？

「当たり前だろ？ 既に効果は実証出来ている訳だし！」

あーッ、さっき出来た俺の心の傷がッ!!

「だから行く。Cも早く来い!!」

琴浦さんに向かって、ちょいちょいと手招きをする杵島先輩。

「えっ……あ、本当に……うう」

かなり困惑気味の琴浦さん。

「何をしているC、早くしないとS H Rの時間に……!!」

「で、でも……は、恥ずかしい……」

「恥ずかしいだど？ そんなの、慣れてしまえばどうって事ないぞ！」

「でも……」

……もう見てらんない。

「……杵島先輩、スク水はアウトっすよ、普通に」

俺は落ち着いて対処。

「何故だ？ Oは私達の事を凄く見ていたではないか！」

「ぐはっ」

真顔で言うな……

「け、けど、そんな姿で校内徘徊したら……絶対に怒られますよ？」

特に生活指導の教師辺りから。

「大丈夫だ〇、その時は逃げる!!」

「根本的な解決になってねえ!!」

思わず机をバシーン!!

……いかんいかん、バカ相手に熱くなるな、俺!!

「逃げるって……そんなリスクを追うよりか、普通に制服でビラ配った方が……」

「だが、〇は私達の事をジロジロ見ていたではないか!!」

「ぐはっ……ま、まだ言うかソレ……」

チクショー!!

そのネタ、墓まで持って行く気かコイツ!?

「うう……」

琴浦さんは相変わらずオロオロ。

……オロオロしてる暇があったら、早く着替えちゃえばいいのに。

……ああ

ちょっと不謹慎だけど……

琴浦さんがオロオロすると、その……まあ……

何と言うか……せ、青春が……揺れに揺れて……。

素で言うなら……その、胸がですね、左右にタユンタユンって……

目のやり場に困る。

高1は思春期真っ只中だからね。

……許せ。

「ほら、〇、見てるじゃないか」

「……はッ!？」

あ!!!

またしてもしまった!

「やはり効果は抜群だ!!」

「いや、あの、これは違っ……」

あーッ!!

俺のバカヤロー!!
本能のバカヤロー!!

「やはり行ってくる! 化学部の若き男子新入部員を求めて!!」

「え? 俺、もうシニアの部類なの!？」

ってか、ガチでスク水は駄目だ!!

逆に変な噂が立って、人が寄り付かなくなる!

そして、杵島先輩が扉の取っ手に手を掛けようとした
その時……

ガラガラっ

「……ん？」

廊下側から、扉が開いた。

杵島先輩の手は、空中でストップ。

そして……

「すみません……ココ、カガクブデスカ……アン？」

そこにいたのは、金髪の男子。

……金髪？

で、扉のすぐ内側にいた杵島先輩と鉢合わせ状態に。

「……ココ、カガクブデスヨ……ネ？」

金髪男子、スク水杵島先輩を見て若干フリーズ。

一方の杵島先輩は……

「……誰だ？」

頭に？マーク。

……誰？

元素4 スクールでタウンタウンで……もう俺駄目だ（後書き）

キャラクタープロフィール紹介！

No. 3

琴浦 咲奈

私立石鉄高等学校1年4組在籍

女性、15歳、A型

誕生日…5月12日

身長…158?

体重…41?

好きな物…お菓子、温泉、お笑い番組

嫌いな物…体育、生で食べる物（刺身とか）

物静かで恥ずかしがり屋な性格。

それ故、中学では友達が少なかった。

運動は大の苦手。

勉強は文系派。

意外とお笑い好き。

Oさん曰く、ナイスボディの持ち主。

元素5 その時、俺は人の表と裏を見てしまった

「マイネームイズジョンソン。ナイスチューミーチュー！」

Oh、ナイスなカタコト英語ッ!!

只今、この化学部にとある金髪の方が来訪中。

中臣ジョンソン君。

石鉄高校1年生。

アメリカ人と日本人のハーフだそうなの。

金髪の髪に青い瞳、黒ふちのメガネ。

日本人の要素が見当たらない……

「ボク、リカガダイスキデス。ダカラ、カガクブニタイケンニユウ
ブニキマシタ!」

「マジでか?」

そう、何とジョンソン君は化学部への入部希望者だったのだ!

あ、ちなみに今、杵島先輩と琴浦さんは着替えに行っちゃってるか
らいません。

詳しくは前話。

なので、俺がジョンソン君の対応中。

「アノー?」

「は、はい?」

ジョンソン君、科学室内をキョロキョロ。

「カガクブツテ、ヒゴロナニヲシテイルンデスカ?」

「……………」

早速答えに詰まった。

……日頃、何してたっけ、俺?

日頃の部活

杵島先輩がくだらない実験をして自己満足する。

俺、後ろからそれを見ているだけ。

……………。

「……化学部では日頃から、高度な化学実験を行い、それをレポートにまとめています」

部員確保優先のため、9割方嘘の情報を流す。

そう、ここでジョンソン君に入部を断られたら、4月中に5人の部員確保するのが難しくなる。

「コウドナカガクジッケンデスカ……」

うーん……と、何かを考え込むジョンソン君。

ってか、カタコトの日本語聞き取りにくいかな。

読者、カタカナだと読みにくいかな。

「アノー、コウドナカガクジッケンツテ、グタイテキニドンナコトヲ？」

「……え？」

ジョンソン君、まさかの不意打ち。
青い瞳が俺を凝視。

「ぐ、具体的にどんな事かって？」

「ハイ！」

輝くジョンソン君の瞳。
理科、好きなんだね。

日頃の実験内容

リトマス紙

蜜柑に電流

中和実験

風船パーン

「……主に、ニトログリセリンや液体窒素を使った、特別な実験を少々」

そう、ハンマーで叩いたり、グミ凍らせたり。これは7割方本当だろ!?

「ニトログリセリンッ!? ソレ、キケンナバクヤクデスヨネ?」

ジョンソン君、興味津々。

「え? あ、ああ……」

ニトロって、爆薬なの?

俺、あんまし知らないんだけど……。

「スゴイデス、オモシロソウデス!!」

ジョンソンテンションアップ!!

俺、疲れてきた。

あと、いい加減カタコト日本語やめれ。

「ホ、ホカニハドンナコトヲ？」

「ほ、他にはって？」

他には？

何をしてたかって？

化学部の日常

基本ぐーたら。

「……他には、まあ、色々やっています」

……茶化す。

「イロイロデスカ……ウーム」

おっと、何かを考え始めたジョンソン!!

なんか怖い。

「……ジャア、ヒトツキイテイイデスカ？」

その時、何故か突然真剣な眼差しになったジョンソン少年。

キリッとしてる。

「質問か？ ど、どうぞ？」

やべっ

俺、ちよつとキョドってる。

「ジャア……」

そして、ジョンソン君は禁忌に触れた。

「……ブチヨウサンハ、アナタデスカ？」

真顔ジョンソン。

「……NO」

俺、即答。

で、

「ジャア、ブチヨウサンハイマドコニ？」

……こやつ、さっきの白昼堂々スク水着てた変態女が部長だとは気付いてないな。

「……部長は今……多分更衣室だと」

お着替え中。

「……ナゼ？」

そ、それ聞く？

「いやだから、多分お着替え中かと……」

「……ナニ？ ジャアイマ、ブチヨウイナイノ？」

その時、突然空気が凍った。

……ン？

なんかジョンソン、ちよつと雰囲気が変わったような……

つか、寒い。

「ぶ、部長は更衣室で……あ……その……」

「……イルノ？ イナイノ？」

あのー……ジョンソン君、目が……怖いよ？

何？ その鋭い視線？

「……はい、今はいませんが……何か？」

正直に言った。

ちよつとヤバいかも。

「ブチヨウ、イナイノカ……」

その時、ジョンソンは椅子から立ち上がった。

何故か……黒いオーラを纏って。

……え？

「じよ、ジョンソン君……？」

つられて俺も立ち上がる。

その時

「……軽々と人の名前呼ぶんじゃねえよ、この三下がッ！」

……ン？

俺、絶賛フリーズ。

「デメエ部長じゃねえんだろ？ だったら用はねえんだよ！」

ジョンソン君？

日本語、上手だね。

俺、もしかして幻聴聞こえてる？

「さっさと失せろ三下がッ!!」

鬼だコイツ
鬼の形相。

ってか

「何だおまえっ!?!」

に、二重人格？

「……黙れ三下」

「さっ……三下……」

突然グレたジョンソン君。
すげえ日本語。
どこで覚えた？

「こっちはな、化学部入って、来年部長になって、有名理科大学に行くってシナリオがあんだよッ!!」

「シナリオ!？」

何だコイツ？

「だから今から現部長にゴビ売って、来年部長に推薦……ハッ!!」

その時ジョンソン、何故か突然我にかえる。

俺、相変わらずフリーズ。

「……アノー」

「……はい？」

またカタコトかい。

「スミマセンガ……」

「……………」

「……イマノ、ナシノハウコウデ」

もう嫌。

「.....」

元素6 スゴくグダグダな総会でした

皆さんこんにちは。

黒鉄徹哉です。

はい、こんにちは。

皆さんは最近、いかがお過ごしでしょうか？

平和ですか？

……そうですか、平和ですか。
うらやましい。

平和っていいですね。

のほほんと、お気楽に生活する事が出来るし。

それに、いつも笑顔で生活出来るでしょ？

いいなあゝ

俺も平和欲しい。

「つまり、入部希望者というヤツかッ!？」

「ハイ! ニュウブキボウデース!!」

……前話参照。

謎の二重人格金髪、ジョンソン君が化学部に襲来してきたのが、今から10分前。

で、更衣室から杵島先輩が戻って来たのが、今から1分前。

ジョンソン、本物の部長登場にテンションアップ!!

「なるほど……お前の髪の毛はまさにAuだな……」

杵島先輩はジョンソン君の金髪に興味津々。

何なんだコイツ。

一方のジョンソンは

「……フフツ、コイツが部長……フフツ」

流暢な日本語で何やら眩き中。

何だか、どろどろしてきたなあ。

で、結局

「中臣ジョンソン、今日から君はAuだッ！」

杵島先輩、ジョンソンの入部を許可。

ああ、許可してしまったのか……。

「Au？ ナンデスカソレ？」

ジョンソン、小首を傾げた。

まあ、それが普通の人の反応だ。

「Auを知らないのか？ Auとは、携帯会し……」

「そっち!？」

その日の放課後。

勿論、部活。

「さて、この化学部も部員数が4人になった」

科学室のでっかい机。

杵島先輩が北側の席に着き、机上には「議長」と書かれた三角の厚紙製のアレ。

「あと1人入部すれば、我が化学部は廃部の危機から脱する事が出来る!!」

俺、琴浦さん、ジョンソンの順で、それぞれの顔を見渡してくる杵島先輩。

「皆、分かっているな？」

真剣な眼差しの杵島先輩、そしてその間に頷く琴浦さんとジョンソン。

……ちょいまち。

「先輩……」

俺、挙手。

「はい、酸素大臣」

……俺は南側の席。

机上には「酸素大臣」の文字が書かれたアレ。

酸素大臣で……

「あの……今、何してんですか？」

俺はその場で起立し発言。

「何って……第一回化学部総会だが？」

しれっと答える杵島先輩。

「化学部総会……って、俺聞いてないんだけど……」

今日は普通の部活かと思ってた。

もし総会と知っていたら……部活サボってたな。

「当たり前だろ酸素大臣！ 先に言ったら間違いなくお前はサボる！」

「見透かされてたッ！！」

心のかッ！？

「サンソダイジン、トリアエズセキニツケ。サキニススマナイダロ」

黙れ金髪。

「さて、今回の議題はコレだッ！」

そう言うのと杵島先輩は立ち上がり、黒板に何やらチョークで書き出した。

カッカッと、リズムよく文字が書かれて……

「……………」

で、俺ソレ見て絶句。

文字を書き終えた杵島先輩は、俺達の顔を見ながらニッコリ微笑んだ。

「今回の議題は、まず5人目の部員をいかに要領よく拉致出来るかだッ！」

「拉致すんのお!？」

思わず突っ込んだ。

「オチツケサンソダイジン」

黙れ金髪。

ってか

「それ犯罪です!!」

杵島先輩は危ない。

「何だ酸素大臣? もしかしたら誘拐の方が良かったか?」

「何で提案全部に強引感があんだよッ!!」

拉致、誘拐……

「うむ……そうか?」

「そうです!」

全く……真顔で言うな。

「そうか……強引か……」

気付けよ。

「……じゃあ炭素外務大臣、何か意見あるか?」

ここで琴浦さんにフツた!?

「えっ……!?!」

炭素外務大臣こと、琴浦さん今話初セリフ。

「えっと……」

相変わらずモジモジ。

琴浦さんはもっと自分に自信を持つべき。

「……………」

みんな、琴浦さんを凝視。

なんかそういう空気。

「……………」

で、琴浦さん黙り込む。

「……………」

……沈黙。

「……………」

……。

「……………」

……………。

「…………ナンカシャベレヨ」

黙れ金髪。

「……………」

琴浦さん、若干俯き出す。

……限界か。

「琴浦さん、あんま無理に考えなくてもいいぞ?」

助け船出してみた。

「…………ご、ごめんなさい」

琴浦さん、その船に乗った。

で、

「ではA u スマートフォン、何か意見あるか?」

ジョンソンの三角の厚紙製のアレには「A u スマートフォン」の文字。

……電子機器ッ!?

「ソウデスネ……」

真面目に考え込むスマートフォン。

「ジャア……「ラチ」トカハ？」

貴様もかッ!?

「拉致か……しかしそれだと、酸素大臣からの反発が……」

「当たり前だッ!!」

拉致は良くない。

「……ジャア、ナンダッタライインダヨ？」

若干キレ気味のスマートフォン。

何故キレ気味？

「だから、例えばビラ配ったり、体験入部を実施したり……」

「ソレジャアツマンネエヨ」

黙れ金髪。

三枚に下ろすぞ。

で、最終的には……

「じゃあ各自、次回までに勧誘方法を考えてくること！」

……ナアナアで終わった。

元素7 コンビニとおっサンとお菓子な女の子

それは、突然だった。

朝、5時。

場所は……俺の家、黒鉄家の二階、俺の部屋。

朝日が若干まぶしい、春の朝。

俺は、自室のベッドで寝ていた。

「♪♪♪♪♪!」

突然。

朝、5時に携帯の着信音になった。

朝5時に。

「♪♪♪♪♪!」

.....。

勿論、この時の俺はまだ夢の中。

しかし……

「♪♪♪♪♪!」

携帯の着信音は鳴りやまない。

「♪♪♪♪♪!」

「♪♪♪♪♪!」

「♪♪♪♪♪!」

「……ん……うう」

あまりにもうるさい。

仕方なく起床する俺。

「♪♪♪♪♪!」

まだ頭がボーッとするがな……。

まさに寝起き。

「♪♪♪♪♪!!」

「……電話?」

俺の安眠を妨害した諸悪の根源は、どうやらこの携帯電話。

まだ半分寝ぼけている俺。

しかし、とりあえず携帯を手にとり、通話ボタンをプッシュ。

「……もしもし?」

寝起きだから声がかすれた。

『Oよ、今日も朝練するから7時に学校へ来い!!』

……携帯の向こうから聞こえた、何かこう……胸騒ぎのする声。

悪い意味での胸騒ぎ。

「……だれ?」

半分わかるが、とりあえず聞いてみる。

『私だ、石鉄高のMgだ!!』

石鉄高のマッドサイエンティスガール。

プロローグで初めて聞いた呼び名だな。

「……何？ マグネシウム？」

わざとボケる。

その間にも俺はベッドから出て、窓のカーテンを開ける。

……今日は曇りか。

『マグネシウムではないぞ？ マッドサイエンティスガールだ!!』

あー、うるさいなあ。

声のボリュームでかい。

「……で、そのマッドさんが何の用？」

『だから朝練だ!!』

「……またか」

つてか、昨日も朝練やって、ジョンソンが来て……。

「……それ、強制参加？」

『当たり前だ!!』

……マジでか

「……眠い」

現在朝6時

意味のない朝練とやらに駆り出された俺こと、黒鉄徹哉は家を出た。

空は曇り。

気分は最悪。

「……眠い」

全く……安眠妨害もいいところだ。

しかも当日連絡。

何故昨日のうちに言わないんだ？

「……眠い」

大きなあくび。

そしてため息。

しんどいよ。

そして

「腹減った……」

学校の近所にあるコンビニ。

朝早くからの強制招集のせいで朝飯を食べてなかった俺は、部活に行く前に食料調達。

「いらっしやいませえ〜!!」

中年のオッサン店員が笑顔でこっちに営業ワードを投げ掛けた。

俺はソレを真顔でスルーし、菓子パンのコーナーへ。

「……………」

……オッサン店員、すげえこっち見てる。

けどスルー。

「……………」

超ガン見。

……だからこっち見んなよ!!

俺、もしかして目付けられてる？

やだなあ!!

万引きとかしねえよ!!

俺、ハートは意外とチキンだから。

……とか言ったら、フライドチキンが食べたくなってきたのは秘密。

で、菓子パンコーナー。

「とりあえず、あんこたっぷりサンドイッチ無いかな？」

あれ、奇妙な味がしてウマイんだよね。
ハムとチーズとレタスとあんこ。

お口の中がビッグバンになります。

その時、菓子パンコーナーの向かい、お菓子コーナーの所に見知った人影が。

「……あれ？」

俺は菓子パンが陳列されている棚越しに、さりげなく確認。

身長的には俺より頭1つ分小さい。

短い髪を左右に分けたミニツインテール。

顔は小さく、しっかりと整っている。

そして背中には竹刀。

「……やっぱりか」

棚のお菓子を超キラキラした目で眺めているアイツは、まあ、俺の知り合い。

「……そこのお嬢さん、何してんの？」

「ふえっ!？」

棚越しに声掛けてみたら、めっちゃ驚かれた。

「ど、どこ!？　だ、誰!？」

しかも超焦ってるし。

「棚越し」

「えっ!？」

俺のヒントを元に、棚のこっち側に目をやる彼女。

そして目があった。

「おっす」

「なんだ……テツかあ……」

俺の顔を見た途端、急にヘナヘナしだしたコイツはせじょうめいこ施仗明子。
全くもって失礼なヤツだ。

俺と同じ石鉄高校1年。

あ、クラスは違いますよ？

「朝っぱらからお菓子かよお前……」

コイツの買い物かごには沢山のお菓子。

チョコやらポテチやらグミやらマシュマロやら色々。

「あのね、朝だからこそ糖分取って、頭を覚醒させるのよ!」

何をどや顔で言ってるんだコイツ。

あ、ちなみに明子とは小学から一緒。
まさに腐れ縁。

で、コイツのあだ名が……

「そんなんばっか食べてると、血糖値がバカになるぞ、アキコ」

「うっさい!!」

……明子って、アキコとも読めるでしょ？
だからこのあだ名。

まあ、このあだ名を使用すると、高確率で不機嫌になるが。

「ってかテツ、いつもこんなに早かったっけ？」

かごに甘栗を入れながら質問してくるアキコ。

機嫌治るのが早い。

「違うよ、今日は半ば強制収容されに行くの」

あそこは牢獄。

放課後、日が沈まない限り家に帰してくれない。

『Oよ、幽霊部員なんかになってしまっってはダメだぞ!!』

って、どっかのクルクルパーさんが。

『もし幽霊部員になってしまったら、徐霊くらいはしてやる』

クルクルパーは、幽霊部員の意味を間違っているし。

化学大好きなヤツが、幽霊を信じちゃマズくないか？

「……テツ、どうしたの？」

棚越しに俺の顔を凝視してくるアキコ。

「いや……ちよつと黒歴史化しつつある過去を思い出してただけ」

「黒歴史？」

何だか不思議そうなアキコ。

かごにはいつの間にかシュークリームがプラスされてるし。

「……そういや、アキコは何か部活入ったの？」

少し話題を変える。

後で会うクルクルパーの事は考えたくない。

「……………」

……なぜ黙る？

……ああ。

「明子は何か、部活入ったのか？」

「いや、まだ入ってないけど……」

とか言いながら、かごにガムを投入するアキコ。

「じゃあその背中の竹刀は何だ」

剣道部……は確か、石鉄高校には無かったハズだし。

「ああ、今日は帰りに道場寄ってくから」

「なるへそ」

そういやそうだ。

門下生まさかの200人を誇る、超有名な剣道道場、施道道場。

そこの師範の娘こそ、この甘党アキコさんなのだ。

ちなみに本人も門下生の1人。

多分剣道、強いよ。

ってか、まだ部活入ってないの？
もう4月終わるぞ？

……フフッ

「なあ明子？」

「ん？」

レッツ勧誘Time!

「お前、まだ部活入ってないなら、化学部入らないか？」

直球ストレート勧誘！

「……化学？」

「イエス！」

そう化学！！

今なら名誉棄損になりかねない元素記号あだ名が貰えます！！

「化学……ねえ……」

アキコさん、かごにクッキーを入れながら考え中。

「……お前、結構金あんだな」

「え？」

かごには山盛りのお菓子。

血糖値うんぬん以前に、コレ結構な金額だぞ？

「これ、軽く三千円くらいいくんじゃね？」

かごの中からカールの黒ひげおじさんがこっちをガン見してるし。

今日はよくオッサンにガン見されるもんだな。

「いいの、今日はお小遣いの日だし！」

満面の笑み。

バックに黄色いお花が見えた。

そうか……そんなにお菓子、好きか……

の割には、アキコは全然太っていないが。
むしろ細い。

「……そ、そうか」

……何たじろんでんだ、俺。

その時……

「うがあ……俺らあ、酒がほすしい！」

「……は？」

コンビニ、何だか小汚ない中年オッサンが入ってきた。
足元超フラフラ。

顔、真っ赤。

一発で分かる、酔っぱらいのオッサンだ。

……朝から酒って。

「酒がほすしい〜！ 俺らあ、酒だあ！」

呂律回ってねえし。

「……すげえ酔ってんな、あのオッサン」

「だね」

俺とアキコ、とりあえず店の端へ。
だって、絡まれるの嫌だし。

「酒だあ！ 酒をもってこおい！」

うるさいなあ。

「さあけえ！！！」

酔っぱらい、店内をブラブラ
他の客も迷惑そう。

その時

「お、お客様……あまり店内で騒がれては、他のお客様に迷惑……」
さっきまで俺をガン見していたオッサン店員、酔っぱらいに声を掛
けた！！

「ああ？ うるせえな、酒をもってこい！」

酔っぱらい、大声で反論。

「お客様、その……あまり大声を出されては……」

オッサン店員、意外と態度小さい。

その時!!

「うるせえ!!」

ドカッ!!

「ぐあっ」

酔っぱらい、店員の顔をグーで殴った!!

「きゃー!!」

店内にいた、1人の女性客が絶叫。

オッサン店員、鼻血を出しながら転倒。
うずくまり中。

「酒だあ! 酒だあ!!」

店員を殴った酔っぱらい、店内のすみにあった掃除用のモップを手に取り……

「アルコールだあ!!」

暴れ出した。

「きゃー！！！」

「うわっ！！！」

「おおっ！！！」

店内パニック！！

ってか、

「危ねえ！！！」

モップを振り回し、ところ構わず棚や商品を殴り続ける酔っぱらい。

ちなみに店員、未だ床で悶え中。

その時

「デメエ、何見てんだコラァ！！！」

「……は？」

いつの間にか、酔っぱらいが目の前にいて。

他の客、みんな外に避難していて。

何故かアキコさんも外に避難していて。

店内、俺と酔っぱらいと半分死んだ店員のみ。

あ、あかーん!!

ってか

「お前らいつの間に逃げたッ!？」

皆さん、外からガラス越しにこっち見てる。

そのね……皆さんの目がね……なんか……哀れみの目なの。

すごい哀れみなの。

誰か……警察に連絡してくれたかなあ。

「テメエ、シバくぞコラァ!!」

きゃーよっぱらいのといきあるこーるくさい!

「何脳内ツツコミしてんだコラァ!!」

きゃー、酔っぱらいが俺の心を読んできたー!

「テメエ、酒は持ってるか？」

「……はい？」

「酒だあ!!」

バシーンッ！

酔っぱらい、モップを床に叩きつけ威嚇。

「うおっ……」

俺、マジビビリ。

だって怖いもん。

「酒をよこせ……酒だぁ!!」

ほ、本格的にまずくないか、このシチュエーション……

「酒をよこせっ！」

「うわ、ちょ!!」

何故か胸ぐらを掴まれた俺。
せ、制服がヨレヨレに……

「オラッ、とりあえず死ねや!!」

「なぜそうなるッ!？」

あ……いかん。

口に出してツツコンでしまった。

酔っぱらい、超キレ気味。

俺、絶体絶命。

あかーん。

「じゃあ死ねやッ!!」

その時、俺は酔っぱらいに投げられ、地面にダイブ。

ドーン!!

「痛っ!!」

あー……腰打った。

そして……

「オラッ!!」

俺の目の前には、モップを振り上げた酔っぱらいの姿。

や、ヤバいつ!!

その時……

ガシッ!!

「なっ……」

酔っぱらいが振り上げたモップ。

そのモップが、酔っぱらいの手から地面に落ちた。

「痛いっ！」

酔っぱらいの手は真っ赤に腫れてるし。

「……テツに手を出すな!!」

酔っぱらいの後ろ、そこには小さな人影が。

「……明子！」

そこにいたのは、竹刀を持った明子さん！

「て、テメェ!!」

酔っぱらい、明子を確認した瞬間一気に跳躍。
明子に襲い掛かる！

しかし……

「フッ!!」

明子は竹刀を一振り。

次の瞬間……

ドサ

無音のまま、酔っばらいは床に倒れた。

まさに一瞬。

「……ふう。テツ、大丈夫？」

「あ、ああ……」

軽く一息ついたアキコ。

その笑みは、何か……こう……良かった。

元素8 田沼意次と野口英世は賄賂に使える

「Oよ、何故今日の朝練来なかった!？」

「先輩……顔、超近いです」

俺の鼻と先輩の鼻がくつつきそう。

現在、あの酔っぱらいパニックがあった日の放課後。

結局、あの後学校行ったんだよ？

後から来た警察に事情徴収され。

アキコは何やら警察から賞を貰うらしい。

(コンビニで暴れた酔っぱらいを、女子高生が捕まえた!!)

って記事が明日の朝刊に乗りそう。

で、今、放課後の部活中。

コンビニパニックのせいで、結局朝の部活には間に合わず、仕方なく朝練はサボったのだ。

「Oよ、何故来なかった!!」

杵島先輩はご立腹。

「だから、今朝はコンビニの事件に巻き込まれて……」

「O、まさかお前、幽霊部員に……」

さっきからずーっとこう。

何回言っても、このクルクルパー、略してクルパは信じない。

「だからコンビニの事件に……」

「Cよ、今すぐに徐霊をしてくれる陰陽師を呼んでくれ!!」

「だから違うっつってんの!!」

クルパいい加減にしろ。

それから琴浦さん、携帯取り出すな。
陰陽師に連絡いれるな。

「はあゝ……疲れた」

結局、あのクルパに全てを理解させるのに小一時間。

何だ、あの読解力のなさはッ!!

「ソノママ、ヨッパライニナグラレレバヨカッタノニ……」

「……お前後で体育館裏にこい」

軽くジョンソンをあしらい、俺は机に突っ伏す。

いやー、マジで疲れた。

一方の杵島先輩はガラスを熱しています。
ガスバーナーで。

で、琴浦さんは化学の教科書を眺め
中。明日、小テストがあるんだってさ。

特にやる事もなく、皆がそれぞれぼーっとしている化学部。

皆さんは、当初の目的を覚えていますか？

……あ、皆さん忘れてますね？

完璧忘れてんね？

——この化学部を、学校1の有名な部活にしてみせる。

はい、これが当初の目的です。

……何？

まだ思い出せない？

じゃあプロローグから読み直せ。

「ダレトハナシテンダ？ モシカシテゲンカクミテル？ セイシン
ダイジョウブ？」

「とりあえずお前よりかは大丈夫、主に頭が」

しかし……

本当に自由な部活だな……

廃部の危機に面してるとは思えないほど。

あと、1人なんだよな……

「……おし」

あと1人。

それでこの自由は守られる。
なら……

「アキコン所にでも、行ってくんかな」

一年生は4月中に何等かの部活に入部しなくてはならない。

アキコは、一年生ながらまだ部活に入部していない。

4月は、もう終わる。

なら……

「アキコツテダレダ？ オマエノコレカ？」

「よし、後でお前のその小指をへし折ってやる」

で、翌日。

「そこのお菓子を頬張っている明子さん！」

「はふっ!？」

朝、1年4組の教室。

窓際の一番前の席に、リスみたいに頬を膨らませた明子の姿があった。

「また朝からお菓子……今日はチーズせんべいか……」

超チーズの匂い。

「いいじゃん！ チーせん美味しいし！」

頬っぺたに黄色いチーズの粉が。
子供かよ。

「テツも食べる？」

はいって、一枚のせんべいを差し出す明子。

「まあ……頂いておきます」

俺はせんべいを受け取り、一口。
うーん、チーズ味。

「で、何か用？」

バリバリとせんべいを食べながら喋る明子。
行儀悪い。

「ん？ ああ、まあちょっとな」

とか言いつつ、俺もせんべいを食べながら喋る。

「確かこの前話しただろ？ 部活の事」

あのコンビニパニックの時。

「ああ……化学部がどうこうってヤツ？」

何故かミニツインテールにもチーズの粉が。
ネズミか。

「そう。今部員が1人足りなくてさ、まだお前部活入ってないんだろ？」

チーせん美味い。

「まあ、そうだけど……」

「そうだけど？」

すると明子、何故か目をそらす。

「アタシ……バカだよ？」

「うん知ってる」

中学の時、理科の定期テストで173人中163位。

学年で下から10番目。

「知ってるって……何かヒドイ」

「自分でバカって言ったんじゃないか」

ジト目でこっちを見んな。

「大丈夫だ明子、例えば理科が苦手でもナアナアで何とかなる部活だから」

「ナアナアって……」

「そう、ナアナア」

……俺は今、自分の所属している部活を貶している気がする。

「うーん……でも、やっぱり理科は苦手だし……」

チツ、意外としぶといな。

「大丈夫大丈夫、ウチの部活の半分は化学成分0の人間で成り立っていますから」

主に酸素と炭素が0。

「でも……」

しぶといぞコイツ。

「……分かった」

俺はある策を思いついた。

これは、ぶっちゃけ危ない取り引き。

しかし、コイツにはこれしかない。

「もしお前が入部してくれんのなら……」

「ん？」

食いつけお菓子女！

「入部してくれんのなら、お菓子1000円分おごってやる！」

そう、まさに賄賂作戦。

こちらそこ、主人公のくせにキタナイとか言わない！

かの有名な田沼意次だって、賄賂で江戸の世を支配していたんだから。

「え！？ お菓子！？」

そしてアキコが食いついた！！

突然目が輝きを増し、言葉に勢いがッ！！

「そ、そうお菓子。今なら入部してくれるだけで野口英世が付いてきます」

……この無垢な少女に賄賂を使う主人公。
しかも英世さん使って。

もう化学部ヤバイ。

「本当に？ それ本当に？」

「あ、ああ……」

すげえ食い付きがいい。

いや、よすぎる。

コイツ、誘拐犯とかが

「お菓子あげるから、おじさん所おいで」
とか言ったら、間違いなく付いて行っちゃうんじゃない？

危ないなあ。

「じゃあ入部してもいいよ!!」

「そ、そうか……」

くそッ……何だか……悪い気分。

この少女の笑みを見ると……くはっ

「じゃあヨロシクね!!」

「おう……」

いいのかこれで!?

元素8 田沼意次と野口英世は賄賂に使える（後書き）

キャラクタープロフィール紹介！

No. 4

中臣ジョンソン

私立石鉄高等学校1年3組在籍。

男性・15歳・AB型

誕生日・6月23日

身長・170?

体重・62?

好きな物・頂点、名誉、紙幣、金平糖

嫌いな物・地位の低い人、小銭、紅茶

日本人とアメリカ人のハーフ

性格はS

勉強運動共に平均

基本上を目指したがる

実家は結構な金持ちだったりする

黒鉄君に対してはかなり強気な態度

将来は一流の理科大学へ進学したいらしい

元素9 さ、最終回じゃないよ、本当だよッ!?

「今日から君はLiだッ!!」

「えるあい?」

リチウム。

何だかんだあり、施仗明子は化学部に入部する事になった。

「しかし……まさかOが女子を連れ込んでくるとはな……」

「違う意味にも取れなくもない発言は止めて下さい」

杵島先輩はおかしな人でくくる事にした。

「あの……」

その時、早速Liの名前を頂戴したアキコが意見。

「アタシ……理科って言うか……勉強自体が苦手なんですけど……大丈夫ですか?」

いつもに比べて小さいアキコ。

うん、コヤツは中学時代、まさに補習の地獄を体験したヤツだからな。

「大丈夫だLi。苦手なら、今から克服していけばいい！」

あら先輩、今日は優しいのね。

「そうですか……わ、分かりました！」

妙に納得のアキコ。

これにて、化学部は廃部の危機を脱する事が出来たのだ！

俺、杵島先輩、琴浦さん、ジョンソン、アキ……明子。

これから、新しい部活の日々が待っている！

「Oよ」

「なんですか先輩？」

いつにも増して、爽やかな杵島先輩。

「これから……共に頑張っていこう。学校一の部活を作るために！」

その爽やかな笑みに、俺はゆっくり頷いた。

「……はい！」

って、

「何だこの最終回的なノリは？」

短期で終わる漫画みたいなノリ。

おいおい、まだ元素彼女は終わらないよ？

ちょっと待てよ、戻るのボタンクリックしてんじゃないよ！

まだ続くんだよー！！

「と言うわけで、新章キターー!!」

「……?」

現在、町のど真ん中。

車の行き交いが激しい、とある都市。

辺り一面人の波。

視界はアスファルトの灰色と、空の青。

そう、今日は日曜日!

俺は今、日本の首都である東の京の都に来了!!

パフパフ!!

「ヒヤッホーイ! 来たよ日曜日、今日は休みだあ!!」

「あ、あの……く、黒鉄君……」

俺はとにかく絶叫!

今日はあのクルパ先輩とは会わずにすむ!!

「おーし、今日は凄くふいーばーしちゃうぜツ!!」

「ふい、フィーバー?」

おっと言い忘れていた。

今、俺の隣には琴浦さんがいます。

そう、あのモジモジ琴浦さん。

白いワンピースを着用し、羽付きの薄桃色の帽子。
そして気品あるポシエツト。

どこかのお嬢様みたい。

ってか、

「普通に可愛い……」

俺がボソツと言った言葉は幸いなのか、琴浦さん本人には聞こえていなかったらしい。

「……そろそろですかね？」

琴浦さん、右手首に着けていた腕時計を確認。

時刻は現在午前10時。

あ、ちなみに俺も私服ですよ？

まあ……男のファッションなんか興味無いと思うので割愛。

うん、フツートの格好ですから。

その時

「ごめんっ、おまたせ!!」

目の前の横断歩道の向こうから走って来たのは、どこぞのお菓子なアキコさん。

黒のTシャツにジーンズ、頭にはピンク色のキャップ。

何とまあ……気品の無い……。

「待った？」

アキコさん、息を切らしながらこっちへ。

「大丈夫だよ。俺も琴浦さんも今来た所」

「そ、そう？」

……本当は20分近く待ちました。

さてさて、本日は日曜日。

東の京の都のとある町に、俺とアキコと琴浦さんが来ています。

ここで問題。

俺達は、何をするためにここへ来たのでしょうか？

ヒント！

琴浦さんとアキコは、実は同じクラス！

そして、2人共甘いもの大好き。

……分かったかな？

さてさて、正解は……

「ケーキバイキング、1時間1000円で食べ放題！！」
でした。

って、

「何で俺まで来てんだ？」

赤レンガ造りの店の手前、琴浦さんとアキコの目は輝いている。

……うん、ささやかな疑問。

何で俺まで来てんだ？

フツ、ケーキバイキングなるものは女子が集まってワイワイするものだろう？

なのに、対してケーキ好きじゃない俺が、なーんで来てんだ？

……しかし、その疑問は2秒で解決。

店の外にある看板には

「3人以上でご来店の方は、料金そのまま、バイキング時間をさらに30分延長可！」

の文字が。

……ああ。

そういうことか。

「ほらテツ、確か前にお菓子1000円分おごってくれるって言ったでしょ？」

「……ああ」

だから……3人目として呼ばれたのね。

くそおう……田沼意次め……賄賂なんて卑怯だぞッ!!

「よし、じゃあ琴浦さん、中へ入ろ!」

「う、うん!」

……同じクラスのせいかな、この2人はなかなか仲が良い。

アキコさんにかかれば、あの琴浦さんのモジモジがどっかに行ってしまうほど。

いやあー、友達って素晴らしいねえ。

そして、可愛い女の子2人に対して男子が俺だけってのも、
美味しいシチュエーションだねえ。
ニヤニヤ。

……本当クルパがいなくて良かった。

元素9 さ、最終回じゃないよ、本当だよッ!?(後書き)

キャラクタープロフィール紹介!

No. 5

施仗 明子

私立石鉄高等学校1年4組在籍。

女性・15歳・O型

誕生日…12月2日

身長…156?

体重…44?

好きな物…お菓子全般(むしろ砂糖)、剣道、お昼寝

嫌いな物…勉強、キノコ類全般、変なあだ名

黒鉄君の小学からの同級生。

勉強は大大嫌いな超体育会系少女。

実家は有名な剣道の道場だったり。

そのせいか、本人もめっちゃ剣道うまい。

お菓子が大好きで、小遣いの8割はお菓子に使っている。

あだ名はアキコ(本人否認)。

元素10 生クリームとお好み焼きと俺と

実家の話をしよう。

我が黒鉄家は至って平凡な家庭である。

父親は前科持ちでもサイヤ人でもない、本当普通のサラリーマンだ。
ただ、若干髪が薄く……

母親も、普通の専業主婦。

近所では井戸端会議の会議長的なポジション。
ただ、若干シワが多く……

大学生の兄は現在大学近くのアパートで一人暮らし中。
結構真面目な性格。
ただ、若干モテなく……

高3の姉は反抗期。
超ギャル的な。

金髪に染めた髪はジョンソンを越える輝き。
ただ、若干バカ……

まあ、こんな家庭の中で育った俺。

本当に個性豊かだよな。

で昔、まだ俺が小学生の頃、母親が一時期お菓子作りにハマった事がありましたね。

そりゃ、周1のペースで生クリームを大量摂取していた訳で。

兄や姉共々、嫌と言う程お菓子を食べ……

……ウチの母親はね、何かにハマると、もうそれ以外が見えなくなるのです。

だから小学生の時は、朝飯ドーナツ、昼飯ケーキ、おやつにクッキー、夕飯にタルト的な……

……ガチである時は苦しかったな。

小学生の時の俺の口癖

「白米が食べたいよぉ」

もはや黒歴史だね。

で、現在ケーキバイキング店の中。

「うーん！ 甘あーい！！」

笑顔でケーキを口の中へ運ぶアキコさん。
お口の周りが生クリームだらけ。
サントアのヒゲかッ？

「……美味しい」

上品にプリンを咀嚼する琴浦さん。
カラメルが口元に。

「……………」

ケーキバイキング店に入って30分。

2人は気が狂ったかのようにケーキやプリンをドカ食い。
アキコさん曰く、今日は無礼講なんだってさ。

……使い所の間違った無礼講です。

「琴浦さん、こっちのチョコケーキも美味しいよ!！」

「うん!」

「こっちの苺タルトも最高お!!」

「……このプリンも美味しい!」

見てるだけでお腹いっぱい。

ってか、食べてもないのに砂糖の味が舌に……

「……あれ? テツは何か食べないの?」

口元クリームべったり星人のアキコ。
なんかエグい。

「いや……もうベリータルト食べたし……」

いやマジで、さっき食べたタルト1個で俺はもう満足。

小学生時代のトラウマかな?

「タルト1個? もったいなっ!! もっと食べないと!!」

「じゃあお前が俺の分まで食べる。このブレーコー野郎」

もう無理。

「……よろしい、ならこの明子さんがテツの分まで食べてしんぜよう!!」

不気味に笑うアキコ。

そして……

「まずはフルーツケーキッ!!」

おかわりに行ってしまいました。
食い過ぎじゃねえか？

……苺ショート2個、チョコケーキ3個、フルーツタルト1個、プリン3個、ベリータルト1個、シュークリーム2個、バナラアイス1個、ミントケーキ1個、スペシャルパフェ1杯。

血糖値爆発するよ、きつと。

「ってか、よくアレが腹に入るよな……」

女子って凄い。

「……モグモグ」

隣では琴浦さんがメロンパフェに挑戦中。

日頃大人しいこの人ですら、甘いものの前では鬼神となる。

凄い……

「いやあゝ……食べた食べた!!」

「美味しかった!」

バイキング時間終了後、2人は満面の笑みを見せていた。

……ちなみに、アキコ分琴浦さん分俺分の3人分の料金を俺が払ったから……計3000円。

おやおやゝ?

軽く英世をオーバーしたね。

俺の財布がファンタスティック。

「うーん……次はどこ行く?」

「次ッ!？」

まだどっか行くの？

「当たり前よ！　まだまだお腹は膨れない！」

コヤツはバキュームカーか何かか？

って

「……俺、もうケーキ代払ったから、そろそろおいとましよう」と

……分かるのだ。

あんだけケーキ食べといて、次の店に行く。

これすなわち、またおごらされる。

フラグ立ってんだよ。

だから、俺の英世が全滅させられる前に退却を……

「よし、次はお好み焼きを食べに行こう！」

「アキコさんッ？　人の意見無視ですかッ？」

「……………」

「あ…………め、明子さん、人の意見も聞きましょう！」

「じゃあ好み焼き！」

「俺に発言権はないのかッ!？」

で、半ば強引にお好み焼き屋に行く事になった。
世の中ふざけてる。

「琴浦さんは大阪派？ 広島派？」

「うーん……お好み焼きにはオモチとチーズかな？」

オモチとチーズ？

「ふーん……なるほど、我流ってヤツね？」

我流……

そんなこんなで、東の京の都某所のお好み焼き屋「猫舌お好み焼き屋」に到着。

店のネーミングセンスに若干の疑問を覚える店だな。外見は普通なのに。

「よし、沢山食べるぞお!!」

「……うん!」

「まだ食うのかよ……」

三者三様の意見を述べた後、いざ店内へ。

俺のムフフなハーレムデート（希望）は、まだまだ終わる気配がない。

元素10 生クリームとお好み焼きと俺と（後書き）

最近、化学ネタ少なくてねえか？

これ、化学コメディだろ？

もつと化学しろやッ！！

みたいな意見をお持ちの読者の方には、ローリング土下座でお詫び申し上げます。

……と、お詫びからの書き出しでこれまた申し訳ないです。
五円玉です。

たまにはね、普通に後書きか何かを書いてみようかなと。

元素彼女、なんかナアナアな感じで部員が揃いました。

実際の学校での部活なんかも、こんな感じで部員を増やしているんだと思います。

少なくとも、自分の学校の部活はこんな感じ。
本当ナアナアです。

今回、化学コメディを書くにあたって、元素記号をテーマにした訳ですが。

今日、学校でやった一般常識テストにですね、元素記号の問題が出たんです。

まあ、最初は余裕ぶっこいてテストに挑んだんですが……

……全滅。

分かったのは水素と酸素で水が出来るって事だけ。

硫酸化ナンチャラや塩化ナンチャラとか……よく分からないものが
沢山出て……

ムムム、1からまた化学を勉強しなくてはと思いました。

化学無知識で化学小説なんか書けるかつ！
ってな感じです。

で、今回この化学無知識野郎の自分にミスターさんがネタ提供をし

てくれました！

ありがとうございます！！

結構助かってます！

ですね、そのミスターさんも「小説家になろう」にて化学コメデ
ィ小説を連載しています。

良かったらそちらも是非！！

面白いですよ！

これからは、分かりやすく面白い化学をモットーに頑張っていきたい
と思います。

まあ、自分は化学は苦手なんで……もしかしたら意味不明な事を書
くかもしれません……

その時は指摘して頂けると助かります！

では、また次回で！

元素11 前向きって眩しいっスよね!?

「いらっしやいませええええええ!」

お好み焼き屋に入店した直後、何ともエコーの響く店員がお出迎え。

「お客様は3名様ですかあああああ?」

「あ……は、はい」

超エコー。

ちなみに店員はヒゲのおっさんだよ。

「では3名様、ご案内iiiiiiii!」

何だこの店?

「テツは何食べんの？」

「とりあえずは英世守護のため何もいらない」

「琴浦さんは？」

「とりあえず……この魚介焼きを……」

魚介焼き？

……レトロな雰囲気が漂う店内。
照明がまさかの裸電球。

壁には昭和の感じがプンプンするアイドルのポスター。

つまり、古い。

「ご注文は決まりましたかあああああ？」

店内に響くおっさんのエコー。
実は美声。

「えーっと、魚介焼きを1つと、普通のヤツを特盛で！
特盛ッ！？」

「かしこまりましたあああああ」

店員、スキップしながら厨房へ。

「なんか……この店怖い」

スキップするおっさん怖い。

「え？ 何が怖いの？」

アキコには恐怖心がないのか？

「全体的に怖いんだよ。なんだよあのエコーは？」

「そう？ エコーが怖い？」

「エコーじゃなくて、あのおっさん自体が」

「おっさんが怖い？ なんか凶悪そうな顔してた？」

「そういう意味じゃなくてだな……」

「ん？」

「だからその……とにかく怖い」

うん怖い。

「お待たせしましたあああああ！」

それから約5分、怪人エコーがお好み焼きの具材を運んできた。

「うお……」

アキコの前に運ばれてきたのは、何か……こう、山盛りの具材。

キャベツインマウンテン！！

「お嬢さん、確か山盛りで良かったんだよねええええええ！？」

ヒゲ顔怪人エコーの息は臭かった。

「はい、大丈夫です!!」

アキコさんは笑顔で対抗。

「で、こっちのお嬢さんは魚介だつけええええええ！」

ヒゲ顔怪人エコーの鼻息は荒かった。

「あ……だ、大丈夫です……」

琴浦さんモジモジ。

「注文は以上ですね、ごゆっくりどうぞおおおおお！」

特盛のお好み焼き

800円

魚介焼き

525円

怪人エコーの笑顔

プライスレス

「あつつあつつ……うまつ!!」

人間の顔の何倍かのお好み焼きをペロリするアキコさんは、なんか
凄い。

「美味しい！」

琴浦さんの笑顔は怪人エコーのよりプライスレス。

2人の美味しそうな顔を俺は見ているだけ。

財布のチャックは嚴重に閉会中。

逃げないでお金。

……。

……ああ。

暇だ。

2人の顔見てもお腹いっぱいにはならない。

「……なあ」

暇だから声を掛ける。

「ん？」

お口にソースべったりのアキコ。

「……はい？」

イカを噛み噛み中の琴浦さん。

なんとまあ……

「2人とも、お好み焼きうまい？」

「うまいよ！」

「美味しいです！」

満面の笑みで返事してきやがった。

「そうか……」

俺も頼めば良かったかな？

……そうだ。

「……なあ？」

俺はまた質問。

「ん？」

「はい？」

2人は反応。

「その……2人はさ、何かこう……半ば強制的に化学部に入った訳
だけどさ」

ヒーローショーと賄賂。

半ば強制的。

「今更だけど……本当に化学部で良かったのか？」

アキコと琴浦さん。

ぶっちゃけ、2人は化学が苦手らしい。
本当だったら、違う部活に入りたかったんじゃない……。

「うーん……」

「……………」

食べながらも黙り込む2人。

「もしかして……迷惑だったか？」

琴浦さんなんかは美術なんかが似合いそうだし。

アキコだって、運動部とかが似合いそう。

もしかして……マジで迷惑だったか？

「アタシは……別に迷惑とかじゃないよ」

ポロっとアキコの口からこぼれた言葉。

俺はそれに反応が遅れた。

「だってテツが誘ってくれたんだし……まあ、暇つぶしにもなるしね」

「ひ、暇つぶしっスか……」

コイツにとっての部活って何だ？

アキコは相変わらずお好み焼きをむしゃむしゃ。

「私も……別に迷惑とかじゃ……」

琴浦さん、エビを食べながらニツコリ。

「化学部って何か楽しいし、別に迷惑なんてしてません！」

「マジか……」

2人共、何か前向きだな……。

もしかして、化学部嫌あゝとか言ってるの、俺だけなのかな？

「まあ、どっちにしても、化学部に入った事は後悔してない！」

「……私も！」

……何だこれ。

眩しすぎるぜ、2人の笑顔ッ!!

くあっ!!

「……さて、そろそろ帰りますか!」

特盛お好み焼きを平らげたアキコが椅子から立ち上がる。

「……うん!」

それにつられ、琴浦さんも起立。

俺も起立。

よっころしょ……

「じゃあテツ、お会計よろしくね!!」

……ん？

今、何か不吉な呪文めいた言葉が……。

「……アキコさん、あんた今何て言った？」

「……………」

「……明子さん？」

「テツ、よろしくね!!」

超笑顔。

……え？

元素12 雨が強くなる前に早く帰りたい男の物語

「ブワッハッハ！ チミは黒鉄徹哉君だねッ！？」

金髪リーゼントの鼻でか野郎が聞いてきた。

「……………」

俺はスルーを試みた。

「まあ、わたくし達を無視するなんて、凄くお下品なッ！？」

金髪クルクルパーマの女が非難してきた。

「……………」

俺はスルーを試みた。

「ブワッハッハ！ 黒鉄徹哉君はとてもシャイなんだねッ！
ともエクセレントだッ！」
なん

どこがエクセレントだ。

皆さまこんにちは。

毎度お馴染み、みんなのヒーロー黒鉄君です。

ども。

前回、俺の財布から英世が消えました。

結構大変でした。

あれから1ヶ月。

季節は梅雨間近。

6月の最初。

「何で雨、降るのかなあ」

その日、いつも通りに授業を受け、嫌々部活やって、今から下校。

そう、嫌々部活。

で今朝、雨が降ってなかったから傘持ってきてなかったけど……

ザアアアアア！！

現在どしゃ降り中。

時刻は午後5時半。

「うわ………すげえ降ってるな………」

凄いや。

雨が凄すぎて前がぼやけてる。

霧みたいになってる。

「参ったなあ……」

どうしよう？

走るか？

走って近くのコンビニまで行って、傘を買う。

……仕方ない、この作戦でいくか。

「傘代もつたないけど、風邪を引くよりかはマシか」

俺はカバンを頭の上に乗つけて……

「よし!!」

覚悟を決めて、走り出そうとした

その時！

「ちょっと、そこのチミ!!」

「……あ？」

突然後ろから声が。

「ん？」

俺は振り返った。

そこには……

以下、冒頭の通り。

「僕の名前はガーネット和島。2年だ」

「わたくしの名はレンドル倉坂。同じく2年」

……？

話をまとめようか。

俺は、今日普通の学校生活を送った。

で、下校時にまさかの雨。

俺、傘忘れたからコンビニへダッシュを試みる。

しかし、昇降口にて謎の金髪2人組に拉致られた。

……そして今、俺は何故か学校内の物理室にいる。

なんで？

「ブワッハッハ！ まさかこんな簡単に黒鉄君を拉致出来るとはな
！」

金髪リーゼント——もといガーネット和島はニマニマな笑顔。

キモい。

ってか、ガーネット和島ってどんな名前だ。

「あ、あの……」

俺、ちょっと意見してみる。

「なにかしら？ 黒鉄君？」

金髪クルクルパーマ——もといレンドル倉坂もニマニマな笑顔。

キモい。

「……俺、なんでここに連れてこられたんスか？」

「それは杵島はがねに一泡吹かせるためだ！」

ガーネット和島即答。

「ひ、一泡？」

何ゆえ！？

「そうだ一泡吹かせるためだ！ あの憎き杵島はがねに復讐をッ！」

ガーネット和島の形相が怖い。
すげえ顔。

「わたくし達物理部はかつて、杵島はがねに迫害されたのですわ！」

「は、迫害？」

レンドル倉坂は目に涙を浮かべていた。

つかあんたら、物理部だったんだ。

絶叫の火曜日事件。

この事件は昨年の秋頃、この石鉄高校内で起きた。

「当時の化学部はちょっとした有名部活でね、文化部の中でも人気があったんだ」

と、ガーネット和島は語る。

1年前の化学部には、当時まだ1年生だった杵島先輩の他にも、多

数の3年生が所属していた。

その中の1人、当時の化学部の部長。

「そいつの名前は、柚葉彩音。わたくし達物理部の敵……」

と、レンドル倉坂は涙ながらに語った。

柚葉……彩音……さん？

「彼女は昨年の秋のとある火曜日、当時まだ1年だった杵島を連れ、僕達物理部に奇襲を仕掛けてきた……」

「き、奇襲？」

話の意図が掴めない。

しかし、ガーネットとレンドルは真面目な雰囲気。

「そう奇襲さ。柚葉と杵島は突然物理室に入ってきて……」

「は、入ってきて？」

「……当時の物理部部长にへんなあだ名をつけたんだッ！」

「……は？」

意味分らない。

「杵島の野郎、当時の部長にC1なんて言う意味不明なあだ名をつけたんだッ！」

俺はあんたの方が意味不明。

「そうよ、そのせいで部長はノイローゼになり……」

「……え、それだけでノイローゼになったの？」

メンタルが弱い部長さんだな。

「そのせいで、物理部はしばらく休部になってしまったのよ！」

「いや知らねえよ」

なんなんだコイツら。

「……とにかく、僕達物理部は杵島はがねに復讐するため、君を拉致した」

「は、はあ……」

「そして君をエサに杵島はがねを呼び出し、今度は逆にこっちからへんなあだ名をつけるんだッ!!」

「……そ、そんな事のためだけに俺は拉致られたのか」

俺の価値観って……

一方の2人は超ニマニマ笑顔のドヤ顔。

「とにかく、今から杵島に呼び出しをする。レンドル、杵島の携帯番号は入手したか？」

「はい、昨日秘密経路を使って入手したわガーネット」

2人はニマニマ。

ってか、くだらねえ。

くだらな過ぎる。

泣きたくなるほどくだらねえ。

「……あのー」

俺は挙手。

「なにかしら、黒鉄君？」

レンドルさん、パツと見は美人。

ただ名前が……

「その……それ、今からじゃないと駄目ですか？」

「……はい？」

はてなマークなレンドルさん。

「俺、今日傘持ってきてないんで、雨がもっと強まる前に帰りたいんすけど……」

庶民的な意見。

とにかくメンドイから帰りたい。

「そうなの？　傘忘れたの？」

「はい、そうなんです。風邪引きたくないから、早く帰りたいんです」

これ嘘。

本音は……

『メンドイよこの展開。なんか適当な理由つければ帰してくんないかな？』

……きゃっ！

読者に俺の本音見られちゃった！！

……ころそこ、キメエとか言うな。

「……まあ、風邪を引くと辛いですからね……ガーネット、どうします？」

なんか本音通りの展開キタ！！

「そうか……風邪を引かせては悪いからな……」

コイツらバカだ。

じゃあ何のために俺を拉致したんだ。

「……よし、じゃあ黒鉄君、今日はもう帰っていいぞ」

バカだやっぱり。

コイツらマジバカ。

「早く帰って、温かくしてろよ？ 風邪引くなよ？」

「は、はあ……」

いや、コイツらバカじゃない。

いい人だ！

コイツらいい人だ！！

なんかいい人だ！！

結局その後、俺は走って家に帰りました。

で、

……風邪引きました。

元素13 黒鉄徹哉君が色んな意味で大変な事になりますよ

「なんだ今回のサブタイトル！？ 作者の悪意を感じるぞッ！？」

主人公を大切にッ！！

ってなわけでこんにちは。

毎回挨拶から入る主人公黒鉄です。

……えゝ、はい。

読者の皆さまは、今回のサブタイトルから壮絶なフラグの予感を感じとっていますでしょうか？

嫌だね、怖いね。

前回がああだけに、復讐とか来そうで怖いね。

……まあ、全ては作者が考える事だけど。

ってなわけで、前回の翌日。

俺は風邪を引きました。

理由は割愛。

前話を見ろ。

「あゝ……ツライ」

鼻水止まらないし、ちょっと熱っぽいし。

「はぁ……やっぱり今日は学校を休むべきだった……」

とかいいつつ現在登校中の俺を誰か誉めて。

そして学校。

1時間目
数学！！

頭痛くて勉強どころではありませんッ！！

2時間目
音楽！！

風邪引いてる時にドナドナ聞くと、マジ心がブルーになる。

3時間目
体育！！

サッカーふざけるなッ！！

痛い頭使ってヘディングしたら死にそうになったわッ！！

4時間目
化学！！

色んな意味で寒気が凄かった。

恐るべし化学！！

で、お昼休みはずーっと寝てまして……

5時間目
英語！！

アイアムえーつとスチューデント……ってコマーシャルが懐かしい。

6時間目
地理！！

ツンドラとツンデレって何か似てるよね。
発音的に。

そして……ここからが地獄。

れっつ化学部！！

「頭痛い……」

現在地獄中。

杵島先輩は今、ビニール袋に水入れてます。

先輩曰く

「爆弾を作る！」
だそうです。

モジモジさんは読者中。

何読んでんの？ って聞いたら

「あの……か、化学部らしくキュリー夫人の伝記を……」
だって。

真面目だね。

金髪カタコト君は、1人で某ダブルスクリーンのゲーム中。

ソフトは赤ヒゲがカートに乗ってレースするアレ。

「ミドリノヒゲガイチイトカ、キャラテキニアウトダロツ！」

……いい加減カタコト止めろ。

読者から読みにくいって苦情来るぞ。

そしてアキコさんはカルメン焼きを作ってます。

「あれ？ 何で膨らまないんだ？」

……アキコさんは気付いてないけど、さっきベーキングパウダーじゃなくて塩入れてたぞ。

膨らむわけがない。

……それにしても

「頭痛えゝ……」

俺は1人、机に伏せて寝る体制に入る。

とにかく、少しでも頭痛を鎮静しないと。

ってなわけで、皆さまお休みなさい……

「どうしたO? 具合でも悪いのか?」

「……………」

……こんな時に来るなよ。

「ん? 大丈夫かO?」

「あ、ああ……いや、まあ……はい」

曖昧な返事しか出来ない。

「どうした? 風邪でも引いたか?」

おやおや?

今日はいつにもなく優しい先輩。

「ああ……まあ、昨日は帰りに雨に当たっちゃって……」

「そうか……ツライなら今日は早退してもいいぞ?」

「え、マジで?」

早退だと!

是非とも!!

「あ、じゃあ早た……」

その時！

ガラガラガラッ！

「杵島はがね、先輩の仇を取りにたてまつった所存でありんす！」

「杵島はがね、覚悟なさいよッ！！」

……突然開いた科学室の扉。

そして、そこにいたのは……あの独特の……

「我、物理部のガーネット和島！」

「同じく、物理部のレンドル倉坂！」

出た、意外と優しい物理部！！

ちなみに琴浦さん、ジョンソン、明子はポカーン状態。

「誰だお前達？」

杵島先輩ははてなマークがいつぱい。

「杵島はがね、今日はお前に変なあだ名をつけてやるッ！」

「覚悟なさいよッ！」

相変わらずのズレっぷりだなガーネットとレンドル。

「何だお前達は……？」

杵島先輩は予想通り意味を理解していない。

「……もしかして、化学部への入部希望者か？」

「先輩、コイツら最初に物理部って名乗ってましたよ」

「……いいか杵島はがね。僕達物理部先代部長、ワトソン政長の仇を取るべく！」

「変なあだ名をあなたに！」

「「つけにきたッ！」」

無駄な演出乙。

「ワトソン政長……誰だ？」

杵島先輩はガチで分かっているようだ。

ってか

「結局は俺、マジで拉致された意味なかったんじゃない……」

今こうして物理部が来てるわけだし。

「ん、拉致？　　〇よ、お前拉致されたのか？」

「そうですよ、あんたの好きな拉致です」

どうした先輩。

何故その両拳が震えているの？

「拉致……もしかしてアイツらにか？」

杵島先輩、物理2人組を指差す。

「イエス」

あー……頭痛いから早く帰りたい。

その時……

「ガーネット和島とか言ったな。貴様、私の大事な部員を拉致しただろ？」

……おや？

杵島先輩の様子が？

「……ああ、確かに僕ら物理部は昨日、黒鉄徹哉君を拉致したが」

バカ正直に答えるガーネット和島。

やっぱりいい人だ。

「そうか……貴様、私の大事な部員を……」

どうした杵島先輩。

あんたも日頃から拉致拉致言っているではないか。

「……許さないッ！」

その時の杵島先輩の目は……マジだった。

……え？

「私の大切な仲間を傷付ける奴は……許さないッ!!」

杵島先輩ご乱心。

「え……ちょ、拉致はしたが傷付てはない……」

あまりの事に動揺しまくるガーネット和島。
そして黙り込むレンドル倉坂。

「覚悟は……出来ているんだろうな？」

ちょ、ええー!?

何かすげえキレてるよ杵島先輩!

何で!?

「え? あんたら、テツを傷付けたの?」

おやおや?

アキコさんまで何故か反応してきたよ。

おやおや?

何故か手には竹刀なんか持ってるし。

「……だったら許さないッ!!」

杵島先輩とアキコは戦闘体制に入った。

だから何で!?

……琴浦さんとジョンソンは何故か机の下に。

え?

次の瞬間ッ!!

「食らえ、ドライアイス爆弾ッ!!」

杵島先輩がさっき作っていた“爆弾”とやら。

それは、ビニール袋の中に少量の水とドライアイスを入れ、口を縛ったもの。

すると、中でドライアイスが溶け、二酸化炭素が発生し、ビニール袋が膨張。

そして、あまりの膨張にビニール袋が耐えられなくなると……

バシヤッ!!

「うわっ!!」

「冷たッ!!」

「ちよっ、俺まで被弾してッ!!」

つまりはドライアイス爆弾だと。

そして、杵島印のドライアイス爆弾で怯んだ2人（+俺）にアキコが接近!

竹刀を低く構え……

「施丈桜花流一ノ型、桜吹雪ッ!!」

施丈桜花流

それはアキコの道場に伝わる刀の流派。

型は全部で十ノ型まであるそうです。

発想が厨二だね。

そしてその一、桜吹雪。

ぶっちゃけ、超強力な横斬撃。

それをガーネット、レンドル、そしてなぜか俺にまで直撃！

「ぐあっ！！」

「痛いっ！！」

「何で俺までっ！！」

そして、3人はその一撃で倒れた。

校内暴力はんたーい！

「何故〇まで攻撃を食らっているのだ？」

「それは敵をちゃんと確認しなかったアンタのせいだ」

結局、物理部の連中は後味悪そうに退散していった。

ガーネットとレンドルに幸あれ。

そして、何故か攻撃に巻き込まれた俺は、もう早退する準備。

ドライアイス爆弾十腹に強烈な打撃。

翌日、風邪はさらに悪化しました。

元素14 プールだッ水着だッ青春だッ!!

はろーぐっともーにんぐ!

まいねーむいずミンナノ黒鉄クン!!

ないすとうみーとう!!

さてさて、わたくし黒鉄徹哉は先週、風邪を引きました。

そう、全ての元凶は杵島先輩でもアキコでもない、あのぐーたら作者!

もうサブタイトルからしてわかりきっていた事とは言え、やっぱりムカつくよね。

主人公補正が適用しません。

……よし、今から早速抗議に……うわなにをするやめろ。

……見えない力が働いた。

……しかし今、そんな作者の悪行を許してしまうほどの奇跡が、俺の身に起きている。

「黒鉄君……その……私……」

「……え？」

「私……く、黒鉄君の事が好きなのッ!!」

「……ッ!!」

神展開キター!!

全ての始まりは、昨日の放課後まで遡る。

「みんなで温水プールへ行こう！」

ある日の部活中、突然クルパが意味不明な事を言い出した。
すごい笑顔で。

「お、温水プール？」

当然ながら俺は聞き返す。

ちなみに俺、今某狩りゲー中。
銀レウスパネエ。

ジョンソンは相変わらず赤ヒゲレース。

コイツに二足歩行のキノコを使わすとマジで強い。

琴浦さんは日なたぼっこ中。

光合成でもしてんのだろうか？

アキコはまた大量のお菓子を買い込み、1人黙々と食事中。

「そうだ温水プールだッ！！ 実はな、いつも世話になっているBから、こんなものを貰ったのだ！！」

そう言って、カバンから何かを取り出す杵島先輩。

俺はそれを尻目に狩り狩り。

「じゃーん！ アクアランドの無料入場券！」

カバンから取り出したのはチケット。

それを杵島先輩はビシッと掲げる。

「ん、アクアランド？」

俺はチラッと杵島先輩の手元を確認。

……青いチケットらしき紙を5枚持っていた。

アクアランド

まあ、温水プールのある年中無休の巨大アドベンチャーパークだ。

基本水を使ったアトラクションが多く、家族連れとかに人気のスポット。

俺も昔、家族で行った思い出が……ッて、

「しまった！」

よそ見している間に火炎ブレス食らってた！
あ、ゲームの話ね。

「ヤベッ、回復薬グレートッ！！」

しかし、回復しようとしたがピヨって……

銀レウスの突進食らって……

1落ち。

「ああ……ッ！」

報酬金減った……

「どうだみんな？ 今度の休みにでも行かないか？」

杵島先輩は科学室内をチラチラ。

「アクアランド……ですか？」

光合成琴浦さんがまず反応。

「そうだ！ たまにはこういうのも良いだろうしな！」

先輩ノリノリ。

「そうですね……行きたいです」

琴浦さん承諾。

「あ、でもアクアランドって事は、水着……」

琴浦さんはやっぱりモジモジが一番だね。

ってか、

み、水着！？

おいおい、マジでか！？

本当にか！？

琴浦さんのボッキキュッボンなボディを水着で……

……いいねえ。

「……Oよ、顔が何かふにゃふにゃしているぞ!？」

「……ハッ！」

その時、ゲーム内の俺はまた体力0になり、2落ち。

「やばっ、後がなくなったッ!!」

「AuとLiはどうだ？」

俺がクエリタするかどうか悩んでいた頃、先輩はジョンソンとアキコに視線を向けていた。

「ボクハモチロン、センパイニツイテイキマスヨ!!」

とか言うジョンソンの視線は手元のダブルスクリーンゲーム機。

「あたしも行きます！ どうせ暇だし！」

とか言うアキコの口の周りには生クリームが。

「よし、じゃあみんな行くでいいな!!」

「……ちょ、俺まだ行くとは一言も……」

「では、今週の日曜日辺りにでも!!」

「俺に聞かずに決めるな!　ってかまだ行くとは……」

「浮き輪は向こうで膨らませればよい!」

「人の話を聞けえ!!」

そして、日曜日。

ちょっと雲があるが、まあ晴れた。

「……よし、これで全員揃ったな!!」

そう言って腰に手をあてているのはお馴染みクルパ先輩。

いつものセミロングの髪を、今日はポニーテールにしていた。

ってか先輩の私服初めて見た……

超普通だし。

あ、ちなみに現在アクアランドの前。

時刻は昼10時。

「キョウハセンパイノゴキゲンヲトル！」

緑のダウンジャケットにジーンズのジョンソン。

コヤツ、まだあの夢を持っていたのかッ!!

「流れるプールを絶対制覇してみせるわッ！」

白いパーカー&黒っぽいジーンズが目印のアキコさん。

彼女は今日、流れるプールを逆そうすんだってさ。
他の客に迷惑。

「……うう」

そして何故かモジモジしている琴浦さん。

相変わらずの純白ワンピース。

「よし、ではアクアランドに突入だ!!」

杵島先輩は子供だ。
精神が。

「うわッ、すげえ！」

広がった。

え？ 何がかって？

プールが。

「すげえ広さ！」

バカ広いプールには、大量の人間が浮かんでいた。
家族連れ、友達同士、バカップル等々。

「イイカクロガネ、センパイノゴキゲンヲトルノハコノオレダカラ
ナ！」

となりには金髪ジョンソン。

「……………」

コイツ、黄色い水泳帽子にピッチピチの競泳用海パン。
緑色のゴーグル。

すげえ浮いてる。

家族連れ多いレジャープールの中、超浮いてる。

周りの客の視線がッ！

「ハハッ、ミンナオマエノダセエカオミテワラッテルゾ！」

「……………」

半笑いのジョンソン。
痛い子だ。

しかし……

「遅いな」

約10分前にそれぞれ更衣室内へ入った化学部のメンバー。

まあ、男の俺とジョンソンはこうして着替え終わり、現在プールサイドにいるのだが。

「オマエ、マサカセンパイノミズギミテコウフンスンジャネーゾ！
？」

「黙れしエセ日本語野郎」

こんなジョンソンはほっておいて。

女子が遅い。

いやマジで。

「……しかし」

女ってのはいつも時間かかるよね、準備に。

何しても時間かかる。

「全く……先に泳いでようかな」

「ミズギギャルノムナモトニメガオヨグツテカ？」

「日本語おかしいぞ金髪」

その時……

「も、もしかして黒鉄君？」

遠くのほうから聞こえた、俺を呼ぶ声。

「あ？」

俺は声のした方へ振り返った。

そこには……

「やっぱり、黒鉄君だっ!!」

黒髪ショートの子のビキニガールがいた。
そしてその顔には、見覚えが。

「もしかして……賀谷か？」

「久しぶりだね、黒鉄君!!」

「ク、クロガネニヘンナフラグガタチヤガッタ!」

元素15 今回の主役はある意味焼きそば

賀谷 由姫という女子がいる。

平仮名変換すると、かたに ゆき。

黒髪ショート、肌は白く爽やかな笑顔が特徴。

そしてそのボディは、あの琴浦さんに匹敵するほどのナイスな……。

彼女とは小学校中学校が同じ。

そう、あのお菓子なアキコと同じ境遇だね。

まあ、中学校時代はそこそ喋りはしていたけど。

それだけで、特別何かはなかった。

現在は何とお隣の県にある六角高校に通っています。

そう、我ら石鉄高校ではないのね。

で、現在アクアランド。

そこで俺は、中学校の卒業式以来約3ヶ月ぶりに賀谷と再会した。
全く変わってなかった。

まあ、3ヶ月じゃ変わらないか。

「久しぶりだな賀谷、元気してたか？」

「うん、元気にしてた！」

おお……相変わらずの爽やかスマイル！
この笑顔求め、中学校時代は男子が賀谷に群がっていたな……。

「そうか……ならいいや」

元気なら安心だ。

「黒鉄君は……今日は友達と来てるの？」

そう言ってジョンソンを指差す賀谷。

「……あれは友達じゃあない。エセ日本語使いの自己中ハーフ人だ」

「ダメレシゲボクノクロガネ」

中指突き立てるジョンソン。

何？ 突き指させて欲しいのか？

「下僕？」

「ああ、あの自己中ハーフ人が俺の下僕って事」

「チゲーヨ、マチガツタチシキヲオシエルナクロガネッ！！」

「……カタカナだと読みにくいね」

「だろ？ 批判がこないのが不思議なくらいだ」

「ソコニフレチャダメダロバカ！！」

ふう、ジョンソン激昂。

面倒くさい奴だ。

「……あ、あのね黒鉄君」

「ん？」

その時、賀谷が俺の腕をつついてきた。

何？

「あの……ひ、久しぶりに会ったんだし、たまには何か……食事で

もしない？」

「食事？」

「うん……そ、そのテラスとかでさ」

賀谷の視線の先には、白いテーブルがあるテラスが。

確かに腹減ったし……焼きそば食べたい。

……が。

クルパと琴浦さんとアキコを待たなくちゃいけないし……

さあ、ギャルゲー的選択肢！！

1、クルパ？ 琴浦？ アキコ？ んなの無視無視。焼きそば食べようぜ焼きそば。

2、やっぱり先輩や琴浦さんを待たないと……元は先輩が連れてきてくれた訳だし……

3、ジョンソン、あとは任せたッ！！ 俺はとにかく逃げるぜッ！！

……3はないな。

逃げたらアカンでしょ。

って事で。

「じゃあ焼きそばでも食べるか」

1を選択。

だってクルパ来ないんだもん。

ジョンソンは1人で未だ激昂中。
浮き輪に向かって怒鳴ってます。

痛い子だ……本当に痛い子だ……。

だからとりあえずは焼きそば……！！

「ほ、本当！？」

「あ、ああ……腹減ったしな」

「そう……じゃ、じゃあ早く行こう！」

何故か爽やかスマイルな賀谷。

そんなに腹、減ってたのかな？

「この焼きそばうめえな!!」

ソースと青のり、紅しょうがが見事ドッキング!!

「そんなに美味しいの？」

「うまい、うますぎる!!」

現在アクアランドのとあるテラス。

そこで俺は賀谷と食事中。

俺は焼きそば、賀谷はたこ焼き。

どっちも焼き焼き。

「このソースの甘味なんかは特にもう!!」

焼きそばうまい!

超うまい!

ソースヤバイ!

「そうなんだ。黒鉄君、凄い笑顔だしね」

そう言う賀谷も笑顔。

「賀谷、お前も一口食べてみるよ！」

俺は焼きそばの皿を賀谷に差し出す。
美味しいものはお裾分け精神黒鉄君！

「えっ!？」

「うまいから！」

本当に美味しいのコレ！

「わ、私たこ焼きだから……お箸ないよ？」

そう言う賀谷の手にはたこ焼き用のつまようじ一本。

……仕方ないな。

「じゃあホレ、俺の箸使っていいから」

「えっ!？」

賀谷の顔が何故か赤くなった。
……湯だった？

「あ、もしかして俺の使った箸じゃ嫌か？」

相手は女子。

これでも一応、毎日歯は磨いているのだが……。

「い、いや、そう言う事じゃなくて……」

相変わらず顔赤い。

「ん？ ああ、そう言う事か」

「はい？」

俺は全てを悟った。

多分今、賀谷は何らかの理由で箸が持てないんだ！！

手を痛めているとかで。

フフツ、名推理だぜ俺ッ！！

だったら…

「ホレ、口開けろ」

俺、箸で焼きそばを掴み賀谷の口前へ。

「ええッ！！」

さらに赤くなった賀谷。

何か林檎並みの赤さ。

「いいから、うまいぞコレ！！」

……後々考えると、この時の俺は大胆だったなあ。

でもこの時は焼きそばの旨味の事しか頭になくて……。

「ほれ、あーん……」

「あ、あーん……」

賀谷の口が多少開いた。
よし、そこに入れ……

「頂きッ!!」

パグッ!!

「……え？」

その時、どっかからアキコが沸いて出た。

そして、賀谷の口にインするはずだった焼きそばを横から一口。

箸ごと持っていかれた。

って、

「なっ、おま、どこから沸いて出た!？」

水色を基調とした見た目爽やかなビキニ。

アキコは体育会系だからボディライン超スリム。
身長低いけど。

男の希望、青春の賜物は標準くらいの大きさ。

「あ、由姫じゃん！ 久しぶり！！」

「おい、まず人の話を聞けッ！！」

全く……。

一方、焼きそばを取られた賀谷は……。

「あ、アキコ？ 何で黒鉄君と一緒に！？」

素で驚いてた。

「だからアキコじゃなくて明子！ め・い・こ！！」

いやアキコでいいだろ。

「何！？ もしかして黒鉄君、アキコと……」

何か勘違いしてねえか賀谷？

超真っ赤だった顔が今、超真っ青に……。

「だからめ・い・こだって言ってるでしょ！！」

「アキコ、それ以前にもっと解くべき誤解があるだろッ！」

「だからめいこだって!!」

あー面倒くさい!!

賀谷、顔青い。

よし、ここは強引にでも誤解を解こう!!

「いいか賀谷、俺とアキコは決して付き……」

「だからめいこお!!」

ああ痛い!

殴るなアキコ!!

「……うん、わかったよ」

だあッ!!

椅子から立ち上がった賀谷。

きつとまだ誤解解けてないぞ!!

「待て賀谷、ちょ、焼きそばあげるから……」

「マジで! じゃあもう!!」

「アキコ、テメエに言ってるんじゃない！ あっ食うなコラッ！！」

「うまッ！！」

「だから食うな……あつ、ちょ、賀谷ッ！！」

最悪だ……

うつむきながらあっち行っちゃったよ……

その背中からは何とも言えない負のオーラが……

「本当美味しいねコレ、特にソースがもう！！」

今回、一番幸せだったのはきつとコイツだな。

チクショー！！

「はぁ〜ウマッ！！」

元素16 濁流を逆そうするべからず

「くそお……焼きそばは食べられ、賀谷には変な誤解を……」

「まあまあテツ、そう落ち込まない！」

「落ち込ませたのはお前だッ！」

結局、あの後賀谷はどっかへ行ってしまった。

しかも変な誤解付きで。

はあ……。

「何!?! そんなにアタシが焼きそば食べた事怒ってんの!?!」

そして今、何故かアキコは急に若干機嫌が悪くなった。
何故だ。

「いや、別に焼きそばの事はどうでも……」

どっちかと言うと、誤解の方。

変な噂が広がらなければいいが……

「じゃ、じゃあ……もしかして」

「ん？」

さっきとは違い、今度はちょっと俯き気味のアキコさん。
感情豊かだね。

「その……あ、アタシとテツが付き合ってるって誤解が……嫌なの？」

「……………」

こいつ、読心術とか心得てる？

「そ、そうなの？」

「あーその……えっと……」

……この場合の的確な答えは何だ！？

正直に言うか？

けどアキコさん、明らかに暗い雰囲気だし……
ってか何で？

と、とにかくどうする、俺！？

「あ……いや、お、お前が嫌がるんじゃないかなと思って……その誤解」

結局、こんな感じでまとめてみました。

「……えっ？」

「いやだから、お前嫌だろ？　こんなチンチクリンな男と付き合ってるって誤解されるのはさ？」

超絶自虐的な言い訳。

……そうだよ、俺はチンチクリンだよッ！

「……………」

「……あれ、アキコ……さん？」

ど、どうした？

何故黙る？

……ああ、チンチクリンとは会話するのも嫌なのね。

……複雑。

「……………だし」

「ん？」

その時、アキコは超小さい声で何かを呟いた。

き、聞こえない……。

はあ……聞き取れないから、仕方なく耳を近づけ……

「アタシは明子だしッ!!」

「がはっ!!」

叫ばれた。

耳元で。

ぎゃああああッ!!

「ばっ、てめっ、耳元で叫ぶなバカッ!!」

み、耳がっ!!

「う、うるさいッ! アタシはアキコじゃなくてめ・い・こッ!!」

いやアキコで。

「あ、アタシは別に……その……て、テツでも……」

赤いぞアキコ。

何でだ？

……それより。

「み、耳があッ！」

「……へ？」

「へ？　じゃなくて、耳があッ！」

まだキンキンする。
鼓膜ピンチ。

その時……。

「……ッ！！！」

グイッ

「ぎゃああああああッ！！！！」

耳をつねりやがった。

「な、何すんだテメエッ！！」

被ダメージ1.5補正。

「……死ね、このチンチクリン野郎ッ！！」

「ぐはっ……」

精神に563のダメージ。

黒鉄は倒れた。

もう手持ちに戦えるポケモ……徹哉はいない。

……目の前が真っ白になった――

「フスベジムハスゲーキチクダヨナ？ ドラゴントカキチクスギ！」

「……いつの時代の話をしてんだ金髪」

去年あたりにリメイクされたよね。

あれ、一昨年だっけ？

それより……

「ツライ……」

今日は賀谷とアキコの二人から嫌われました。

うう……（泣）

「Oよ、共に流れるプールへ行かないか!？」

「……ん？」

聞き慣れた声。
俺は振り返った。

「ほら、浮き輪も持ってきたぞO!!」

「………」

そこには、黒いビキニ……てか、杵島先輩超人っぽい!!

平らな胸以外は完璧なスタイル!!

「……ん? どうしたO？」

「あ、いや……」

な、何を見とれてんだチンチクリンな俺ッ!

自制心自制心……。

「スケベダナクロガネ。サスガコーイチダンシ」

「デメエも高一だろ」

このピチピチ競泳海パン野郎。

「……お、お待たせ」

それから数分後、向こうからやって来たのは……

「おおC、遅いではないか!!」

琴浦さん登場。

琴浦さん、フリルの付いたワンピース状の水着……ってか、

「……………」

い、色んな意味で凄かった。

「ど……どう……ですか？」

ぶはっ！

その水着でモジモジはアカンっ！

「凄く似合っているぞC!!」

杵島先輩跳び跳ねるなコラ。
滑るぞ。

「コ、コレガジャパニーズミスギ……ジャパニーズハレベルタカイ
……」

「確かお前ハーフだろ、半分日本人だろ」

全く……

「……あれ？」

その時、琴浦さんが気付いた。

「施仗さんは？」

「ん、アキコ？」

ヤツはさっき、俺の耳つねって一人流れるプールに……

「……………」

で、流れるプールの方に目をやると……

「おりゃあああああああ!!」

バシャバシャッ!!

「……………」

流れるプールをクロールで逆そう中でした。

しかも監視員、アキコに気付いてねえし。

「何やってんだアイツ……」

やけくそ的な感じだな。

何のやけくそかは知らんが。

「さて、私たちも流れる濁流の中に飛び込むとするか!」

「濁流は初めから流れてます」

プールを濁流と表現するクルパはほっというて、俺は浮き輪を持って
いざ、流れるプールへ。

あ、決して泳げない訳ではないからね？

で、

「……ぬるい」

ぬるいプールを流され中。

……ぬるい。

そして

「人が多い……」

家族連れの方が半分、友達と来てますの方が半分といった所か。

とにかく、人が多過ぎてなかなか流されない。

「Auよ、私はここで水素発生実験を試みたいのだが……」

「イトオモイマスヨ、センパイ！」

……後ろから、何だかとても危ない話声が聞こえたが、無視。

「すごい……本当に流される……」

隣で同じく浮き輪ごと流されている琴浦さん。

しかし、そっちを向くと自制心がうんぬんなので向かない。

この流れるプールに、俺の安息はないらしい。

その時……

「おりゃああああああッ!!」

「……ヤバくね？」

前方から逆そうしてくる、危ないフラグの塊。

ヤバイよな、これ。

「あ、アキコ！ 一旦止まれッ!!」

このままだとぶつかるぞ!!

しかし……

「おりゃああああああッ!!」

聞こえてなかった。

で、もちろん……

バシヤッ!!

「ぐおっ!？」

「痛っ!」

浮き輪にくる、もんの凄い衝撃!

すげえ波。

ザプーンだよ。

そして……

「……っ!!」

何故か沈んでいくアキコ……って、

「ちょ、マズいッ!」

俺はとっさに浮き輪から脱出し、水中へ。

意外と深い流れるプール。

しかもネーミング通りに流れてます。

その中、アキコは無音で流れながら沈んでいく。

「……くそっ」

俺は必死に潜り、手を伸ばす。

届け……

そして……

「大丈夫かO、Liっ!？」

何とか力付くでアキコをプールサイドまで運んだ俺。

ああ……流れが辛い。

そして、後ろから流れてきた杵島先輩とジョンソン、琴浦さんが合流。

「けほっけほっ！」

アキコは大量に水を飲んだせい、盛大にむせております。

……まあ、意識はあるみたいで良かった。

「おいアキコ、逆そうは止めような……はあ」

辛い……

「けほっけほっ！」

まだむせてる。

監視員は何だかあっちであたふたしているし。

「施仗さん、大丈夫？」

心底心配そうな表情の琴浦さん。

「けほっけほっ……だ、大丈夫」

しかし、今だ盛大にむせ中。

全く……

「とりあえず医務室行くか？」

「……大丈夫」

……やっぱり言うか、何と言うか。

元気はないな。

いつものお菓子なアキコさんパワーはどこへやら。

まあ、今は仕方ないか。

「……けど、やっぱり医務室へは行った方がいいぞ？」

だってずーっとむせてんだもん、アキコ。

「だ、だから大丈夫……けほっけほっ」

何で強がるかなあ。

……しゃーない。

「わかった。俺が連れてく」

「……へ？」

だって心配なんだもん。

「先輩と琴浦さんとジョンソンは適当に遊んでくれ。アキコは俺が医務室まで連れてくから」

「しかし……」

仲間の事となると、結構優しい&心配性な杵島先輩。

「大丈夫ですよ、医務室へ運ぶだけですから」

そして、俺はプールサイドに座っているアキコの肩と足に手を回し
……

「おしっ!」

「ちょ……」

イツァ抱っこ。

いわゆるお姫様抱っこってヤツ。

「さて、行くか」

「え、ちょ、ちょっと……」

「じゃ、ちょっくら医務室まで行ってくるんで!」

そう言って、みんなの元を後にする。

「……クロガネ、アレワザトヤッテンデスカネ?」

「……さあな。じゃあ、今度は濁流スライダーに行くぞA u、C！」

「ま、待って下さい……」

「……ん？ どうしたアキコ？」

現在医務室へ向かう途中。

なんかやけにアキコが静かだ。

俺の腕の中で微動だにしない。

「あ、アキコじゃないし……」

そしてやけに迫力がない。

「大丈夫か？ マジで具合悪いとか？」

だったら大変だけど。

「いや……そ、その……」

そっぽを向くアキコ。

そのせいで表情がうまく見えない。

「ん？」

「いや、その……あ、ありがと……」

小さな声だったけど、確かにそう聞こえた。

「……どういたしまして」

まあ、元はコイツがプールを逆そうしたのが悪いのだが……

まあ、今はいいか。

元素17 誤解と純情は紙一重的な感じだと俺は思うよ？

「さて、ではそろそろ帰るとするか！」

現在、時刻は午後5時。

俺達はまだ、アクアランド内にいた。

……今日は疲れたなあ。

賀谷には変な誤解をされたままだし。

アキコに至っては事故るし。

あの後、結局医務室まで行ったのだが、
「異常なし」

との事務員の言葉一つで俺達は返された。

無愛想な事務員だ。

「うーん……今日は遊んだな」

とか言う杵島先輩。

コヤツ、実はプールサイド等で結構ナンパされてたりしていた。

色黒の兄ちゃんが

「ねえその君、今日1人？」

とか聞いてきた。

そしたらジョンソンが

「キタネエデセンパイヲサワルンジャー！！」

で、半ばリアルファイトにまで発展。

監視員が止めに入るまで続いていたな。

金髪はもつと自重すべき。

ってかジョンソン、意外と喧嘩強かったなあ。

「さてOよ、帰りはどこか寄っていくか？」

浮き輪の空気を抜きながら杵島先輩は質問。

「……いや、多分寄る寄らない以前に……無理だと思います」

俺は視線をプールサイドのベンチへ。

そこには遊び疲れ、生きた屍と化している3つの人影があった。

「……みんな、超げっそりしてるな」

ウォーターライダーや流れるプール、波がハンパねえプール等々。

今日はたくさん遊んだからな。

「先輩、とりあえず今日はもう寄り道せずに帰りましょう」

「……そうだな」

「く、黒鉄君！」

「ん？」

結局寄り道せずに帰る事を決め、俺は着替えるために更衣室へと向かう。

その途中、突然どこから俺の名前を呼ぶ声が。

そして、遠くに彼女を発見した。

「……もしかして、賀谷か？」

こちらに小走りで掛けよってくるのは、やっぱり賀谷だ。

「く、黒鉄君！」

「な、何？」

ちよつと声がでかい……

ってか、何用？

「あの……んんもう!!」

何？

何か……突然何？

何故地団駄踏んでる？

「あの……何か……用か？」

俺、そろそろ着替えに行かないと、帰りの電車が……

その時、彼女は突然言った。

「私、黒鉄君の事が好きだったッ!!」

……ん？

え？

「私、好きだった！ 昔は黒鉄君の事が、好きだった！」

……だった？

過去形？

ってか

「……え？」

黒鉄徹哉混乱中。

「だ、だけど今は違う!!」

やっぱり過去形だ。

「だから……だから……」

賀谷の顔は真っ赤ッか。

「あ、アキコを幸せにしてあげてね!!」

……意味がわからない。

……ん？

「じゃ、じゃあねッ!!」

そして、賀谷は来た時以上に猛ダッシュで去って行った。

……あ。

嘘だ。

やっと今、何となくだけど……全て理解した。

賀谷……

「……複雑だ」

誤解と純情は紙一重。

その後、賀谷から謎の告白を受けた俺は、それを素直に受け止めるべきかどうかを考え……ではなく、

「……動けない」

普通に電車内にいた。

しかも左にはアキコ。

右には琴浦さん。

二人は既に夢の中。

両方から俺の肩に寄りかかり中。

……至福や。

つな事を考えている場合ではなくて。

「……はあ」

やっぱりと言うか、賀谷の事を考えちゃう俺がいる。

複雑や。

化学コメディ小説が、昼ドラ並みにドロドロしててはアカン。

ここは是非とも主人公補正で全てを丸く納めたいのだが、生憎作者は俺に補正の力を与えてはくれない。

他力本願禁止か。

その時、電車が少し揺れた。

「おっと……」

俺はアキコと琴浦さんが衝撃で起きないよう、バランスを取る。

あ、ちなみにジョンソンは電車の先頭車両へ行ってしまった。

運転席が見たいんだってさ。

小2か。

で、杵島先輩は俺の前、向かいの席にいます。

「……時にOよ」

「な、何ですか？」

「……CとL iの寝込みを襲うなら今だぞ？」

「ハハハ、幻聴が聞こえらあ」

とにかく早く帰りたい。

「ついたあッ！」

その後、電車は俺とアキコが降りる駅に到着。

琴浦さんはこの次の駅。

杵島先輩とジョンソンはさらに次の駅で降りるらしい。

「おら二人共、ちょっと起きてくれ！」

俺は相変わらず寄りかかり状態の二人を起こす。

ああ、至福の時間が……

「ん……んん……」

きゃーっ！！

寝起きの琴浦さん、何かすげえ！！

「あれ、もうついた？」

アキコは寝癖すげえ。

こう、モワアツと。

「じゃあ先輩、俺とアキコはこの駅なんで」

「……めいこ」

寝起きでも訂正するのかコイツ。

小声で迫力ねえけど。

「そうか。ではO、L i、また明日部活でな!!」

杵島先輩は疲れた表情ながらも笑顔。

……杵島先輩でも疲れる時ってあるんだな。

いつも超人的な感じの人だから……

改めて、先輩もちゃんとした女の子なんだなって実感。

「はい。先輩、今日はありがとうございました」

とりあえずはお礼。

「……Oよ」

「……はい？」

と、突然真顔になった杵島先輩。

「どうしよう……」

「……え？」

何だ？

どうした？

「アクアランドの更衣室に……浮き輪忘れてきてしまった」

「知るか」

俺は半ばアキコを引きづりながら下車

いい加減寝てないで、自分の足で歩けアキコ。

そして、ゆっくりと走り出す電車。

電車の窓からは、杵島先輩の慌て顔が見れた。
琴浦さんは眠そうな顔で手をふっている。

俺も手をふった。

また明日！ ……って。

空は薄暗いながらも、まだオレンジ色が残っている。

「……さてと」

俺はアキコを背中の方に回し、おんぶ。

そして、駅の改札へと向かい、歩き出した。

元素17 誤解と純情は紙一重的な感じだと俺は思うよ？（後書き）

こんにちは！

作者の五円玉です！

さてさて、今話にてプールのお話が終了しました。

主人公に補正なんかいらねえだろ。

他力本願禁止だ！

そして、次回からはこの元素彼女にとって1つの節目となる、ちょっと長いお話を書こうかと思っています。

多分、一部コメディイ路線からは外れてしまう……かもです。

本当、真面目なお話なんで。

しかし、やはり元素彼女は基本コメディイなんで、そういったコメディイシーンは今まで通りに入れていきたいとは思っています。

そもそも作者が暗い話自体、苦手なんで。

では、そういう事で。

次回をお楽しみに！

元素18 Okonomiyaki that flew over the

こんにちは！

五円玉です！

さてさて、今回から元素彼女は新章突入です。

化学部に襲いくる、1つの試練。

黒鉄君他化学部は、この試練を乗り越える事が出来るのか！？

元素18 Okonomiyaki that flew over the

その時、俺の視界は真っ赤に染まった。

頭にくる、強い衝撃。

宙に浮く体。

息を吸おうとしても、それを肺が受け付けない。

そして、全身に激しい痛み。

全てが逆転し、俺の平行感覚は一瞬のうちになくなる。

『ハッハッハ！ 流石は姫を守る騎士って所かッ！？』

俺は地面に倒れた。

目の前には、紅い男の姿。

そして――

「……ッ！」

一筋の涙を流す、彼女の姿があった……。。

元素な彼女と記号な俺

元素な彼女の、最後の文化祭——

そして、時は少し遡る。

7月1日

放課後……

科学室内

「まだか〇？　いつまで待たせる気だ？」

「あ、とてもいい匂い……」

「ハヤクシロクロガネ、センパイヲマタセルンジャーネーヨ！」

「テツうゝ……まだあゝ？」

四者四様の意見を述べているのは、毎度お馴染み化学部連中。

そして俺、黒鉄徹哉は化学準備室にあったカセットコンロを使い（無断で）……

ジュワァー！！

「……あっつい」

お好み焼きを作っていた。

……はい皆さんこんにちは。

みんなの主人公、黒鉄徹哉ですよ。

……焼いてます。

現在、7月1日。
真夏日。

そんな日に、俺は熱々の鉄板とカセットコンロを使い、お好み焼きを作っています。

ちなみに室内はクーラーガンガン。

そして、俺は半ば無理矢理お好み焼きを焼かされている。

全ては約1時間前

『夏だがお好み焼きが食べたい！』

とか言い出したクルパが全ての元凶。

で、

『じゃあ、ジャンケンで負けた人が食費代を払って、2番目に負けた人が調理するって事で!』

と、お菓子なアキコさんがフラグを立て。

『……嘘だ』

言い出しっぺのアキコさんがジャンケンに負けて。

『……あ』

次に俺がジャンケンに負けた。

で、

『アタシのお菓子代が飛んだ……』

と嘆くアキコを尻目に、俺は好み焼きを焼いている。

はい回想終了。

「Oよ、ちゃんとキャベツは入れたか？」

「大丈夫、アンタの分には芯まで入れたから」

「そうか、なら良い！」

と、多少の嫌みも何のそのの杵島先輩。

ジュワァ〜！

……暑い。

鉄板から立ち込める湯気。

スプリンクラーが作動しないよう、スプリンクラーにはビニール袋を被せている。

つまり、マジで火事った時、俺らは皆道連れや。

「く、黒鉄君」

「ん？」

ちょうど半面が焼け、さてひっくり返そうとした時、何故か琴浦さん拳手。

「あ、あの……」

「何？」

どうした？

もしかして、さっき入れた具材の中に、嫌いなモノでもあったのか？

「その……わ、私が……ひっくり返してもいい？」

「え？ あ、ああ。別にいいけど……」

ひっくり返したいの？

琴浦さん、超目が輝いてるし。

キラキラって。

「じゃあ……はい」

そう行って、フライ返しを琴浦さんに渡す。

ちなみにこのフライ返しも、無断で家庭科室から借りてきたモノ。

バレたらお叱りを受けるであろうな……。

「じゃ、じゃあ……」

琴浦さん、プルプル震える手でフライ返しを握り、ゆっくりお好み焼きの下へ入れていく。

「Cよ、こういう時は勢いが大事だぞ!？」

杵島先輩のアドバイス。

「……………」

琴浦さん、それを見視。

ってか、多分集中し過ぎて聞いている方が正しい。

で、

「……えいっ！」

琴浦さん、110%の力で好み焼きをひっくり返し……

って、

「琴浦さん力みすぎッ!!」

で、好み焼きは宙へと舞い……

「……あ」

ダブルスクリーンゲーム機をいじっていた金髪の頭に直撃。

ジュワァー!!

「あ、あつづッ!!」

突然の衝撃にカタコトキャラを忘れたジョンソン。

声が40のオッサンみたいだった。

野太い。

で、

「あ……ああ……」

琴浦さんが嘆き出す。

「ああっついッ！ あゝあゝあゝ……！！！」

ジョンソン暴れ出す。

「アッハッハッハッ！！ み、ミラクル起きたっ！！！」

アキコは爆笑。

「どうしたA U？ 踊りでも踊っているのか？」

クルパは衝撃の瞬間を見逃していたため、現状を理解してない。

で、俺は……

「……………」

……もう、言葉すら出なかった。

「結局、好み焼きは食べれなかったな……」

その日の部活終了後。

昇降口まではみんな一緒に降りてきた。

杵島先輩の背中には黒い何かが見えたが、まあ、うん、ドンマイ。

「結局、アタシのお菓子代はどこに……」

まあ、アキコもドンマイ。

……で、俺は下駄箱で靴に履き替える時、たまたま掲示してあった1枚のプリントが目に入った。

……第58回、石鉄高校文化祭“stone&ironフェスティバル!”開催

ネーミングセンス……。

ってか、

「杵島先輩？」

「ん？」

俺は隣の下駄箱で靴に履き替えている杵島先輩に質問。

「あの、そういや文化祭っていつ頃……？」

「9月の半ば」

そ、即答ッ！？

そ、それより

「ウチの部活も何か出し物とかするんですか？」

一応文化部だし。

「そうだな……まあ、何かはするつもりだが……」

するつもりってオイ。

「確か、部活動の文化祭の出し物決めって、7月中に生徒会に報告しないといけないんでしたっけ？」

確かそうだ。

文化祭に何か出店する部活動は、7月中に何を出すかを生徒会に報告しなければならぬ。

「そう言えばそうだな……どうするO?」

「後輩に投げやりは良くないですよ先輩」

さて、このクルパはとりあえず置いといて。

文化祭か……

化学部を学校一の有名な部活にする

この目標を達成させるには、文化祭は超が3つ付くほどの重要な行事だ。

ここできかに人気を取るか。

……おそらくクルパは俺に投げやりしてくるだろうし。

琴浦さんは接客とか苦手そうだし。

ジョンソンはカタコトで駄目だし。

「オイ、ソノリユウハナンダコラ」

アキコは化学自体が苦手だから役立たずだし。

「……………」

さて、どうしたものか。

元素18. 5 僕の名前はガーネット和島させニヨリータ!! (前書き)

こんにちは。

いつも元素彼女を読んで頂き、本当にありがとうございます！

さて、今回は作者の出来心で番外編をお送りします。

まさかの主人公チェンジです。

誰が代わりの主役なのかは……サブタイトル見ればわかるよね？

では！

元素18. 5 僕の名前はガーネット和島させニヨリータ!!

「うーん……今日もナイスでエブリワンな青空だね!」

朝日が眩しいよセニヨリータ!

やあみんな、グッド・シャーロット・モーニング!!

みんな覚えているかい?

……そう、僕の名前はガーネット和島!

現在の物理部の部長さベイベー!!

「フフっ、あああ……今日も太陽が僕らを照らしているのだな」

今僕は自宅から通学中。

もちろん、行き先は私立石鉄高等学校!!

「鳥のさえずり、風のオーケストラ、そして僕の命の輝きッ!」

町の全てが僕を歓迎してくれているような感じがするね!

あああ……今日もきっと素晴らしい1日が始まるんだろうな……

さあ、素晴らしい学校生活の始まりだ!!

「……あ、出たよ金髪リーゼント和島!」

……おや?

いつの間にか僕の隣にいたのは、同じクラスのコットン甲野ではないかッ!!

「コットン甲野じゃねえし、普通に甲野一太だし」

ワアイ!?

なぜ彼は僕の心の叫びが聞こえているんだい?

「うるせえ黙れ和島定信」

「和島定信? それは一体だれの事だい?」

「お前の本名だろうがッ!!」

……何を言っているんだこのモミアゲ少年は?

僕の名前はガーネット和島さ!!

……コットン甲野とは一年生の頃から同じクラスだね。

僕のこの美しいリーゼントが気に入らないのか、やたらちよっかいを出してくるんだ。

それはまるで、好きな異性の子にちよっかいを出してしまう、幼き小学生の如く……

「……定信てめえ、超気持ち悪いぞ」

「だから僕は定信ではない！ ガーネット和島だッ！！」

全く……いつになったら僕の名前を覚えてくれるのだか。

そして何故、彼は僕の心を読めるのだ？

これが愛の以心伝心ってやつなのかいハニー？

「……もう俺、てめえとは関わりを持たない事にするわ」

おやおや？

コットン甲野がはや歩きで学校の方へと行ってしまったではないかッ！

全く……照れているのだな？

まあ、流石の僕も同性相手には気が引けるが……彼が本気なら……

「……………」

……おや？

今、僕の横をマッハの速度で素通りしていったのはまさか……

「……………」

「……やっぱり、黒鉄くんではないかッ!!」

あれは憎き杵島はがねの部下、黒鉄徹哉!!

忘れもしない、あの横顔!!

「おい、待ってくれ黒鉄くん!!」

僕はダッシュで追いかける。

「あ、ヤベッ、バレた!!」

何故だ?

急にスピードを上げ走る黒鉄くん。

「待ってくれ黒鉄くん、何故きみは走っているんだい?」

「イベントフラグを立てたくねえんだよッ!」

相変わらず猛スピードで走る黒鉄くん。

僕も猛スピードで追いかけよう!!

「あっ、てめえ、ついてくんなッ!」

「待ちたまえ黒鉄くん、今日こそ君を拉致して杵島はがねを……」

「やっぱりこれ、イベントフラグがバリバリに立ってるッ!!」

何というスピード!

まさにあれは日本のベン・ジョンソン!!

「……ア? ダレガニホンノジョンソン?」

途中、どこかで見た事のある金髪の横を素通りし、黒鉄くんの後を追う。

「くそっ、まだついてきてんの!? しつこいぞ金髪リーゼントッ!」

「だから僕はガーネット和島さベイバー! 大人しく拉致される黒鉄くん!」

「絶対嫌だ!!」

……くそっ、意外と速いな黒鉄徹哉!

もうすぐで学校だ!

これで万が一科学室にでも逃げ込まれたら、僕に勝ち目が無くなる。

ならば、その前に……

「……あら、そこにいるのはガーネット?」

おや?

僕の目の前の角から、見慣れた顔が。

「そこにいるのはレンドル倉坂じゃないか！」

そう。

この妖精の如き美貌の持ち主こそ、現在物理部副部長のレンドル倉坂！

まさに天使！

「どうしたのガーネット？ そんなに急いで？」

彼女も今登校らしいな。

「実はな、ほらあそこに……黒鉄徹哉がいるだろう？」

僕は遠くを全力疾走している黒鉄くんを指差す。

「まあ、本当？ ならば早く捕まえなくては！」

レンドルは制服の袖を捲り、その美白な腕を外に見せつけている！

ナイスだ！

「さあガーネット、わたくし達も早く走って、彼を捕まえましょう！」

「そうだなレンドル。さあ、行こうかッ！」

そして、僕らは全力で走り出す。

全てを超越せし、陸の頂点に立つあのチーターの如く!!

「うおッ、なんか追っ手が増えてるッ!？」

黒鉄くんはラストスパートを掛けたらしく、さらにスピードが上がるっているな!？

「待つんだ黒鉄くん、僕ら物理部の捕虜となれ!!」

「そうですわ! 大人しく捕まりなさいッ!」

僕らも黒鉄くん同様、一気にスパートを掛けようではないかせニョール!!

「はあはあ……くそッ……」

それからしばらくして、学校の校門が見えてきた辺り。

とうとう日本のベン・ジョンソンがバテてきたようだ！！
スピードが明らかに落ちてきている！

「ガーネットっ！」

「ああ、今がチャンスだッ！！」

僕とレンドルは互いに頷き、ラストスパートを掛けた！！

「うわっ、く、来るな優しい物理部ッ！」

黒鉄くんはとうとう脇腹を押さえ、はや歩き状態に！！

「逃がさないぞ黒鉄くんッ！」

「逃がしはしませんわッ！！」

「ちょ、ちょっとタンマ……ゲホッゲホッ」

……おや？

黒鉄くんがむせているぞ？

盛大に……むせている！！

「レンドル、一旦ストップだ」

「え……？」

僕はレンドルに止まるよう指示。

「大丈夫か黒鉄くん？ 結構むせているようだ？」

「……やっぱりあんたら、優しいヤツだ」

とか言いながらも、相変わらずむせている黒鉄くん。

もしかして……喘息なのか？

それとも……結核？

まさか……末期がん？

「本当に大丈夫なのか？ 保健室まで運ぼうか？」

「……あんたさ、何かその優しさの後ろにいつも盛大な妄想とかが入ってそうだよね」

何を言っているのだ黒鉄くんは？

「とにかく、一旦保健室まで行った方が……」

その時……

「あ！ あんたら、またテツにちよっかい出してるわね！？」

後ろから聞こえた、ガールの声。
レンドル……ではなさそうだな。

「……誰だい？」

僕は振り返った。

そこには……

「あんた達、覚悟は出来ているんでしょうね？」

……竹刀を構えた、鬼のようなガールが立っていたのさベイバー！

……むむ、このパターンはどこかで？

「待てアキコ、このままだとまた俺まで巻き添え喰ら……」

何故黒鉄くんが怯えているのだ？

「いくわよッ！」

何が？

「施丈桜花流三ノ型“夜桜”ッ！！」

次の瞬間……

鬼ガールは一瞬で僕とレンドル、黒鉄くんの横を通過し、僕らの背後へ。

そして……

バキッ

「ぐはっ……」

「あうっ……」

「だから何で俺までっ……」

少し遅れて、強烈な痛みが腹部に……

ぐうっ……

「相手の横を一瞬で切り抜け、その切り抜け様に腹部に強烈な斬撃を与える技……それが三ノ型、夜桜……うう」

何か説明しながら倒れていく黒鉄くん。

しかしながら……僕ももう……限界が……

視界が真っ暗に……

次に目を覚ましたのは、始業のチャイムが鳴った後のあの襲撃を受けた路上だった。

レンドルは同じく隣に倒れていて、何故か黒鉄くんの姿もあった。

白目むいて気絶中らしい。

「……これは完璧な遅刻だなセニョリータ」

元素19 宇宙人のせいなのか、単に俺が末期なのか

「わ、私はOの事なんか好きじゃないんだからねっ!!」

「……………はい？」

ある日の放課後。

科学室に嫌々部活しにいったら、笑顔の杵島先輩がいて。

……………なんかツンデレっぽくなっていた。

「ちょ、何じろじろと見てるのよ！ やめてよ変態っ！」

「…………俺、精神的に参ってきてるのかな？」

甘ったるい声を出し、ガラでもねえ事を言っているクルパ。

これは俺の幻聴なのか？

それともクルパが壊れているのか？

どっちなんだ？

「…………ねえ○」

「ああ…………幻覚だとしても俺は酸素呼ばわりなんだ」

幻覚ならせめて本名で読んで欲しい。

「○はさ…………そ、その…………えっと…………」

俺はほっぺたをグイッてつねる。
痛い。

これ、幻覚じゃねえ！？

「その…………私の事…………ど、どう思っ…………」

突然モジモジし出したクルパ。

ええい何かおかしい！

不覚にも一瞬、可愛いつて思ってしまった自分を殺したい。

モジモジは琴浦さんの特権なんだぞ！！

ってか、それより！

「先輩、ガチでどうかしました？ まさか宇宙人に脳内改造されたとか？」

本当に今日の杵島先輩はおかしい。

ツンデレキャラは元素彼女にまだ登場してないタイプなのに……

「な、何を言ってるのよ○！ 私は別にアンタの事なんてこれっぽっちも……」

「……マジで宇宙人にやられたのかよ」

今日は確か近所の病院は普通に営業中だったな。

この場合脳外科？
それとも精神科？

「ふ、ふんっ！ もう○なんか知らないっ！」

な、何もしてないのに嫌われた、俺？

ツンの使い方を間違ってるよ……

壊れたクルパはプイツと頬を膨らませ、科学準備室へと姿を消してしまった。

「……………」

……ああ。

もしかして俺、末期なのかもしれん。

「……どういう事だ、これ？」

あれから10分。

俺は科学室の席に着き、ペットボトルのお茶を一口。

……科学準備室に入った杵島先輩、今だ出てこず。

俺は何か怖くて科学準備室の中を覗く勇気が出ない。

だって怖いよ!!

宇宙人がいるかもだし!!

「いや……まさか、本当に宇宙人なんているわけ……」

ちょっと、何俺びびってんだ!?

宇宙人なんているわけねえだろ!!

仮に宇宙のどこかにいたとしても、こんな一般高校の科学準備室にはいないだろ!!

いたらノーベル何とか賞が貰えちゃうわッ!!

「ハハッ、何考えてんだ俺は」

ここは冷静に。

まだこの科学室にはアキコと琴浦さんとジョンソンは来ていない。

もし来たら、そいつに科学準備室の中を調べさせよう!!

うん、宇宙人はいないだろうけど。

……ってか

「それ以前に杵島先輩、なんで今日に限ってツンデレ?」

俺はとりあえずお茶を一口。

その時……

「あゝ！ お兄ちゃんだけお茶ずるゝい！ あたしにもちようだい
！」

「フブウツ！！」

突然の事にお茶を吹いてしまった。

……いやね、今科学準備室からね、

「ちょっとお兄ちゃん、きたないよお！」

「な、なな、なななッ！？」

その清楚な黒髪をツインテールにまとめ、

何故か制服ではなく、熊さんのプリントされたTシャツを着て、

超顔を真っ赤にし、

声がめっちゃ甘ったるい、

「もおゝ、お兄ちゃんはしょうがないなあ！」

「…………え、嘘？」

そこにいたのは、

「ロリ化した琴浦さんッ!？」

「……え？」

そうなのだ。

何故かそこには、めっちゃ幼げな琴浦さんがいたのだ!

いつもの清楚なモジモジはどこへやら。

し、しかも……

「どうしたのお兄ちゃん？」

「あ、ああああ、あり得ない……」

ちょ、お、お兄ちゃんって何ッ!？

い、妹なのか？

そうなのかッ!？

「ん？ 何かいつもと違うよお兄ちゃん」

「ああ……本当に俺、末期なのかもしれない」

これはマズい。

もしかして宇宙人に改造されたのって、俺の方なのか？

寝てる隙にやられた？

いや、そんな事よりもだ。

「お兄ちゃん？」

いや……その、こ、琴浦さんの着てる熊さんTシャツがね、小さいのか何なのかね、

そのですね……む、胸元の熊さんがですね……こ、こうビヨーンって……

ナイスなお胸がデカイのか何なのか、Tシャツにプリントされた熊さんがはち切れんばかりにこう……ビヨーンで。

「ちょ、お兄ちゃんどこ見てんのッ!？」

「え……あ、ぐはっ」

血へド吐きそうになった。

いけない!!

これ以上黒鉄くんの精神状態を悪化させてはいけない!!

「もう……お兄ちゃんのえっち!!」

「……………」

俺、ノックダウン。

琴浦さんは顔面を林檎なみに赤らめつつ、科学準備室へと帰っていた。
これはアカーン。

「何なんだ、今日は何かがおかしいぞ？」

俺、黒鉄徹哉は考える。

今朝は普通に家を出て。

普通に学校へ着き。

普通に授業受けて。

普通に科学室まで来た。

……よし、ここまではいつも通りだ。

で、いつも通り科学室へ入ったら、

杵島先輩がツンデレ化していた。

……あれ？

いつからおかしくなった？

俺は相変わらず科学室の席に着いてます。

さっきまでもう帰ろうとか考えてみたけど。

まだ、科学準備室の謎を解いていないわけで。

そもそもツンデレ杵島もロリ琴浦も、全ては科学準備室から出てきて、科学準備室へと帰っていった。

……つまり、あの科学準備室に何かある！！

「……おし」

ここは男徹哉、ちよっくら様子を見に行ってみるか！

「こ、怖がっているのはダメだ俺！　あの科学準備室の謎をこの手で

……」

そうして椅子から立ち上がった、

その時……

「あら、テツ……じゃなかった、黒鉄くんじゃないの？」

「……なっ!？」

一歩遅かった。

今度は科学準備室から……

「オッホッホッホ、いいわあ〜その顔、調教しがいがあるわあ!！」

三角赤ふち眼鏡、髪の毛おだんご、何かスーツ、手には鞭を持った
……

「お前アキコだろッ!？」

パシィインッ!!

「だからめいこおッ!！」

鞭で床を叩きつけ、何となく女王様っぽくしているアキコ（暫定）。

「ちょ、鞭危なッ!」

「オッホッホッホ、やっぱり下僕は下僕らしく、地面にでも這いつくばってなさいな!」

パシィインッ!!

「だから危なッ!」

つてかアキコに女王様は似合わねえ……。

「さあ下僕、さっそくご奉仕の時間ですよ」

「アキコ……とうとうお前、そっち方面に……」

昔はあんなに無垢だったのに……

小学生時代、仲良くみんなで鬼ごっこした思い出が脳内にフラッシュバック。

「だからめいこだって!!」

とかいいつつ、科学室の椅子に座るアキコ。

「さあ下僕、靴の裏でも舐めなさい!」

「……は?」

何言ってるの?

マジで宇宙人改造疑惑なの?

俺はどうなってるの?

そうこう考えているうちに、上履きをデーンって出してくるアキコ。

「ほら下僕、さっさと靴の裏をお舐めッ！」

「……………」

……やっぱり何かおかしい。

アキコは確かにSMで言ったら若干のソフトなSだが。

こいつ、こんな高飛車系人間だいきらいとか前に言ってたし。

それにツンデレ杵島も、ロリ琴浦も。

何か、絶対に裏がある。

……よし、ここは

「早く舐めなさい下僕！ それとも、鞭でお仕置きを……………」

「なあアキコ、今俺ポテチ持ってんだけど食べる？」

「食べる！！」

まさかの速答ッ！？

ってか引っ掛かった！！

「ほれ、コンソメだけど」

今朝、コンビニ行った時に何となく買ったポテチが役に立った！

俺はそのポテチの袋をアキコに渡す。

「お、ダブルコンソメ！！ サンキュー！！」

さっそく封を開け、ポテチを御賞味するエセ女王様。

超笑顔。

俺はそんなアキコの耳元へそっと近づき……

「……誰が下僕だ、ああ？」

囁いてみた。

「……あ、しまった」

アキコ、ポテチを口に入れながらフリーズ。

「しまったじゃねえよ！ お前何してんだよこれ！？」

とにかくこれで宇宙人疑惑解消。

「あ……いや、こ、これはね……」

一気に挙動不審になるアキコ。

しかしポテチへ伸ばす手だけは軽快に動く。

「まさか、さっきの二人も……」

全て分かった!!

「ちょ、テツこれは……」

やっぱりあたふた気味なアキコさん。

「お前ら……まさかグルで俺をはめようとしたな!？」

「ちょ、だからまずは話を……」

「なんだ、そんなに俺の戸惑う姿が見たかったのかよッ!？」

「だから違……」

あーもう!!

つまり俺はおどらされてたんだ!!

みんなでいつもと違う格好して、俺を困らせて楽しむ!!

「クソッ、どうせ全ての元凶はあのクルパだろッ!!」

俺は勢いよく歩き出し、科学準備室へと向かう。

どうせまだ科学準備室にいるんだろ、あのクルパ!!

チクシヨー!!!

今回ばかりはキレルぞ俺!!

怒鳴るぞ!!

「ちょ、待ってテツ……」

俺はアキコの制止を振り切って、科学準備室のドアのつてに手を掛ける。

クソッ、人を小馬鹿にしゃがって!!

「おいッ! 杵島はがねッ!!」

俺は怒りに身を任せ、ドアを開けた。

「杵島はがねッ、てめえいい加減につ……」

「……あ」

「……っ!!」

俺がドアを開けた先、科学準備室。

そこには……

「……は？」

その……何と言うか……

「………」

「………」

フリーズ&無言でこっちに視線を向ける、

お着替え中の杵島先輩と琴浦さんの姿が……

「……やべっ」

お互いにフリーズして約0.5秒。

先にフリーズから解けたのは俺。

で、咄嗟にドアを閉めた。

ボタンッ!

ドアの閉まる音が、科学室内に響く。

「青白のストライプと……純白」

……あれ？

俺は何を言っているんだ？

確かにドアを開けた時、その2つが見えた。

それは……何の色？

答えは……

「テエエツウウ……ッ!!」

「ひっ!!」

突然背後からする、謎の寒気。

何だろう……金縛りかな？

恐怖で体が動かない。

「アンタ今、見たわね……ッ!!」

「いや、その……ふ、不可抗力って言葉を、アキコさんはご存知かなあ……？」

俺はゆっくりと、ゆっくりと振り返ってみた。

そこには……

「だからめいこだって言ってるでしょうがあッ!!」

……鞭を構えた、鬼女王様の姿があった。

……あ、これ俺死ぬな。

次の瞬間……

パシィインッ!!

「ぎゃあああああああッ!!」

「コンカイノシンソウハ、ジカイニテアキラカニナルヨツ!!」

元素20 ツンデレもロリも女王様も自衛隊もまとめてかかって来い!

「なッ! ぶ、文化祭でコスプレ系化学体験をやるだってえ〜!?!」

な、なんだって!?!

「イエース!?!」

杵島先輩Vサイン!

やあ諸君!

私は黒鉄と申す者なり。

俺はさっき鬼アキコから頂戴した鞭アタックで腫れた顔を擦りつつ、

驚いていた。

何に？

クルパの発言に。

「実はな、今年の文化祭の化学部の出し物は、コスプレ系化学体験コーナーをやろうと」

b yクルパ

つまり、さっきまでのアレは……

「つまり、俺でその実験……いや、リハーサルしたんだな？」

「その通り！」

「よし、とにかく一発殴らせろ」

必殺、黒鉄くんドリームジャンボパンチ！

「それでだなO」

うおっ！？

すんなりかわされたッ！！

「Oは何のコスプレがしたいんだ？」

杵島先輩、なぜかメモとペンをスタンバイ。

あら熱心……じゃなくて!!

「っつか先輩、そもそもなんでコスプレ？」

化学体験なら、もうフツーにそれだけでいいじゃん。

なのに何でコスプレ？

「そんなの決まっている!!」

ビシッとキメポーズなクルパ。

「大事なのはだな、いわゆる“萌え”と言うヤツなのだッ!!」

第二回、化学部総会。

現在科学室。

その中央にある、デカイ机。

東側に俺と自衛隊コスプレしたジョンソン。

……自衛隊？

しかもご丁寧にコンバットヘルメット付き。

西側には女王アキコ三世と、ロリータ琴浦さん。

鞭は今だ女王の手の中に。

そして北側にはツンデレっ子クルパ。

ってかツンデレは性格であってコスプレじゃねえし。

「ではこれより、第二回化学部総会を始める。今回の議題はこれだッ！！」

杵島先輩は椅子から立ち上がり、教室前の黒板にチョークで書き書き。

そこには……

『今年の文化祭化学部出し物のスローガン“お前の嫁はみんなの嫁、

みんなの嫁はお前の嫁”』

と、書かれていた。

何故か緑チョークで。

黒板が緑だから見にくい……

じゃなくて!!

「ちょ、何だそのスローガンはッ!?!」

何その、1人はみんなのために、みんなは1人のために的なヤツは!?!

「よいかO、今年の化学部は“萌え”を中心に、可愛らしい感じの化学部にしようと思っているのだ」

「何故にッ!?!」

そしてそのスローガンの意味は!?!

「……それはだな、化学の堅苦しいイメージを払拭するためだ!」

「意外と真面目!?!」

つまりはこう言う事だ。

化学……って、何となく堅苦しいイメージがあるでしょ?

難しい実験とか、白衣着た髭ばーのオッサン科学者とか。

その堅苦しいイメージを無くし、みんなの興味を引く事が出来るような化学部を、今年の文化祭では再現するらしい。

で、その堅苦しいイメージを払拭させるには……

「堅苦しいとは真逆である、萌えなのだ!!」

で、つまりはコスプレ系化学体験コーナーと。

……逆にオタク感がプラスされて、イメージダウンになるんじゃないかねか？

「……でだ。Cがロリ妹系、A uが筋肉系自衛隊、L iがハードな女王様系に決定し、私も幼なじみツンデレ系に決定したのだが」

ここなぜか俺を睨み付ける杵島先輩。

睨むなし。

「……まだ、Oのコスプレが決まっていけないのだ」

みんなで俺を睨むなし。

「Oよ、お前は何のコスプレがしたいのだ？」

「はい、俺は黒鉄徹哉君のコスプレがいいです」

「そうか、黒鉄徹……いや、それではお前のコスプレの意味が無くなるだろ！」

「あーバレた」

くそー。

コスプレ嫌あゝ。

何か嫌あゝ。

「あたし的には……執事なんてどう？」

何故かニヤニヤのアキコ。

「執事かよ……」

ちよっと考える俺。

で、とりあえず実践。

「……お嬢様、エスプレッソのおかわりなどは如何ですか？ ノルウェー産のミルクをご用意しておりますが」

「……なんかテツキモい」

「じゃあ執事やらせるな」

アキコは相変わらずポテチをご賞味中。

俺の渾身の執事はキモいだだよ。

……はあ。

「私は……バンドのギタリストとか似合うと思うけど……」

お次は琴浦さん。

バンドのギタリスト？

「ぎゅっギュイイイんツ!!」

エアギター挑戦中。

気分は武道館。

「ギュイイつぎゅっギュイイイんツ!!」

「……………」

おやおや？

何故か琴浦さん、黙り込んだじゃったよ？

その発言に最後まで責任持て。

「イマドキエアギターカヨ……フルイナツ！」

ジョンソンは今全国のエアギタリストを敵に回しました。

バッシング可。

「クロガネハ……ナンカリストラスンゼンノサラリーマントカ、ニアイソウダヨナ」

リストラ寸前のサラリーマンだ？

「……………」

「ナンダヨ、ハヤクジッセンシロヨ！」

「だが断るッ！！」

栗鼠と虎ならまだしも、リストラは嫌。

「ナンダヨーヤレヨークウキヨメヨ」

「うるせーだまれーくたばれー！」

ジョンソンの相手してると片仮名解読しないといけないからメンドイ。

「とにかく、俺はコスプレなんてしませんからね」

「何故だ？ この化学部に萌えが必要だとは思わないのかO？」

「ってか、そもそも男に萌えを表現させるのは明らか違うだろ」

そしてジョンソンコスプレはあれ自衛隊だし。
もう萌え関係ないし。

現在下校中。

隣にはクルパ。

アキコは実家の柔道場へ、琴浦さんは家の方向逆、ジョンソンは秋葉原へ行くとかで、みんなとは学校で別れた。

「よいかO、男だって萌えは表現出来るぞ？」

「何を真顔で言ってるんですか先輩」

拳グツて握って、熱弁状態の先輩。

「いわゆる、青い手紙だ！」

「青い手紙？」

と、男の萌えとはどのような関係が？

「Oよ、私はそのような好みはないが、きっとこの世の中、青い手紙が好きな人もいるはずだ！」

「だから青い手紙で何！？」

赤紙の逆バージョン的な？

よく分からん……

「いや……しかし、OとAuとが青い手紙を……うおお……」

「……何妄想してんの？　なんでその妄想に自分で引いてんのあんな！？」

もう本当に意味が分からない……

空は夕暮れを迎えていた。

太陽は山に沈みかけ、モノの影は長く伸びる。

辺り一面に橙色が映えて、とても幻想的だ。

電線には鳥、道の脇の塀には野良猫、アスファルトの道には小さな虫。

車の行き交いが少ない、ちょっと小さな灰色の小道。

時折、思い出したかのようにそよ風が吹く。

俺は、そんな道を杵島先輩と歩いていた。

「よいか〇よ、青い手紙には本人達の同意が……」

相変わらず意味不明な事を言っているクルパ。

夏のそよ風が、その先輩の黒い髪を揺らす。

「だから青い手紙って何だよ！」

俺も相変わらずツツコミに専念。

しかし、杵島先輩に意識を向けつつも、このそよ風を体で感じる。

じめじめとした、夏の夕暮れ独特の暑さ。

今は7月。

夕方でも汗をかく。

そして、いつかは秋になり、冬にもなる。

……これが、俺の日常なんだ。

杵島先輩とくだらない会話をしながら、下校の道を歩く。

たまにアキコや琴浦さん、ジョンソンなんかも一緒に。

夕暮れの中、笑いながら帰宅する。

みんなと一緒に。

これが、俺の日常なんだ。

けど……

この日の夕暮れから、この日常は非日常へと変わったんだ。

「……よお、はがね」

道の向こう側。

そこに、こちらに手を振る1人の男性が立っていた。

赤いツンツンの髪に、黒っぽい赤のスーツ。

「……っ！」

ほんのさっきまで青い手紙が何ちゃらとか言っていた杵島先輩。

その杵島先輩の顔は、まさに青い手紙の如く真っ青になっていた。

そう、その男に気付いた途端にだ。

「……先輩？」

どうしたんだ？

……俺はこの時、まだ知らなかった。

……杵島先輩と、その男の関係を。

そして、「杵島」と言うその名字が意味する、杵島はがね先輩の背負っていたモノに。

元素21 うわ、今回から一気に真面目なパートに入ったよ!!

夕暮れが沈み、夕闇が辺りに充満する。

暑さもあるが、若干だが心地よい風も吹いてきた。

夏の夕方――

「久しぶりだな。探したぜ」

杵島先輩との下校中、突然現れた謎の赤い男。
髪もスーツも赤。

……奇抜や。

そして

「……………っ」

杵島先輩は無言を貫いていた。

その顔は……真っ青だ。

……ってか、

「あ、あの……どちら様ですか？」

初めて会った人にはまずお名前を聞く！
これ基本やー！！

「……そういう時は、まず自分から名乗るモンだろ？」

あ……真顔で返された。

うーん……全く知らない人に名前教えていいのかな？
なんか……個人情報流出しそうだね。

「え、えーつと……」

「……杵島ギン」

「えっ……？」

さっきまで黙りこんでいた杵島先輩が、その重い口をゆっくりと開いた。

「そいつの名前は杵島ギン。私の……実の兄だ」

そう言う杵島先輩の瞳は、ひどく怯えているような瞳だった。

……あのハイテンションバカの杵島先輩が怯えている？

そして……人の名前を元素記号で呼ばずに、素の名前で呼んでいる。

なんだ……この感じ？

ってか、それ以前に……

「えっ？ お兄さんッ!？」

この不良丸出しのこの人が、兄貴だ!？

似てねえ……

その時、お兄さんがゆつくりと口を開いた。

「さあはがね。家へ帰ろうか」

そう言いながら先輩に接近するお兄さん。

その瞳は……鋭い。

「……………」

そして相変わらず無言の杵島先輩。

俺、気まずい。

「……相変わらず、反抗的だな」

お兄さんは右手を出し、その先輩の頬に触れる。

そっと頬を撫で上げ、その手は髪へ。

先輩は顔こそ逸らさないけど、目はガチで逸らしているし。

「……こっちを向け」

お兄さんが呟いた。

「こっちを向け、はがね」

「……………」

先輩は相変わらず無言を貫く。

「こっちを向けッ！」

ちょ、お兄さん？

顔、なんか怖くなってますよ？

ナマハゲみたいになってますよ？

「……………」

先輩動かず。

もしかして兄妹喧嘩？

しかし、次の瞬間……

「はがねッ！！」

お兄さんは突然、腰のベルトのホルダーから、銀色に輝くある物を取り出した。

何あれ？

「デメエ、杵島の首領の命令だぞッ！ そのツラこっちに見せろッ！」

銀色の物——それは特殊警棒だった。

って、何っ！？

そして……

バシッ！！

「……………っ」

お兄さんは、その特殊警棒で妹の顔を殴った。

妹の顔を……

「……………」

「何だはがね、まだ反抗すんのか？　アア？」

先輩は動かない。

お兄さんはそんな先輩の髪を強引に掴み、引っ張り上げる。

「……………っ」

先輩の顔は、苦痛に歪んでいた。

「その醜い顔を兄貴に見せろ。このゲスがッ」

先輩の髪を掴んでいた手を離すお兄さん。

そして先輩は地面に腰から落ちた。

「とにかく、一旦お仕置きだな」

お兄さんは特殊警棒を構える。

「兄貴の言うことすら聞けないバカには、骨折くらいが丁度いいか？」

先輩は地面に倒れたまま動かない。

「……ハッ、じゃあお仕置きだな」

そう言うと、先輩の目の前へ接近するお兄さん。

……正直、俺には何が起きているのか分からない。

突然、下校中にお兄さん（自称）が現れ、杵島先輩を脅し……

兄妹喧嘩なのか？

反抗期？

に、してはやりすぎだろ……

特殊警棒で……

ちょ、ちょっと仲裁に入るべきかな？

それとも警察呼ぶ？

「……私は」

その時、杵島先輩がその重い口を開いた。

先輩の視線はお兄さんから外れているが。

そして、先輩は弱々しいながらも、はっきりと言った。

「私は……杵島家の……オモチャではない」

「……アア？」

先輩の一言に、お兄さんの動きが一瞬止まった。

「私は……杵島家のオモチャではない。私、杵島はがねは……石鉄
高校の化学部在籍で、酸化マグネシウムが好きな、普通の人間だ」

酸化マグネシウム？

じゃなくて。

先輩……

「……テメエは杵島家の下僕だよ」

お兄さんは先輩の前でしゃがみ、顔の高さを先輩に合わせる。

「テメエは杵島の女だ。普通の人間じゃねえんだよ」

その瞬間、先輩の顔が凍った。

「……とにかく仕置きだ。腕の骨を折る」

お兄さんはゆっくりと警棒を構えた。

「今まで勝手にいなくなってた分、きっちりと痛めつけてやる」

……動かない先輩。

不気味に笑うお兄さん。

その警棒は、もう降り下ろされる寸前。

俺は携帯を取り出した。

そして通話ボタンをプッシュ。

番号は110番。

もうこれは……喧嘩とかじゃないっ!!

暴力だ。

ただの暴力。

俺にはこの暴力の事情とかは分からないけど。
杵島の家庭の事情とか分からないけど。

これ以上、先輩を痛めつけさせたくないッ!!

その時……

「そこのガキ、何してんだ？」

お兄さんが俺の行為に気付き、振り返った。

そして、目があった。

「……ガキ、余計な事しようとしてねえか？」

「あ、あーいや……その……」

いかんッ!!

相手の迫力凄ッ!!

押し負けるッ!!

「……何だ？ テメエも仕置き必要か？」

「え、えええええッ!？」

そういう展開!？

うそおっ!!

「……ハハッ、いいぜいいぜ。先にテメエから仕置きしてやるぜ」

「う、うおっ!!」

こ、怖い!!

ジリジリこっちに寄って来る!!

あ、早く警察に連絡を……

「ハッ!!」

バシッ!!

「いっ!!」

その時、お兄さんは警棒を降り下ろした。

で、俺の右手直撃。

携帯落としたッ!!

「う、うううっ!」

俺、あまりの事に変な声が出た。

「っ待て、Oには手を出すなッ!!」

ここで先輩に動きが。

「アア? なんだはがね?」

お兄さんはもはやヤンキーだ。

「Oには……私の友達には手を出すなッ!」

杵島先輩はゆっくりと立ち上がる。

「友達だ? はがねにか? ……つぶ!!」

や、ヤンキーお兄さんが笑いを堪えておる。

「……ハハッ、テメエに友達か。化学オタクのゲスなテメエにか」

その時、お兄さんは先輩の前へ。

「……友達大事か?」

「……手出しをしたら、貴様だろうと許さない」

「……目がマジになったな」

「……黙れ」

……いつもニコニコな杵島先輩。

そのいつもの先輩からはちっとも何う事の出来ない、先輩のマジ顔。

何かとても……凛々しかった。

「せ、先輩……」

思わず呟いた俺。

その時、風が吹いた。

「……じゃあ俺はお前の友達に手出しをするぜ」

その瞬間……

フワッ

「えっ……」

いつの間にか、目の前には警棒を構えた――

お兄さんの姿が……

速いッ！

「……仕置きだ」

咄嗟の事で、すぐには回避行動に動けない。

「うっ……」

この一瞬に、俺が出来た事。

それは、目をつむる事だけだった……

「……ハッ！」

目をつむってから、約5秒。

……あれ？

痛み、全然感じない。

あれ？

俺はゆっくりと目を開いた。

「……何だはがね？ 兄貴の邪魔をするのか？」

「……貴様ッ！」

そこには、鬼の形相をした二人の人間……

そして、振り上げられた警棒は、先輩の手で握られ、宙で止まっていた。

……怖いッ!!

「……怖い怖い」

怖いお兄さんが怖い怖い言いながら怖い妹の顔を見ているの図。

「……はがね、お前ウチに戻って来い」

二人共動かないまま、お兄さんが喋り出した

「……断る」

先輩即行拒否。

「……速っ」

お兄さんの顔は……笑っている。

ちなみに俺、フリーズ中。

「……もしだ」

お兄さんの声にはトゲがある。
それも、何とも毒々しい……

「もし、お前がウチに帰ってくるのなら……

もう二度とお前の友達には手を出さない

って言ったら、どうする？」

その時、先輩の表情が一瞬動いた。

「……それは本当か？」

「……帰って来い。杵島の下僕」

その僅かなやり取り。

しかし、全ての話がついていた。

「……どうする？」

「……………」

そして、先輩は警棒から手を離れた。

「……Oよ、色々とすまなかつたな」

あれからすぐに、お兄さんは消えていった。

近くに車でも停めていたらしい。

そして……満面の笑みで、消えていった。

「……先輩、一体何なんですか？」

お兄さんがいなくなり、フリーズから解けた俺。

そして、先輩に積みよった。

「何なんですか先輩、これは一体何なんですかッ!？」

正直、分けわからない。

先輩が殴られて、反抗して……けど、多分俺のために何かを和睦して……

「先輩……」

「……すまんな〇」

先輩はただ、苦い顔で謝った。

「すまんって……ってかあの人、本当にお兄さんなんですか？
それに杵島の下僕って……」

「〇よ」

その時、先輩は俺の顔を見て……

「本当にすまない。私は……もう……」

この場所を……去る事になりそうだ」

……杵島の家に戻る。

俺は、先輩の家庭の事情なんか一切分からない。
だから、その言葉の意味を理解出来なかった。

「……先輩」

「Oよ、化学部の事……よろしく頼むぞ」

ちょっと待て……

俺は多分、先輩を止めたかったんだと思う。

けど……

「……じゃあな」

先輩はただ一人

この場所を……去って行った

……まだ、何も分からない。

杵島の家庭？

お兄さん？

さよなら？

本当に、クルパだ。

何も分からない。

けど、一つだけ分かる事があった。

それは……

先輩は俺のために、辛い道へと走って行った事だ……

元素21 うわ、今回から一気に真面目なパートに入ったよ!! (後書き)

こんにちは。

五円玉です!!

はい、今回からちよこつと真面目なシリーズ突入です。

ちよくちよく笑いも入れてはいきますが、基本シリアスムードぶんぶん……

あとですね……ぶっちゃけようか……

……薄々勘づいている方もいるとは思いますが。

バトルシーン導入の確率大です。

いや、この小説は基本コメディーなんで、日頃はバトルなんてご法度ですよ？

でも今回だけは……申し訳ない、多分入れます。

その辺のご理解をよろしくお願いします！

そしてこれからも、元素彼女をよろしくお願いしますね！

元素21サイドストーリー Au編

黒鉄徹哉が杵島ギンと遭遇していた頃。

東京、秋葉原

「つたく、カタコトキャラ設定は疲れるぜ」

彼は電気街を歩いていた。

金色の髪に、整った顔。

ブレザーの制服を着崩しつつ、大量の紙袋を引き下げ歩く彼。

中臣ジョンソンだ。

アメリカ人の父に、日本人の母を持つハーフ。

「中臣氏は確か、学校ではカタコトキャラを作っているのでしたっけ？」

ジョンソンの隣には、小太り気味の男。

天然パーマの頭に、チェック柄のTシャツ。

背中にはリュック。

彼もまた、アニメのキャラが描かれている紙袋を大量に持っていた。

「ああ、何しろ俺はキャラ薄いからな。何かインパクトある設定がないと、空気になっちまうから」

「おおお、流石は中臣氏!! 策略家ですなあ!!」

ジョンソンは自分をおだてる隣の男に対し、普通の日本語を使っていた。

キャラ作り……

「……そうだ黄池。この後、アニメイトにも寄ってくか？」

ジョンソンは隣にいる男——友人の黄池太郎に提案。

「そうですね、まだ時間あるし、寄っていきますか!!」

黄池はその太い腕に巻いてある腕時計を確認し、時間を確認。

「中臣氏、なんか狙っているモノでも？」

「決まってるだろ。今年の夏アニメのグッズ探しだよ」

「流石は中臣氏、アニメオタクですなあ!!」

「お前もだろ。それに俺、学校ではオタクって事隠してるからな。たまにはいいだろ」

こうして二人は、そのまま秋葉原の中心へと歩いて行った。

「いやあ、しかし今年の夏アニメは豊作ですなあ！！」

「だな」

現在夜の7時過ぎ。

秋葉原での買い物を終えた二人は、地元へと帰ってきていた。

ちなみに二人共、手には大量の紙袋。

「今年の夏はなんといっても“メイドなアニマル”のアニメ化！
楽しみですな中臣氏！」

「ああ、あのラノベ原作のあれか」

「やっぱり俺は鯨岡さん派だなあ」

「黄池はホントに黒髪ロング好きだな」

そんな話をしながら、二人は帰路に着く。

「では、ウチはこっちなので!!」

そして、とある交差点。

「ああそうか、黄池は紅葉町だっけか」

そう言うと、ジョンソンは軽く手をふった。

「じゃあ、ここで」

「では。中臣氏、また来月も行きましょう!」

「ああ」

ジョンソンは黄池と別れ、一人自宅の方へ。

「来月か……予定空いてたかな?」

そんな事を考えながら。

その時……

「はあああああっ!!」

ブオオオオオオン!!

「……っ!!」

ジョンソンの前に突然、拳が迫っていた。

「なっ……っ!？」

ジョンソンは咄嗟に反応。

体をひねり、その拳を回避。
体勢を立て直す。

「あ、危ねえ!」

ジョンソンの目の前。

そこには、見ず知らずの一人の女子が拳を構え、立っていた。

「ちっ、外したか」

その女子は……ジョンソンよりも背が小さい。

夏用のセーラーの制服、まだ若干幼さの残る顔。

「……子供?」

確かに子供。

「……アンタ、杵島はがねの関係者でしょ？」

彼女は拳を構えたまま、ジョンソンを凝視。

その長い黒髪ポニーテールが、少し揺れた。

「……センパイノ？」

ジョンソン、杵島はがねの名前を聞いた途端にキャラ変更。
カタコトになった。

「……そう。確か君は……中臣ジョンソンだっけ？」

「……………」

ジョンソンが無言になったのを見て、彼女は少し笑った。

「……当たり前」

次の瞬間……

フワッ

「……ナツ!？」

ジョンソンのすぐ目の前、そこには拳を構えた……

「悪いね、ちょっと拉致させてもらおうよ！」

「……速いッ！」

かなりの速さでジョンソンの懷に潜り込んだ女子。

そのあまりの速さに、ジョンソンは一瞬反応に遅れた。

「しまった……」

回避は不可能。

そう判断したジョンソンは、すぐさま受け身の体勢へ。

「はあああああッ！！」

次の瞬間ッ！！

ドオッ！！

「ぐはぁッ……」

かなりの勢いを持った右拳が、ジョンソンの腹部に直撃。
一瞬だが怯む。

「まだまだっ！！」

その一瞬の隙に女子は再度拳を放つ。

今度は左で。

「ガバッ……」

そして、それも直撃。

しかし……

「はあああぁつと!!」

続けざまの回し蹴りのコンボ。

その靴の爪先がジョンソンのみぞおちに入り、さらに追撃の右拳も直撃。

「……ッ」

流れるような、打撃のコンボ。

そのあまりの速さに全て直撃を食らったジョンソンは、地面に倒れ込んだ。

「げほっげほっ……」

口の中を切ったのか、ジョンソンは血を吐いた。

「おお！ 君、意外と体頑丈だね。喧嘩とかよくしてんの？」

一方の女子は、倒れたジョンソンを上から見下し、すまし顔。

「普通だったらとつくに気絶してんのに。まだ意識あるなんて凄い！」

「……うつ」

中臣ジョンソンは日本育ちのハーフ。

そのため小学生時代、ジョンソンはハーフということで周りからいじめを受けていた。

特に暴力。

クラスの男子から殴られたり、蹴りを食らったり。

そのたびに、ジョンソンはそのいじめをした子に仕返しをしていた。

殴られたら殴り返し。
蹴られたら蹴り返し。

それは中学でも変わらず。

そのためジョンソンは、多少喧嘩にはなれていた。

「……お前は」

体をぼろぼろにされたジョンソン、この口からは小さな声しか出ない。

「何？ 聞こえないよ？」

わざとらしく耳に手を当て、ジョンソンをおちよくる女子。

「……お前は何者だ」

「ああ、そう言えば言っていなかったわね」

すると女子は、オホンと咳払い。

「私は杵島螢。杵島はがねの妹で中学三年生。よろしくねっ！」

「なっ……せ、センパイの……？」

「そう。今は姉の友達を片っ端から潰している所なのです！！」

すると蛭は、倒れているジョンソンの目前に拳を構える。

「姉が何の未練もなく杵島家に戻れるよう、こっちも必死なのですよ」

「杵島……家……だと？」

ジョンソンの瞳は、もう力のない瞳をしていた。

「そっ！ だからさ、とりあえずは君たちを拉致して、姉の目の届かない所に置いておくの！」

そして蛭は、笑顔で拳を放った。

「そう、黒鉄徹哉以外の人間を……ね」

「……ッ」

元素21サイドストーリー L1編

「ふう……今日も疲れたなあ」

黒鉄徹哉が杵島ギンと、中臣ジョンソンが杵島蛍と出会っていた頃。

「あゝ……気持ちいい……」

施仗明子は銭湯に来ていた。

先程まで実家の道場で剣術に励んでいた明子。

施仗道場と明子の自宅とは約500メートルほど離れており、その間にこの銭湯があるのだ。

自宅に風呂はあるものの、基本広い風呂好きの明子は道場帰りによくこの銭湯を利用し、汗を流していた。

「あゝったかい」

明子は頭にタオルを乗せ、のぼせるまで湯船に浸かっているのだった。

「ふう……いいお湯だった」

銭湯からあがり、右手にコーヒー牛乳、左手に竹刀を持ち、すぐ目の前にある自宅へ向かう明子。

「うーん……やっぱりお風呂上がりにはコーヒー牛乳だわ」

ゴクツと豪快に一口飲み、ぷはぁと息を吐く。

空はもう薄暗く、星もちらほらと見える。

夏の夜だけあって、とても蒸し暑い。

「コーヒー牛乳がぬるくなる前に飲んじゃわないと！」

そうして、コーヒー牛乳の飲み口に唇を当てた、

その時……

「……施仗明子だな？」

「ん？」

近くの電信柱の影。

そこに、人影が見えた。

「……誰？」

夜のため、暗くて顔が確認出来ない。

明子はその場で立ち止まり、よく目を凝らして人影を確認。

その瞬間……

「影斬ッ」

「……えっ」

電信柱の影から、鈍く光るモノが見えたと思った途端！

その光は、明子目掛けて高速で放たれた。

「うわっ!!」

明子は右手のコーヒ―牛乳を途端に捨て、竹刀を両手で持ち、その光を受け止めた。

「……って、これは」

受け止めて分かった事。

その光は、銀色に輝く短剣の刃だった。

そして……

「……誰？」

電信柱に隠れ、短剣を振るった人物。

身長が190センチあろうかという、大型の男だった。

体つきは筋肉ありの細めな体型。

黒いTシャツに薄い黒のベスト。

下も黒いジーンズ。

黒い短髪、鋭い瞳。

正直、かなりのイケメンだ。

「……俺は杵島黒磨。杵島はがねの兄だ」

黒磨は低く冷たい声をしていた。

「杵島先輩の……お兄さんっ!？」

一方の明子はビックリしたかのような高い声。

実際、ビックリはしていたが。

「……施丈明子。貴様を捕縛させてもらう」

「……え？」

黒磨の言葉に呆けをとられていた明子。

しかし、黒磨は短剣を逆手に持って構える。

「牙刃ッ」

それは一瞬だった。

相手の呼吸のタイミングを計り、一瞬で相手に接近。
歩あいを半歩ずらし、相手の反撃に備えつつ、一気に短剣を振るう。

「……っ!!」

かなりの剣技。

明子は訳も分からずに、その刃を右肩に食らった。

「痛っ……」

肩からは出血。

明子はすぐさま後退。

しかし、黒磨は追撃。

「哭突ッ」

これまた相手の呼吸に合わせ、半歩ずらした上での強烈な突き。

「な、何なのよッ！」

明子は咄嗟に動き、竹刀を構え、突きの切っ先を右にずらした。

「あなた、杵島先輩のお兄さんなんですよ？ 何なんですか一体！？」

「牙刃ッ」

黒磨は明子の問いには答えず、次々と刃を振るう。

「ちょっと、待っ……」

かなりの速い斬撃。

明子は何とか刃を竹刀で受け止めていたが、徐々にその速さについていけなくなる。

「哭突ッ」

そして、何度目かとなる黒磨の突きを弾いた明子は、ここで初めて反撃に出た。

「もうっ！ と、とにかく……」

明子は腰を低くし、竹刀を水平に構え……

「施丈桜花流一ノ型“桜吹雪” ツ! !」

強烈な横斬撃。

しかし……

「……フン」

元々半歩ずらしていた黒磨には、明子の竹刀の先端が少しかすっただけだった。

「うそっ! ?」

「……甘いッ」

斬撃をかわした黒磨は一気に距離を詰め、明子に接近。

そして……

「首討ッ」

明子の首に、黒磨の短剣の刃が迫った。

「しまった……」

そして……

元素22 お前、モブキャラじゃなかったのか!?

あれから、どのくらい時が経っただろうか……

先輩がお兄さんに連れてかれてしまい、そして俺には何も出来なくて……

ただ、見てる事しか出来なくて……

先輩の、見たくもない顔を見てしまった。

「……………」

俺は1人、家の近所の公園のベンチに腰掛けていた。

空はもう真っ暗。

小さな星が輝いて見える。

「……はあ」

もうため息しかでねえよ。

何となくだけど家には帰りたくない。

漫画喫茶……って気分でもない。

ホームレス……も嫌だなあ。

とにかく、帰りたくないんだ。

公園のベンチに座って、ただ空を見上げるだけ。

そして、俺の頭ん中をよぎるのは、やっぱり先輩――

「……はあ」

正直わかんない。

杵島家の事情なんか、部外者の俺なんかにはわかるわけがない。

ってか、杵島家って何の家？

……ただ、先輩はとても嫌そうな感じだった。

何が嫌なのかはさっぱりだけど。

「……はあ」

どうしよう……

俺は今、何をすべきなんだろう……

「……はあ」

やっぱりため息しか出ない……

「♪♪♪♪!!」

「うおっ!!」

その時、突然携帯の着信音が鳴った。

雰囲気が一変だったために、俺マジびっくり!

「♪♪♪♪!!」

「……はい？」

俺は携帯を手に取り、相手を確認。

「……え？」

相手は意外な人物だった。

「中澤先生!？」

電話の相手は俺の担任の教師、中澤。

あ、中澤先生ならプロローグにちよこおっただけ出てるよ。

探してみよう。

「な、何の用だ？」

何か悪さしたっけ俺？

とりあえず、通話ボタンをプッシュ……

『もしもし、黒鉄かつ！？』

「せ、先生？」

電話に出た途端、向こうから聞こえてきたのは凄い焦り声。

『黒鉄、無事か？』

「……はい？」

何が？

『お前……杵島ギンに襲われたんだろ！？』

「えッ……！」

杵島ギン……

何で先生が……？

「せ、先生？」

『無事か、無事なのか！？』

「あ、ま、まあ……」

『そ、そうか……』

電話越しに聞こえた、安堵の息。
って、そんな事より

「……あの先生。今、杵島って」

『あ、そうだッ!!』

だあぁッ!!

あのオッサン、電話越しに突然叫びやがった!

み、耳があゝ!!

「ちょ……み、耳が……あ……」

『黒鉄よく聞け! 今、きっと他の化学部の連中も杵島家と接触しているハズだ!』

「……は、はあ?」

耳が痛くてよく聞き取れない……

『いいか黒鉄、お前が無事ならすぐに市民公園へ向かうんだ!』

「し、市民公園?」

何故に？

ってか耳いゝ！！

『詳しい事は後で話す！とにかく急いで市民公園へ向かうんだ！』

超が付く程焦っている、電話越しの中澤先生。

そして……

『早くしないと……琴浦が危ないッ！！』

「えっ……？」

「何なんだよおもうッ！！」

俺は、夜の町を全力疾走していた。

街灯の少ない、市民公園へと向かう小道。

「あのセンコウっ！」

ついさっき担任から掛かってきた電話。

琴浦が危ない——

……どうやら、俺が杵島ギンと出会っている時に、化学部のみんなも杵島家の連中と遭遇していたらしい。

そして——

『杵島家の連中は、お前ら化学部全員を捕縛するつもりなんだッ！』

……突然さ、

担任からこんな事を電話で言われても、普通信じないよね。

少なくとも、昨日までの俺だったらイタ電と判断し即切るよ。
なんかのバトル小説かっての！

けど……

あんな事のあった直後。

俺は先生の言葉を信じて、市民公園へと走った。

先生曰く、

『琴浦は今頃、市民公園で犬の散歩でもしているハズだ。多分、襲われるならこのタイミングだろう』

だと。

あんたはストーカーかっ!?

ってツツコミはぐっと押し込んで。

『施丈と中臣は武道に通じてるから大丈夫だろうが、琴浦は運動音痴だ。早く助けに行け!』

ならお前が行け国会公務員。

生徒に危険を背負わすな……ってツツコミもぐっと押し込んで。

しかし……

何で一般教師中澤が、杵島家襲撃の事を知ってるんだ?

「……とにかく!」

とにかく、今は市民公園へと急がなければ！

元素番外編 始まりはコンビニのおでんから（前書き）

こんにちは。

作者の五円玉です！

今回は以前自分のブログで書いた、元素彼女の番外編をお送りします！

まあ、時間軸的には第0話って所ですかね。

黒鉄くんがまだ中学生だった頃のお話です！

元素番外編 始まりはコンビニのおでんから

「ういゝ……寒い」

真冬のとある夜。

俺、黒鉄徹哉は分厚いコートを羽織り、近所のコンビニに来ていた。

理由？

いや、何となくコンビニのおでんが食べたくてね……。

「ぜってえ卵と大根は買う。ぜってえだ!!」

おでんのロマン。

それは卵と大根にあり!!

あの煮汁が染み込んだ、ホクホクの大根はまさしく神！
体も心もほっかほっかになる。

ほっかほっかに。

ほっかほっか……

ほっか……ほっか……

……弁当屋かッ!!

そう、日頃の俺なら絶対に言わない、寒すぎるノリツツコミが口走

ってしまうほど、大根は強いんだぜシスター!!

……大根1つでこんなになる自分が嫌だ。

とにかく、コンビニ到着!!

「いらっしゃーせー」

入店直後、ぐだぐだな営業ワードをぐだぐだに発する金髪バイト君。

超だらけ中の金髪バイト君を尻目に、俺はおでんコーナーの前へ。

「さーて、あったかおでんを……ん？」

おでんコーナーの前。

俺が長時間陣取るハズだったその場所に、先客が1人いた。

多分……女性。

後ろからだど判別がしにくい……。

けど、彼女が着ているのは、俺がこの春受験予定の高校の制服。
上はブレザー、下はスカート。

多分、女性。

まあ、この世の中、マニアックな方達もいますからね。

あ、ちなみに俺、今15歳。

中学3年生。

受験生。

落ちる禁句。

あ、自分で言っちゃったがな。

とにかく、まずはおでんをッ！！

女性はいしばらく退きそうにない。

「……卵、大根……」

……仕方がない、女性が退くまで店内ブラブラコースしますか。

あれから25分。

ど、どかねえなアイツ。

こっちはマガ○ン立ち読みして退くのを待ってる状態。

しかし、彼女は退かない。

微動だにしない。

金髪バイト君は……あれ？ シカト？

……シカトしてないでさっさと退かせよ。

もう25分もおでんの前に居座る女性。

……漫画、だいたい読んじやったなあ。

暇だな～……

……………。

……うん。

行くか。

黒鉄徹哉、一点突破の巻!!

どっかの昔の漫画のサブタイみたいな感じで、俺は半ば強引に女性の横、つまりおでんコーナーの前へ。

もうさっさと買って帰りたい。

俺は女性には目もくれずに、購入するおでんを選択。

あー、だし汁のいい匂い……ウへ、ウへへ。

……自分の語尾のキモさに引いた。

……とりあえず、大根、卵、竹輪、肉団子でいいかな。

うん、ベストメンバー。

で、俺が店員におでんを注文しようとした、その時!!

「あ、こんな所にいたかッ!!」

店の入口の方から、ハスキーな女性の声。

俺は自然と視線がそちに。

そこには、隣のおでん女（今、俺が脳内で命名）と同じ制服を来た女性が1人。

……まあ、結構な……美人さんやん。

ショートな黒髪、くりくりお目め。

……ナイス。

「……む？」

その時、おでん女もまた、視線を声の主である女性の方へ向けた。

「……あ、Na先輩じゃないですか！」

……おでん女が発した言葉。

以外と綺麗な声……じゃなくて。

Na先輩って言った？

「はがね、そんな所で油売ってないで、早く帰ろ!!」

え、Na先輩？　が、おでん女に向かって手招き。

おでん女、素直にそちらへ直行。

「はがね、アンタまた変な実験とか考えてたでしょ？」

「いや……竹輪の穴に電池を入れて、銅線で結んだら発火するのかな……と」

などと言う、凡人の俺にはさっぱり分からない会話をしながら、2人は去っていった。

「……………」

竹輪に電池？

……何それ？

まあ、いいか。

邪魔だったおでん女もいなかった訳だし。

俺はおでんのロマン購入を実行!!

いやっほい!!

「……もしかしたら、あのおでん女って……」

それから数ヵ月後。

俺は高校生になった。

で、現在私立石鉄高等学校の科学室。

目の前には、楽しそうにレモンに電流を流す杵島先輩の姿。

……ああ、多分、あれか。

今思い出した。
おでん女の事。

ああ、そう言う事か。

「なあOよ？」

「……はい？」

O……それが科学室での俺の呼び名。
意味は酸素って事。
意味不だよね。

「お前、レモンは好きか？」

「……食べませんよ」

杵島先輩は、こう言う人だ。

元素23 急展開と言う名の急展開

「……………っ!？」

中澤からの電話を受けた俺は闇夜の中を駆け出した。

じめじめとした夏の夜の空気。

鳴く蜩。

そして、輝く月。

俺は必死に走り、深夜の公園にたどり着いた。

そして……

ズシャッ!!!!

「……………っ!？」

目の前で、琴浦さんが斬られていた。

俺は目を見開く事しか出来ない。

汗が頬を伝い、走ったせいで息もきれぎれ。

早く鼓動を打つ心臓は酸素を求め、口は開かれたまま。

しかし、脳がそれに答えない。

目の前で、巨大な薙刀を構える男に、琴浦さんが斬られているのだから……

「……………こ、琴浦……………さん？」

俺はボソツと呟く。

小さな声で。

「……………おや？　そこに誰がいるのかい？」

その小さな呟きを聞いた男は、こちらへと振り返った。

小太りで中年くらいの男。

街灯に照らされたその顔には立派な髭。

シワの寄った勇ましい顔。

「……君は、もしかして黒鉄君かい？」

男は手に持つ薙刀を一振り。

そして、その薙刀に着いていた赤い血液が宙に飛んだ。

俺の脳は反応しない。

ただ、心臓の鼓動だけが速くなる。

「黒鉄君だよね？」

男は半笑いだった。

歪む口元。

細まる眼。

「……黒鉄君、君とは初めて会うね。まずは自己紹介しようか」

俺の脳が、ゆっくりと覚醒します。

「僕の名前は杵島結晶。杵島はがねの叔父だ」

「……………」

俺はグッと拳を握る。

「どうしたの？ 顔、怖いよ？」

「……………るせえ」

「……………ははっ、でもまさか、こんな所を見られてしまうとはね」

「……………黙れ」

「いやあ、怖いよ怖い！！」

「……………喋るな」

「まあまあ。一旦落ち着こうよ黒鉄君」

「……………」

そして男は、人差し指を鼻の頭に持ってきて、その視線を俺に向けた。

「ほおら黒鉄君、一回深呼吸してこらん」

「……………お前達の目的はなんだ」

「ほらほら、吸ってえ吐いてえ」

「……なんで先輩を拉致する」

「黒鉄君、今日はいいい匂いがするよね、空気」

「……なんで化学部のみんなを襲うんだ」

「いい匂いだ……そうだね、鉄の匂い」

「……………」

「そう、この琴浦咲奈の血の匂い!!」

「…………ツ!!」

その時、俺は駆け出していた。

相手は薙刀持ってる。

そんなヤツに素手で、しかも真っ直ぐに向かっていくなんて無謀。

けど、押さえ切れなかった。

先輩を拉致して、みんなを傷付けて。

恐怖もある。

正直怖いよ。

けど、あの時の先輩の顔を見て……

俺の中の何かが、おかしくなった。

「……ははっ、哀れ」

……カッコ悪い事に、俺は男の初撃でやられてしまった。

俺が向かって行った先で男……杵島結晶は薙刀を構える。

そして、その薙刀のリーチを生かし、向かって来る俺の右肩を斬り裂いた。

喧嘩なんてしたことすらない俺がかわせるハズもなく、肩から真っ赤な血液が飛び散った。

「くっ……」

強烈な痛み。

身体が斬れる痛みなんて初体験。

俺は思わず地面に倒れこむ。

奇しくもそこには、背中に傷をおった琴浦さんの姿が。

「こ、琴浦さん……」

意識を失っているっぽい琴浦さん。

その背中からは真っ赤な血が……

「くっ……とりあえず止血を……」

俺は地面に這いつくばりつつも、何か止血に役立ちそうなモノを探

す。

その時、俺の目の前に杵島結晶がしゃがみ込んだ。

「よお！」

「……っ」

俺は結晶から目を反らす。

「なんだいなんだい、つれないねえ」

一方の結晶はつまらなそうな表情。

その手には相変わらず薙刀。

「……まあ、本当は黒鉄君にはまだ手を出しちゃいけないんだけどね」

「……………」

結晶の呟きを俺は聞き逃さない。

倒れつつも両腕で琴浦さんの傷を押さえつつ、俺は結晶を睨んだ。

「……どういう事だ」

「ふふん、秘密」

「そもそも、杵島家の目的って何なんだよ！」

「それも秘密」

「くそっ……」

「残念だね」

ニヤニヤと笑う結晶は、再び薙刀を構える。

「……でも、一つだけ教えてあげようか？」

結晶はその場で立ち上がり、薙刀の矛先を俺の眉間に構えた。

俺、思わずビクッ！

「杵島家っていうのは、元々裏社会に生きてきた極道一家なのさ」

「裏社会……極道……っ」

俺はその単語一つ一つに反応してしまう。

裏社会とか、漫画の中でしか聞かない単語。

俺の動揺お構い無しに、結晶は続けた。

「裏社会にもこの世の中と同じで行政ってのがあるんだよね。杵島家は代々その裏社会の行政を握る、言わば政府のようなモノなのさ」

「……マジか……よ」

「まあ突然だから信じられないかもしれないけどね。杵島家現当主はギンなんだけど、次期当主は自然とギンの子供か兄弟となる」

嫌な予感がした。

「生憎ギンはまだ独身で子供がない。と、なると万が一の時の現次期当主はギンの兄弟となる訳で」

背中に走る悪寒。

まさか……

「ギンの一つ下の兄弟、妹こそが……はがねなんだよ」

「……それでか」

なんつー理由だよ。

「昔からはがねは裏社会を嫌っていてね、現代社会で生きるんだと普通の学校に通っているんだ。それが石鉄高校」

「……先輩っ」

「実ははがねの他にもあと二人兄弟がいてね。

ギンの弟ではがねの兄に当たる人物もいるんだけど、その子は養子だし、はがねの下の子はまだ中学生だし」

「それで……先輩に……」

何だよそれ。

家の事情で嫌な裏社会の当主になる？

本人の意思は無視してか。

「本当にはがねには手をやいたよ。裏社会の家に産まれて、裏社会を嫌うなんて、本当の本当に馬鹿馬鹿しいよね！」

……ふざけんなよ

「だからさ、僕達も考えたのさ。はがねを裏社会に引きずり込むための作戦を」

……ふざけるな、ふざけんなよ！

「そして一つの考えが浮かんだ。昔からはがねは仲間意識の強い子だった。それを生かして、はがねの大切な後輩である君、黒鉄君を……」

「ふざけてんじゃねえええよおおおっ！！！！」

俺は思わず叫んでいた。

「……僕ね、友情とか仲間とか、そういう仲良しごっこ、嫌いなんだ」

その時の結晶の目は、真剣だった。

そして……

ヒュッ

「……っ!!」

高速で薙刀が振るわれた。

元素24　とうとう解説役にまで成り下がった主人公のお話

鈍く光る刃が、地面に倒れている俺達目掛け、振り下ろされた。

薙刀の重さは結構なモノらしい（黒鉄徹哉脳内リサーチ調べ）

それを軽々しく振り下ろす杵島結晶は化物だ。

人気の無い夜の公園。

まるでスローモーションのように感じる、この時。

街灯の灯りが刃を照らし、結晶の顔に濃い影を作り出す。

その口元は歪んでいる。

底知れぬ恐怖。

死に対する畏怖。

今更になって沸き出てきた感情。

刃は俺の目の前にまで迫ってきている。

俺はただ、倒れている琴浦さんの身体に覆い被さり、盾となる事しか出来なかった……。

「施仗桜花流三ノ型“夜桜” ツ!!」

シュッ!!

「っ!?!」

その時、結晶の背後で何かが動いた。

俺達に振り下ろされた刃は宙で止まり、とっさに反転した。

直後

ガキッ!!

結晶は咄嗟に振り返り、薙刀を縦に構え、その刃を防いだ。

「うわっ、危なっ!」

結晶は汗を一粒流し、息を吐く。

……そして、結晶の背後から奇襲を仕掛けた人物が、口を開いた。

「中々の反射神経ね」

彼女は刀を引き、再び構えの姿勢に。

「……お、お前っ」

俺は思わず口をパクパク。

そこにいたのは……

「テツ、大丈夫……ってうわっ、凄い血が出てんじゃない?」

目を見開き、俺の赤い右肩を見たアキコの声は裏返っていた。

そんなアキコはTシャツにショートパンツ姿。

まさにラフ。

……しかし、その桜色のTシャツの右肩部分は真っ赤に染まっており、しかもアキコの首もとには真っ白な包帯が巻かれていた。

左頬には切り傷、右膝には擦り傷。

「お前……」

俺は先ほどの中澤からの電話を思い出す。

『他の化学部の連中も杵島家と接触しているハズ……』

まさか……

「テツ、肩大丈夫！？ 琴浦さんは！？」

結晶の薙刀を刀で払いのけ、こちらへ駆け寄ってくるアキコ。

その時、アキコの後ろで何かが鈍く光った。

「……っ、アキコ後ろだッ！！」

俺は咄嗟に叫ぶ。

「……え」

その時、一瞬で体勢を立て直した結晶が、片手で薙刀を振るう。

「油断したね」

結晶の顔は笑っていた。

「危ないっ!!」

「分かってるわよ!」

俺の目の前。

アキコはすぐさま刀を地面と垂直に構え、姿勢を低くする。

そして……

「施丈桜花流八ノ型“葉桜” ツ!!」

相手の横斬撃を縦の刃で受け止め弾き、さらに姿勢を低くし攻撃を防ぐ。

その瞬間右足をバネにし、一気に跳躍。

相手の頭上に飛び込み、怯んだ相手の顔から胸にかけて強烈な縦斬りを放つ。

相手の攻撃を受け止め、一瞬にして攻めに転じるカウンター技、施
杖桜花流八ノ型“葉桜”。

これは薙刀や槍など、リーチの長い武器を使う相手などに有効だ。

「なにっ!?!」

薙刀の横斬撃を刀で弾いた直後、アキコは迷う事無く結晶の目前へ
と跳躍した。

それにより、結晶は一瞬反応に遅れる。

その一瞬こそが、葉桜のカウンターの時。

「……はあああああああっ!」

アキコは、刀を振り下ろした。

今更だけど、アキコが持っているのは真剣だ。

本物の日本刀。

きらりゝん。

「カウンターかい、いやあ危ない危ない」

結晶の頬には大きな切り傷。

しかし、傷自体は浅く、出血も微量。

「……やっぱりアンタ、反射神経だけはめっちゃくちゃ凄いわね」

アキコの頬には一粒の汗。

俺は今、常人では理解不能（ぶっちゃけ俺も理解不能）な、高速の剣技を目の当たりにした。

アキコが結晶の薙刀を防ぎ、一気に頭上へと飛び込んだ所までは、俺でも確認できた。

しかし、薙刀を振るったままの状態だった結晶は、咄嗟に薙刀を引き、自らの腹に柄をぶつけた。

その衝撃で結晶は後ろへぶっ飛び、アキコの攻撃をかわしたのだ。

アキコの刀は結晶の頬を数センチしか捉える事が出来ず、結果浅い傷しか作れなかった。

「施仗桜花か……君は施仗明子さんって訳ね」

結晶は薙刀を両腕で低く構える。

その顔は相変わらずニヤニヤ。

「そう言うアンタもどうせ杵島家の人でしょ!？」

アキコは刀を構え直し、左足を少し引き、右肩の位置を少し前に。

あれは確か……以前某物理部に襲われた時に使ってた構え……

施仗桜花流一ノ型、桜吹雪!!

「アンタがテツと琴浦さんをやったの？」

アキコは刀を構えたまま、結晶に問う。

「ああ。まあ元々、黒鉄君には手を出さないハズだったんだけどね」

結晶も薙刀を構えながら、その問いに答える。

「そう……」

アキコの様子は暗い。

そして、しばらくの沈黙の後、アキコは重そうな口を開いた。

「やっぱり……杵島家の人は……テツだけを殺すつもりなのね」

「……は？」

今この場はシリアスな空中パンパンだ。

あんまし茶化したくない。

しかし一言だけ、一言だけ言わしてくれ。

「何言ってるんのお前っ!？」

元素24　とうとう解説役にまで成り下がった主人公のお話（後書き）

おまけ、随時更新

施丈桜花流剣技一覧

一ノ型“桜吹雪”

強烈な横斬撃。

施丈桜花の基本技。

シンプル故に力が全てを語る。

二ノ型“鏡桜”

三ノ型“夜桜”

切り抜けざまの斬撃。

一子乱れぬ動きで相手に回避の隙を与えない。
スピード命。

四ノ型“乱れ桜”

五ノ型“桜草”

六ノ型“彼岸桜”

七ノ型“垂れ桜”

八ノ型“葉桜”

カウンター攻撃。

リーチの長い相手に有効。

相手の頭上に飛ぶので基本脚力に依存する技。

あと相手はかなり接近するため、勇気依存技でもある。

九ノ型“桜華”

十ノ型“百桜繚乱”

桜の名前とか桜云々の名前とか、調べるの大変でした。

元素コラボ 可笑しな奴がいる変な高校（前書き）

こんばんは、五円玉です。

今回はミスターさんの「我ら科学部！」とのコラボ回になっております。

とりあえずは「我ら科学部！」未読の方にも分かるよう、配慮して書いたつもりです。

が、地味に「我ら科学部！」の小ネタもはさんでいるので、よかつたらミスターさんの「我ら科学部！」も読んでみて下さい。

元素コラボ 可笑しな奴がいる変な高校

「ねえテツ、可笑しな奴がいる変な高校へ行こう！」

「うわ、なんか行きたくねえよソレ！」

皆さんこんにちは。

黒鉄徹哉です。

「……………」

現在とある高校の校門前にいます。

石鉄ではありません。

片菜高校っていう高校の校門前に来ています。

「……………」

そしてこの片菜高校の校門にはでっかい手作りアーチ。

アーチには

『片菜高校文化祭』
の文字が。

ちなみに辺りには沢山の人、人、人。

老若男女多数の人。

で、俺の隣には……

「うわぁ……男子校の文化祭って初めて!!」

はしゃぐお菓子なアキコさんの姿。

お目めはキラキラ、ミニツインテールはフリフリ。

今日のアキコさんは薄地の半袖ピンク色パーカーに、クロップドパ
ンツ。

なんとまあな夏スタイル。

俺なんかTシャツにジーンズっていうラフスタイル。

……そろそろお気づきの方もいるでしょう。

今日はアキコと二人で片葉高校の文化祭に来ています（まんまだね）。

目的は1つ。

この男子校でもある片葉高校には、俺やアキコと同じ中学だった奴が通っている訳で。

そいつとはそこそこの仲で。

今日はそのいつに会いに来た訳で。

「元氣かなあユウ。いじめとか受けてないかなあ」

「アイツに限っていじめとかはねえだろ」

大谷 雄治。

俺やアキコと同じ中学に通い、まあ家も近所。

しかし、違う高校に通い出してからほとんど会っていない。

「雄治は……恐ろしい奴だったからな……」

アイツは数々の武勇伝を中学時代に残していた。

まず初めに言おう。

雄治はバカだ。

年がら年中体育は半袖の体育着を使用する。

冬でもnोजャージ。

バカだから風邪は引かない。

そして奴は後輩からタメ口で話される。

決していじめとかではなく、精神年齢が子供だから、ただ単に親しみの意味でのタメ口。

あと変態だ。

どっかのエロ魔神並みに変態だ。

突然メールでエロゲーの画像を送ってきたり。

お分かり頂けたであろうか？

大谷 雄治はバカなのだ。

「ユウは本当に中学じゃ浮いてたから……多分高校でも浮いてんのかな？」

「知らん。とにかく受付に行こうぜアキコ」

「めいこキーク！！」

ドカツ！！

「ぐはっ……」

「確か雄治は1年2組だから……」

俺とアキコは校門付近の受付でパンフレットと校内用のスリッパを受け取り、いざ片菜高校の校舎内へ！

片菜高校は男子校だ。

なので、制服を着て各クラスで店番をしているのは野郎ばかり。

共学しか体験した事のない俺にとっては凄く新鮮に感じる。

「ねえテツ！」

「何？」

昇降口から校舎内に入り、大量の人達をかき分けながら進む俺達。

「ここ何階？」

「1階」

ちなみに1年の教室は4階。

……よくよく考えると遠いな。

校舎内は本当に人だらけ。

教室からは店番の客呼び込みの声が響き、
廊下からは文化祭に来た客達の雑談が聞こえ。

「……すげえ賑やかだな」

つくづく思う。

4階の1年教室に向かう途中、階段。

「よし、この階段で一気に4階まで上がるか」

「そうね」

俺とアキコは手近な階段を見つけ、上へと昇る。

「しかし、人が多いよな」

「だねえ。なんかお祭りに来てるみたい」

「アキコ、文化祭はお祭りだぞ」

「だからめいこッ！」

みたいなやり取りをしつつ、校舎の3階にまで来た、その時……

「あ、ねえそこの彼女、暇なら化学部来ない？」

「……ん？」

階段の上からやってきた、制服男子がアキコに声を掛けた。

制服という事は、片菜高校生か見学に来たどこぞの中学生か。
いやでも身長的に高校生だな。

「……誰？」

当然ながら、アキコは聞き返す。

「あ、僕かい？　僕の名前は菅原芳春。片菜高校化学部員さ」
化学部員。

その言葉に俺は過敏に反応。

最近化学って言葉がトラウマと化している！

「すがわら……よしはる？」

「そう芳春。よかったらキミ、化学部においでよ。美味しいカルメン焼きがあるよ（ウインク）」

なんだコイツ？

「え、カルメン焼き！？」

アキコ釣られる。

安いぞアキコ。

……多分この菅原って奴は化学部の呼び込みさんか何かだな。

「ねえテツ、化学部にでも行ってみない!？」

「お前、目がカルメンになってる」

「ってか化学部……なんかフラグが……」

その時、

「チツ、なんだよ彼氏持ちかよ……」

すごく小さな声で聞こえた、なんか本編プール話辺りにもあったような誤解的眩き。

……菅原君の声で。

「……………」

またか……この勘違い。

「谷津う、お客二人連れてきたぞ」

化学室。

それは奇しくも1年2組とは真逆の方向だった。

「♪カルメンっカルメンっかつるっめーっん!♪」

もはやアキコの頭の中には大谷雄治の名前は無かった。

カルメン焼きに負けた雄治、哀れなり。

「えー、じゃあ今からの一切の説明はこの岡品谷津っていう奴がしてくれるから。じゃ」

「あ、ちょ、シュガ……じゃなかった、芳春ッ!!」

何だか目の前ではコントもどきの展開。

先程まで案内をしていた菅原はいそいそと退室していく。

「……なんだこの部活?」

悲しい事に、ウチの化学部といい勝負だ。

片菜高校化学室。

今ここには、沢山のお客さんがいた。

化学室の机上には何らやビーカーに入った液体や、化学道具がいっぱい。

机1つに化学部員が1人付き、お客さんに机上のモノの説明をしている。

なんとも文化祭。

そして俺達はカルメン焼きが置いてある北側の机の前にいた。

「全く……芳春のヤツめ……俺の担当はダイラタンシーだっていうのに……」

俺達の机についている化学部員は、天パだった。

なんか……特徴のない普通の人だ。

「まあ仕方ない、説明するか」

仕方ない？

客の前でなんつー発言

「えーようこそ化学部へ。俺は化学部員の岡品谷津っていいですよ。よろしく」

「可笑しな奴？」

アキコ……

「えーっと、じゃあとりあえずカルメン焼き、食べる？」

「食べる!!」

だからアキコ……

「はい」

「サンキュー！」

化学部員の岡品って奴（谷津）からカルメン焼きをもらい、早速頬張るお菓子な（岡品……可笑しな？）アキコさん。

なんかもうややこしい。

「あ、あのさ」

リスさんよろしくの頬張りを見せているアキコさんをよそに、俺は岡品に質問。

「1年2組の教室に行きたいんだけどさ、どうやったら行けんの？」

「1年2組ですか？ この廊下を真っ直ぐ行って、階段を1階上がるだけです」

「マジか、サンキューな」

な、なんと単純な校舎……

「今日は1年2組にご用事なんですか？」

「ああ、2組の大谷って奴の知り合いでな。ちょっと冷やかに来たんだけど……」

俺はそこまで言って、視線を斜め下に。

「うわあつ、何この白い液体？ 牛乳？」

……アキコよ、お前絶対今回の目的忘れているな。

「ああ、それはダイラタンシーって言って、衝撃を与えると固まる液体だよ」

岡品はダイラタンシーの説明。

「試しに液体に向かってグーで殴ってごらん」

「え、本当に？ アタシけっこう力あるよ？」

そうだね、こんな小柄な体型のどこにそんなバカ力なんかが……

「……ちょっとテツ、今何かアタシの事バカにした？」

「いや、別に」

恐ろしき女の勘。

「……じゃ、早速」

そう言ってアキコは拳を握り、高らかと掲げ……

「……っセイッ！！」

バチッ！！

水槽を割りやがった。

ってか、

「う、うぎあああああ！！」

水槽割れた、すなわち白い液体飛び散った。

つまり、近くにいた俺、アキコ、岡品が液体まみれに。

「あ、片栗粉の量ミスってたかも……」

その時背後から聞こえた、不気味な声。

「あ、仁！ これ作ったのお前かつ！」

白い液体まみれの岡品が、背後にいる男子生徒に向かって怒鳴る。

「悪い、多分それ作ってる時に尿検査の事考えて……多分知らぬまに分量ミスったかも」

「仁っ!!」

岡品は仁って奴に向かって殴りにかかった。

……何故尿検査？

って、それより……

「……服が」

ってかアキコ共々全身白い液体まみれ。

「お前本気で殴るなよ……」

「だって……殴っても固まるって言うから……」

「……はあ」

全く……。

その時、背後からなにやら小さな声が。

「なあ陽一、なんかあの娘、すげえエロくね？」

「そうだな芳春……白い液体まみれの女の子……エロス」

……片方は確か菅原芳春ってヤツだな。

もう片方は知らん。

とにかくだ。

「アキコ、とりあえず水道か何か行って少し洗わないと……」

「めいこだよジャーマンスープレックスっ！」

バキッ

「がはっ……」

「ウチの部長が本当に申し訳ありませんでしたっ！」

「え、俺かよ。最終確認を怠った谷津のせいだろ！」

その後。

俺達は化学部部長の野御丸 仁って人と岡品から謝罪を受けた。

「いやいや、元はと言えばウチのアキコさんが本気で殴ったのが原因……」

「めいこだよコブラツイストっ！」

バキバキっ

「かつ、関節がッ……」

体が悲鳴をっ……

「……そうだな、今回は本気で殴ったお客の方が悪いんだよな」

「仁っ!!」

相変わらずの野御丸と岡品。
コントかつ。

「……あ、そういやMー1!!」

何故か俺の心の文に触れた発言、岡品。

コイツはSパーか？

「悪い、俺今日Mー1出るんだ。仁、あとは任せた！」

と一言残し、岡品はベン・ジョンソンの如くダッシュで駆けて行った。

「サイキンオレ、デバンナイナ」

誰だてめえ。

「しかし……やっぱりこの化学部行っても化学部ってのはあなの
のか……」

頭の中ではクルパがゲラゲラ笑ってらあ。

結局あのあと、俺達は帰宅する事にした。

服がヤバいし、アキコさんが

「あ、もうすぐ3時！ おやつだ！」

とか言い出し、このままでは食べ物奢るフラグが成立してしまうと
判断したからだ。

実際、外の模擬店のたこ焼きや焼きそばに物凄く反応してたし。

「しかし……結局雄治には会えず仕舞いか」

悲しいな。

多分雄治が。

俺は悲しくねえ。

そして一方のアキコは

「たこ焼き食べたかったなあ……」

……帰路について正解だった。

元素コラボ 可笑しな奴がいる変な高校（後書き）

作中の大谷雄治は「我ら科学部！」のキャラではない、完璧こっちのオリキャラです。

菅原芳春は今後「我ら科学部！」の続編に登場するキャラなのですが、一足先にコラボで使わせて頂きました。

ミスターさん、色々ありがとうございました！

げんそなかのじょ！（前書き）

こんばんは。

今回は作者自身のブログ「五円玉のぐーたら日記」にて連載中の元素彼女スピンオフ小説【げんそなかのじょ！】のお試し版をお送り致します！

毎回毎回、超ほのぼの系のショートギャグ方式です。

これ見て少しでも面白いって思った方がいたら、ぜひブログの方にも来て、連載の方も見て頂けたらと思います。

ちなみにブログのURLは作者ページの方に貼ってあります！

げんそなかのじょ！

五円玉ブログ 「五円玉のぐーたら日記」 にて連載中！

げんそなかのじょ！

ブログでは第3話 「合宿」

【事の発端】

「合宿をすれば、きっとみんな化学人間になるぞきつときつとキツトカット！」

「……………あ？」

とある金曜日の部活中、突然クルパが発狂した。

ってか意味不明発言をした。

本当に意味不明。

いや、逆に理解したくない。

「え、キツトカット!？」

アキコはどこに反応してんだよ。

「とにかく明日からは土日だ！　つまり合宿だ！　みんなパジャマ持って夕方6時に科学室集合だ！！」

「おい、ちょっと待て」

「布団や食事も各自持参！　共に楽しい合宿をしようではないか！」

「だから先輩ちょっと待って」

「おやつは300円までだ。約束だぞ？」

「こら先輩シカトすんな、そもそも何の合宿」

「ちなみにバナナはおやつだ！　飲み物はお茶か水だぞ？　ポカリは駄目だぞ？」

「話を聞けえ！！！」

【合宿の意味】

結局、絶対王政しかりの化学部メンバーは自宅に荷物を取りに帰宅。

そしてまた集合。

そしたら既に先輩は熊さん着ぐるみパジャマ着用で科学室にスタンバっていた。

「先輩……そもそもこの合宿の意味って、何ですか？」

「合宿の意味？ そんなモノないに決まっているであろう！」

「Σ（□）！」

「まあ、強いて設けるならば、化学人間の増強が目的となるな」

「化学人間て!？」

【よくよく考えると】

「くそっ、まだ来て5分だがもう帰りたい……」

「黒鉄君、今日の合宿って何をやるのかな？」

「……ん？ あ、琴浦さんか……悪い、俺は何も……」

ん、琴浦さん？

「今日はみんなで科学室にお泊まりなんだよね！ 私、楽しみ！」

みんなで、科学室に、お泊まり？

みんなで……科学室に……

「私、初めてなんだ。学校でみんなとお泊まりなんて」

琴浦さんと同じ部屋（科学室）で、お泊まり……

「もしかしたら私、ちょっとはしゃいじょうかもだから、よろしくね！」

琴浦さんと……同じ……

「Yes合宿ッ!!」

「うわっ……と、突然どうしたの……黒鉄君？」

【ご飯】

「今日の夕飯は科学室でカレーを作ろう！」

クルパ曰く、ガスバーナーとアルコールランプで火力は十分だと。

俺的に不十分かと。

「♪ニンジンさんをトントントンっ、じゃがいもさんをさっさっさっ♪」

アキコは何らや自作の歌を歌いつつ、野菜の下ごしらえをしている。

「♪玉ねぎさんは目が痛い〜！ 黄色くなるまで炒めたらあ、そしてたらみんなでルーさんの海で泳ぎましょ♪」

「何か可愛い歌、歌ってんなお前」

「ん？ ひっ！ て、テツっ!？」

アキコ跳ねた。

「可愛いじゃねえか。玉ねぎさんは目が痛いのか、そうかそうか」

「……ッ!!」

ドスッ

「がはっ……」

まさかのグーパンみぞおち一丁頂きました。

「う、うるさいっ！」

【やっぱり】

カレー完成後のみんなの一言。

「何か……凄い水っぽい……」

「ルーが辛くないです……スープ系？」

「あれ？　ちゃんと野菜炒めたのに、凄いみずみずしい……」

「マズイヨコノカレー!!」

あれ、金髪いたんだ。

「うむ……美味くないな」

火力十分と言ったお前が言うな。

【お風呂】

お風呂は校舎内にある合宿生徒用の風呂を使用する。

「……あの、せ、先輩？」

「なんだ？」

「なんで……アンタ、バナナボート持ってるの？」

「それは楽しいから！」

「……………」

【男風呂】

「ふぁっ……生き返る……死んではないけど」

シャワーを浴びて、湯船にちゃぽん。

身体の芯からポッカポカ。

「もう……極楽じゃ……」

「ナアクロガネ」

おっと、ちなみに今風呂には未だ名前すら出てきてない金髪の子もいます。

「オマエ、オトコチツセーナ（笑）」

「影薄いキャラを脱したいからって、突然下ネタに走るな金髪」

「シカシチイサイ。イヤハヤ、チイサイ」

「うっせーな、出番なくすぞ」

「アハハハハ、チイサイナー」

カチッ

「小さい小さいうるさいんだよ金髪ッ！」

ザバッ！

俺は思いっきり湯船から立ち上がり、金髪のオトコを一見……はっ
！！

「お前……っ！？」

「ア？ ナンダヨ？」

「いや、まさか……そちらまでもが金髪だったとは……」

「……ミンナヨ」

「……あ、すまん」

「………」

「………」

「………」

「………」

【女風呂】

「きゃっほーいー!!」

「ちょ、施仗さん……お風呂で泳いだら……」

「いいじゃん琴浦さん！ 先輩はバナナボートの空気入れでまだお風呂に来てないし、今お風呂にいるのアタシ達二人だけなんだし！」

「それはそうだけど……」

「誰にも迷惑掛けてないしいいじゃん！ よし、次は背泳ぎっ！」

「……………」

私が迷惑なんだけど……

【金髪的には】

「センパイハA、オカシオンナがB、モジモジさんがD！」

「おい金髪、何言ってるんだ？」

【就寝】

科学室は薬品臭い。

そんな中、科学室の実験机を避ける形で布団を敷く。

男は北側、女は南側。

「では、電気を消すぞ」

先輩が壁にある照明のスイッチをオフ。

科学室内真っ暗。

「……にしても、薬品臭せえ」

【寝言】

黒鉄徹哉は薬品の匂いが気になり眠れない。

「……眠れねえな」

思わず独り言。

そしたら

「…………うあんっ」

！？

こ、琴浦さんの声？

「ああん、はうつ…………」

もしかして…………寝言？

「はあはあ…………んっ…………あはっ…………いやあっ…………」

「……………」

より一層眠れねえ。

【おはよう】

「…………マジか」

結局俺は一睡もせずに朝を迎えた。

おはよう太陽。

「……テツ？」

「ん？ アキコもう起きたの？」

今朝6時。

向こうの方からアキコさん襲来。
寝癖すげえ。

「うん……いつも剣道の朝練あるから、クセで……」

「ああ……」

寝起きのアキコはなんか小動物みたい。

なんか……破壊力がある……。

「……テツ？」

目が半分しか開いていないアキコ。

若葉色のダボダボパジャマが破壊力を倍増させている気が……

「……いや、なんでもない」

直視出来ない。

「……ん？」

【結局】

「結局はこの合宿、何がしたかったんだ？」

「ただ単に遊びだ！」

「普通それを合宿とは言わないよ先輩……」

元素25 施仗桜花VS杵島薙刀拔刀術（前書き）

こんにちは。

しばらく今話からストーリーの関係上、かなりスピード展開が続きます。

その所、宜しくお願いします。

元素25 施仗桜花VS杵島薙刀拔刀術

「施仗桜花流一ノ型、桜吹雪ッ！！」

「……杵島薙刀拔刀術、初撃っ！」

ガキィイインッ！！

刃と刃がぶつかり合い、暗い夜空に火花が光る。

「ほらほら、遅いぞ？」

結晶はアキコを煽るように挑発。

「うるさいっ！ 施仗桜花流三ノ型、夜桜ッ！！」

アキコ、安い挑発に乗る。

刀を水平に構え、一気に駆け出すアキコ。

「……だからさあ、遅いぞ？」

結晶は向かってくるアキコ目掛け、薙刀を垂直に構え……

「杵島薙刀拔刀術、追撃の構え」

薙刀の柄を地面に付け、それを軸にして半回転。

「あっ……」

「はい残念」

アキコの刀は宙を斬った。

そして結晶は薙刀の柄を蹴り上げ、切っ先をアキコへと向ける。

「杵島薙刀拔刀術、突き」

薙刀の切っ先が高速で放たれた。

「くっ……葉桜っ！」

アキコはとっさにカウンターの構え。

刀を引きつつ構え、足に力を入れる。

しかし……

「ふふん、同じ手は2度も喰らわないよ」

結晶は不敵な笑みを浮かべた。

突きの薙刀を咄嗟に引き、切っ先を下方へ。

「回し斬り！」

「しまった……」

結晶は自らの両足に力を込め、勢いよく回転。

アキコは咄嗟にジャンプして刃を回避。

「はい跳んだね」

そして結晶は笑った。

「空中では身動きがとれないよ」

「……そうね」

結晶は切っ先をそのまま一気に持ち上げる。
刃はアキコの右肩を捉えている。

空中へと跳んだアキコには回避が出来ない。

しかし……

「遅いわよ!」

「……………っ!?!」

アキコには余裕が見えた。
そして……

「金月拳ッ!」

「A d e v i l i s h
b u l l e t ! !」

「焰斬りっ！」

「何っ……！？」

結晶の背後。

そこに突然、三人の男が現れた。

そして……

ガキイイインッ！！

「……なるほど、中臣ジョンソンに政長実時、吉崎龍牙か」

結晶は片膝を着いていた。

「アマイナオッサン」

拳を高らかにあげ、構えるのはジョンソン。

「ダルい眠い帰りたい……」

な、なんか黒光りしている無機質を持っているのは、色白の茶髪な男性。

細身で、黒のジャケットを着ている。

「さっさと失せろ」

もう一人の男性は、その手に木刀を持っていた。
がたいの良い体格、長髪の赤髪、着ているのはまさかの特攻服っ!?

「オカシオンナ、オマエモウヘバツタノカ?」

ジョンソン、アキコに向かってニタニタ笑い。

「うるさいカタコトっ! まだまだ行けるわよっ!」

そう言って刀を構えるアキコ。

「中臣と施仗はともかく、政長と吉崎は厄介だな……」

結晶は一粒の汗を流す。

「……ここは一旦引くかねえ」

その時、結晶が一気に走り出した。

「……逃げるのか」

特攻服の男性……確か吉崎さん？ が逃げる結晶を追尾。

「政長、ちょっと銃貸せ」

「壊さないでよ」

そう言って黒ジャケットの政長さんって人が黒光りの無機質を吉崎さんに向かってパス。

ってか銃っ!?

「……チツ、ちょっと遠いな」

銃口を遠くの結晶に向ける吉崎さん。

しかし弾は撃たない。

「……よし、一旦こちらも引こう」

そう言ったのは政長さん。

「……………」

これは……一体何なの？

元素26 今回は説明回ですが飽きずに読んでね b y黒鉄徹哉

午後9時

石鉄高校、保健室。

俺は半ばアキコとジョンソンに連行される形で、学校へと来ていた。背中にケガをおい、意識のない琴浦さんは、政長さんのバイクで運んだ。

今さらだけど、アキコは真剣を持ってるし、政長さんは銃を持っている。

そもそも、政長さんと吉崎さんとは初対面。

アキコとジョンソンは至るところにケガを負ってるし。

これは一体、何なのだろうか……。

俺はとにかく、なるがままに学校へ。

「無事だったか？」

学校の保健室。

廊下は当たり前に暗く、電気がついていない。

静寂の保健室。

俺達以外には誰もいない。

目の前には、中澤の姿。

琴浦さんはケガの処置をしたのち、ベッドへ寝かした。

アキコとジョンソンもケガの処置。

吉崎さんと政長さんは椅子に腰掛けている。

「な、中澤先生。これは一体、何なんですか？」

俺は聞いた。

杵島先輩がお兄さんに連れていかれ。

アキコとジョンソンは杵島家の人間に襲われたらしい。

琴浦さんも杵島家の人間に襲われて。

俺共々やられかけた時に、見ず知らずの政長さんと吉崎さんに助けられ。

正直言って、脳内がパンク寸前。

「……黒鉄、お前にも全てを話さないとな」

中澤先生は辛そうな表情を見せる。

「……お前達を学校へ呼んだのは他でもない、杵島家の事についてだ」

杵島はがねは、裏社会の一角を握る、杵島の家に産まれた。

裏社会の家に産まれた以上、全ては裏の世界で生きる事となる。

杵島はがねは中学校まで、家と関係のある裏の中学校へと通っていた。

しかし、杵島はがねは裏社会を嫌った。

裏には自由がない。

そして裏には、人を思いやる気持ちがない。

元々理科が好きだった杵島はがね。

裏の世界で生きるためには、護身術や表社会からの干渉を拒むための知識を得る必要がある。

はがねはそれを嫌った。

人を信じず、己だけを信じる裏社会。

大好きな理科が出来ず、黒い知識だけを学ぶ裏社会。

はがねは家を飛び出した。

友達が欲しい。

理科を勉強したい。

ただ、それだけだった。

裏にはないそれだけを求めて、はがねは裏を出て、表へと旅立ったのだ。

そして、そんなはがねを保護したのは、たまたま杵島家と面識のあった中澤。

はがねの事情を知った中澤は学校近くのアパート1部屋を借り、はがねに貸した。

一人暮らし。

はがねはその後、中澤のツテで石鉄高校へと入学。

部活は化学部に入部。

先輩であり、はがね入学当時の化学部部长柚葉彩音や、入学当時の物理部部长の政長実時、そして実時の友人吉崎龍牙。

大好きな理科——化学を楽しむ。

そして、多くの友人達と学園生活を送っていったのだ。

そして今。

杵島家ははがね奪還のため行動を起こした。

後継者のために……

「杵島はがねはただ、自由が欲しくて家を飛び出した。裏社会を嫌って、家を飛び出したんだ」

中澤は続ける。

「しかし、杵島家は後継者のためにもはがねを連れ戻そうとしている」

俺は思い出していた。

夕方、杵島ギンに連れていかれる先輩の、あの表情を。

「はがねは本当は裏社会なんかには戻りたくはないんだ。けど、状況からして、みんなのために自らの自由を捨て、杵島家に戻ったんだと思う」

……くだらない。

「俺は裏ルートから杵島家の動きを察知したのが今日。政長と吉崎

に連絡して施仗、中臣の救助へと向かわせた」

……………。

「…………先に言っておこう」

その時、中澤の表情が変わった。

「杵島家の狙い。それは…………

はがねと繋がり深い黒鉄徹哉を殺害し、その他部員や知り合いを
拉致、監禁。

はがねにはそれを知らさず、表の組織が殺害監禁したと言うデマを
教える。

そうすれば敵討ちとして、はがねは裏社会の活動に精を出す。

つまりははがねの裏社会での意欲を上げるために、キミらは利用さ
れつつあるのさ」

バシッ！

その時、俺は机を殴った。

「…………中澤先生、俺は杵島はがねを連れ戻してきます」

「……………」

「今年の文化祭ね、ウチの部活はコスプレ実験教室をやるんです」

「……………」

「なのに、その発案者がいないとか、マジあり得ないんで」

「……………」

「だから今先輩がいる場所を教えてください」

「……杵島家は裏社会だ。一般人なんか簡単にやられるし、そもそもお前は殺害ターゲットにされてんだぞ？」

「そんなもん知りません。俺は杵島はがねに文化祭の責任をとらせるだけです」

その時、中澤が笑った。

「……バカめ」

「先輩をなんとしても助け出す！」

「テツ、包帯とれかかっている！」

「センパイ、マッテイテクダサイ！」

「はぁ、なんで俺まで……」

「……ヤツには昔に借りがある。だから今回は力を貸そう」

黒鉄徹哉

施仗明子

中臣ジョンソン

政長実時

吉崎龍牙

今、学校の校門に立つ。

『杵島はがねは今、町外れの村實山のふもと、村實ホテル内にいる

はずだ。今は杵島本家のヤツが出払っているため警備は手薄。狙うなら今だ』

中澤先生は元、杵島家の情報収集科にいたことがあったらしい。

何でも、杵島先輩が家出する事を事前に話した唯一の人で、その時先輩と一緒に杵島家を出たとの事。

俺達は今、中澤先生お手製の防弾ベストを着用し、耳には小型の無線。

「……あの」

『これは以前杵島家から出る時に使った戦闘道具の一部だ。いやあとおいて良かった』

「いや、その……」

『施仗、中臣、政長、吉崎は武道に通じ、なおかつ強い。黒鉄、お前はしっかり守ってもらえ』

「いやだからね、アンタは来ないのかと……」

『俺は琴浦さんをしっかり守っているから！』

「……………」

ちなみに琴浦さんは未だ意識戻らず。

傷は深い。

『いいか、杵島家は人1人殺しても無かった事にできるくらいの裏権力を持っている。だから死んだとしても助けるだけ無駄。だから俺は助けないからな』

つまりは自力で何とかしろと。

今回の目的は杵島先輩の奪還。

＋琴浦さんの敵討ち（あ、まだ琴浦さん死んでないよ！）

杵島先輩は俺達に迷惑が掛かるからと、自らの自由を捨てて杵島家へと戻っていった。

望みもしない裏社会へ……。

基本他人に迷惑かける事に定評のある杵島先輩。

……全く、何やってんだか。

俺は杵島先輩に文化祭をやらせるために、先輩を連れ戻しに行く。

それでいい。

とにかく、杵島先輩に会いに行こう。

「さて、行くか」

元素26. 5 説明回の補足的な年表的まとめ（前書き）

最近ちょっとごちゃごちゃしてきた本編。

ここで少し内容を整理してみましょう。

キャラごとに年表的まとめを作ってみたので、宜しくです！

元素26. 5 説明回の補足的な年表的まとめ

【杵島はがね】

（幼少時）

- ・裏社会杵島家の生まれ
- ・中学までは裏社会の中学校に通う
- ・中学時代、とある人物に出会い、理科に興味を持つ

（中学→高校入学時）

- ・自由のない裏社会に飽き、家出を謀る
- ・途中、当時はがねと仲の良かった情報収集科の中澤に密談。中澤と共に家出実行

- ・中澤のツテで石鉄高校に入学、アパートにて一人暮らし

（高校一年時）

- ・高校入学後、幼少の頃からの興味で化学部へ入部
- ・当時化学部部長の柚葉彩音と出会う
- ・当時物理部部長の政長実時にC1と言うあだ名をつける（後の絶叫の火曜日事件の事、本編12話参照）
- ・これが後の元素記号あだ名の第一号。

（高校二年時）

- ・化学部部長就任
- ・黒鉄、琴浦を拉致し半ば強引に入部させる。
- ・施仗、中臣はなあなあで入部。
- ・文化祭の出し物を独断で決める
- ・夏、杵島家現当主の杵島ギンに遭遇、仲間の安全のために杵島家へ

【黒鉄徹哉】

（高校入学時）

- ・杵島はがねに拉致され、あえなく化学部入部。
- ・ツツコミ役として頑張る。
- ・夏、杵島ギンと遭遇。無力にもはがねを助けられず
- ・中澤からの連絡を受けて公園へ。杵島結晶と遭遇、戦闘↓敗北
- ・途中施仗、中臣、政長、吉崎が助太刀。結晶を退ける
- ・中澤から学校へ来いと連絡。学校にて杵島家の過去を知る

【琴浦咲奈】

（高校一年時）

- ・ヒーローショーにて化学部入部
- ・ボンキュッボンで黒鉄の理性を苦しめる
- ・夏、公園にて杵島結晶と遭遇↓背中を斬られ意識不明に

【中臣ジョンソン】

（中学時代）

- ・ハーフのため、いじめを受ける。喧嘩の毎日の中で力をつける
- ・自分のキャラ作りのためにカタコト設定を作る

（高校一年時）

- ・将来を考えた上で化学部入部
- ・カタコトキャラは失敗だと気付かず
- ・夏、秋葉原帰りに杵島蛍と遭遇、戦闘
- ・敗北寸前の所で中澤から連絡を受けた吉崎に助けられる
- ・吉崎と共に黒鉄、琴浦の救助へ
- ・公園にて杵島結晶と遭遇↓撃退
- ・学校にて杵島家の過去を知る

【施仗明子】

（幼少時代）

- ・自らの両親指導の元、施仗桜花剣技取得

（高校一年時）

- ・黒鉄賄賂にて化学部入部
- ・化学部のムードメーカー的ポジションに
- ・夏、道場帰りに杵島黒磨と遭遇、戦闘
- ・敗北寸前の所で中澤から連絡を受けた政長実時に助けられる
- ・政長と共に黒鉄、琴浦の救助へ
- ・一足先に公園到着、杵島結晶と遭遇、戦闘
- ・後に中臣、政長、吉崎の助太刀。結晶を退ける
- ・学校にて杵島家の過去を知る

【中澤】

（教師就任前）

- ・とある理由から裏社会杵島家の情報収集科に配属
- ・杵島はがねと知り合う。中澤自身理科が得意だったため、はがねと仲良くなる

- ・はがねの気持ちを知り、彼女と共に家出
- ・ツテで石鉄高校教師へ就任、はがねのためにアパートを借りる

（教師就任後）

- ・石鉄高校化学教師として働く
- ・一応化学部顧問
- ・とある情報網から杵島家の動きを察知、黒鉄に連絡
- ・施仗、中臣の危機を情報から知り、昔の教え子&知り合いである政長、吉崎に救援要請

- ・学校へ帰還したメンバーに杵島家の過去を話す
- ・昔の戦闘道具を持たせ、皆を杵島はがね奪還へ向かわせる

【政長実時】

（幼少時）

- ・幼少の頃から実時はメンタルが弱かった

（高校時代）

- ・三年時、当時一年の杵島はがねにC1と言うあだ名をつけられ、ノイローゼに
- ・そのノイローゼをきに徐々にグレだす
- ・学校卒業後、暴走族団結成。やる気のないメンタル弱い総長となる。
- ・卒業時、とある理由から中澤と杵島の過去を知る

（学校卒業後）

- ・暴走族の縁で吉崎龍牙と知り合う
- ・夏、突然中澤から救援要請。昔のよしみで救援要請受託
- ・町中にて施仗明子救助、杵島黒磨を撃退
- ・中澤からの要請で公園へ↓杵島結晶撃退
- ・学校へ行き、嫌々ながら杵島はがね奪還に参加

【吉崎龍牙】

（現在）

- ・地元の高校卒業後、暴力団へ
- ・とある縁で政長実時と知り合う
- ・情報網の縁で中澤と知り合う
- ・夏、中澤から救援要請、仕事として受託
- ・秋葉原にてジョンソン救助、杵島蛍を撃退
- ・中澤からの連絡で公園へ。杵島結晶撃退
- ・工作上、杵島はがね奪還作戦に手を貸す

元素26. 5 説明回の補足的な年表的まとめ（後書き）

次回よりついに「杵島はがね奪還作戦実行編」スタート！

なんとバトル主体の胸アツストーリーです！

元素27序章 物語は静かに動き出す

村實ホテル

町の外れにある小さなホテル。

そこの201号室、シックな洋室のその部屋に、彼らはいた。

「結晶、黒磨、蛭、金造、紫乃。明日の朝一番の飛行機で大阪まで飛ぶ。遅れるなよ」

杵島ギンは室内にいるメンバーを一瞥。

部屋のソファーには五人の杵島家の人間。

「ギン、そういえばはがねはどうした？」

結晶は自らの薙刀の手入れをしながら、ギンに問う。

「はがねか……隣の部屋で大人しく寝ている」

ギンはそう言うと、部屋の窓から外を見た。

外は既に暗く、町の明かりが幻想的だ。

「……ハッ、杵島のおもちやの分際で生意気な野郎だ」

ギンは笑っていた。

目を細め、窓ガラスに写った自分を見ながら。

「……全く、兄と妹は全然似てませんね」

そう言ってソファーに腰を掛けているのは、見た目二十歳くらいの女性。

スレンダーな体型に、黒のストレート。

「……なんだ紫乃、お前分かってるじゃねえか」

ギンは女性——杵島紫乃の方へと振り向いた。

「確かに俺とはがねは似ていない。血は繋がってんのかな」

「まあ、私ははがねよりもギンさんに着いていきますけどね!」

紫乃はギンの側により、べったり。

「ギンさんこそ杵島の主。私達の希望」

「紫乃、酒飲んだか? アルコールの匂いがする」

「年代物の赤ワインを少々」

頬を赤く染め、ギンに身を委ねる紫乃。

「……人前でいちゃいちゃしてんじゃねえよ」

その時、黒磨がソファーから立ち上がる。

「金造、行くぞ。こんな所にいたら脳が腐る」

黒磨の呼び掛けに金造——牛溪金造が反応、黒磨の後について部屋から退室。

「……相変わらず黒磨はクール、金造は無口だな」

ギンはテーブル上にあった赤ワインを一口。

「あらギンさん、それ私のグラス……」

「別にいいじゃねえか、グラスくらい」

グラスの中の赤ワインを飲み干し、ギンは一息。

「牛溪金造……代々杵島家の守護に仕える武道一家牛溪家の次期当主……ってかやっぱり牛溪家の連中は皆無口だな」

空のグラスに写るのは、ギンと紫乃の姿。

「……蛭、はがねに夕食でも持っていけ」

ギンはソファーに座り、漫画を読んでいる蛭に命令。

「夕食？ 別にいいけど……」

読んでいた漫画を閉じ、素直に言うことを聞く蛭。

机の上に置いてあるトレイを持ち出し、適当に料理を小皿に乗せる。

「えーっと、姉貴は漬物とかが好きだから……」

蛭は和食中心の料理を乗せ、そのまま部屋を後にした。

「……そろそろかな」

同時刻、村實ホテル裏の小高い山。

その麓の一本の木に寄りかかる、人影が1つ。

「……はがね」

その人影は、ぐっと右拳を握っていた。

「……絶対に助け出してあげるからな」

その人の瞳は、とても力強く輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9600p/>

元素な彼女と記号な俺

2011年11月15日01時50分発行